
結婚逃走曲

なお

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

結婚逃走曲

【Nコード】

N0821Q

【作者名】

なお

【あらすじ】

『結婚？そんなもんしたきゃ、他の女としな。あたしは、変態の嫁になる気なんて更々ねーよ！！』

『意地悪ばっかり言っていると、お仕置きしちゃいますよ？。』

逃げる女と追う男、果たして勝つのはどっちだ？

Episode 1. 『逃走』 (前書き)

こんにちは (・∀・)

新年あけましておめでとーございます

新年早々、間宮くんの続きを書きもしないで、新連載を始める馬鹿な作者でございます (・∀・)

自由気ままに始めたので、長編にはならないと思いますが、よかつたら読んでやって下さい。

ちなみに、私の小説において初の女主人公となっています (・∀・)
恋愛小説などと呼ぶにはおこがましいですが、そっち方面で頑張っていると思いますのでよろしく願います (・∀・)

では、スタート

Episode 1. 『逃走』

『結婚は、人生の墓場だ…』

自棄酒を飲みながら、一番上の兄貴がそう言っていたのをよく覚えていた。その二年後に、これまた全く同じ言葉を、泣きながら2番目の兄貴も言っていた。

そういえば、この前見たテレビ番組でもそんな事を言っていたっけ。お前らどれだけ虐げられた生活してんだって、その時は毒づいてやったけど、よくよく考えてみれば、まあ確かにこいつらの言うことも一理ある。

あたしは、腐っても女だから、男が考える『墓場』なんてもんは知らんが、毎日、朝早く起きて夫の飯作って、飽きも足らずピカピカになるまで家中掃除して、仕事から帰ってきた夫にまた飯を作って…。

もし、自分が結婚したら、そんな馬車馬のような終わりの来ない毎日を送るのかと考えると、ゾツとする。まさしく『墓場』だ。

だから、あたしは結婚なんてしないし、これまでに付き合ってきた男には、結婚の意思がないことを明確にしてから、了承させ、付き合ってきた。歴代の男は、皆それを守ってきたし、あたしと似たり寄ったりの考えをもつ者ばっかだったので、案外楽に付き合ってた。ごく稀ではあるが、男の方に結婚願望というモノが芽生えた場合は、向こうから別れを切り出し、それに頷いて、ハイさよならと、非常に軽いではあるが、後腐れなく別れる事ができた。だから、だ。

だから、これからもこんな生活を送れると高を括っていたツケが今ごろになって廻ってきたのか？

「どうしたの？響子さん。」

フワッと、優しい笑顔で、あたしにそう問いかける男、現在進行形であたしが付き合っている優男だ。

本来ならば、こんな顔だけが取り柄なひ弱眼鏡男と付き合ったりしないのだが、まあ：あれだ。その日、仕事で嫌な事があってむしゃくしゃしていたあたしは、誰でもいいからと、酒の席でたまたま隣になった優男を無理矢理ハシゴ酒に付き合わせた方がいいが、3軒目で意識が完全に吹っ飛び、朝、強烈な頭痛と共に目を覚ましたら、隣にこいつが寝ていて、更に、お互い裸だという何とも笑えないオプシヨン付きに、頭が真っ白になったあたしに、責任とって付き合ってた下さいと、泣きつくこいつに、訳が分からないままに付き合う事を了承してしまった。

そんなアホみたいな出会いだからこそ、速攻で別れてやると試行錯誤して、いろんな作戦を立てては実行しているのだが、ことごとく打ち砕いていれるがこの男。

見た目よりは結構根性があるみたいで、何をされてもめげない。それどころか、これは愛の試練などと、不可解且つ不愉快な言動で巧みにクリアしていく様は、何とも腹立たしい。

「おい？響子さん？聞してる？」

そもそも、この男はあたしの何が良くて付き合っているんだろうか？兄弟5人：しかも、あたしを除けば後は男ばかり。そんな環境で育った女が、おしとやかに育つわけがなく、口は悪いし気性が荒く手が早いのが最悪三拍子が揃ってる上に、顔は：美人じゃない普通だ。じゃあ、一体何がいいのか？謎だ。

「あ、そっか！！固まるぐらい嬉しかったんだね？俺のプロポーズ。」

「んなわけあるか!？」

そうだ、今はあたしのことについてあれこれ考えてる場合じゃなかった。そんな些細な問題よりも、今、即座に解決しなければならぬ問題はただ一つ。

「ええー？何が不満なんですかー？」

ぷー、と顔を膨らませて不満げにこっちを見ってくる。なんだその面は？そのインテリ眼鏡叩き割ってやろうか？

「不満だらけだよ、てか不満しかねーよ。言ったよな？あたしは、結婚は絶対にしないって？言ったよな？お前、それでもいいですって？」

「え？俺、そんな事言いましたっけ？」

(か、鴨志田ー!!！)

俺、分かんない!!！と、惚けた顔に甘えた声を出すこの男に、うつすら殺意さえ覚えてくる。しかし、あたしも、もういい大人だ。本来の自分ならば、ボコボコにしてさっさと別れてやるのだが、それではあまりにも大人気ない。だから、優しく口頭で示唆してやってるのに、こいつには全く伝わらない。それから、あたしが実力行使で別れられない理由がもう一つ。

「もういいじゃないですか。そんな細かい事は忘れましょ?…それより、結婚式の日取りいつにします?あ!響子さんは、着るなら

白無垢？それともウエディングドレス？この際、両方着ちゃいますか？」

「両方着ねーし、結婚式なんてもんは一生ねーよ！！」

「ええ！？何が気に入らないんですか？俺、一生懸命頑張ってるのに？もう、意地悪言わないで下さいよ……………きょーこさん？」

「……………っ！！」

お仕置きしちゃいますよ？などと、今までヘラヘラしていた優男が、声色を更に低くして、妖しく笑う変態へと変貌する事に、ほんのちよつとだが、きょ、恐怖というものを覚えている。…それが、なかなか実力行使を執行出来ない最大の要因である。

「俺と、きょーこさんは、運命の赤い糸で結ばれてるんです。だから、ふたりは結婚しなければいけないんです。」

「む、結ばれてねーよ！？てか、赤黒い糸しかあたしには見えねーよ！？」

「よかったー！！きょーこさんにも見えるんですね！！やっぱり、きょーこさんは俺の奥さんになるべくして生まれてきた人なんですねー！！」

「……………。」

ことごとく自分勝手に勘違いしやがるコイツとの会話は、腹立たしさを超越して、何かこう…疲れる。もう否定すんのもめんどくさ

くなる。けど、ここで心が折れれば待っているあたしの未来は、変態の嫁というポジションだけ。それは、何としても阻止せねばならない。

確かに、こいつへの愛が無いと言えば嘘になる。愛が無ければここまで付き合えないし、最初は、ただただ戸惑いしかなかったこいつとの関係も、変なもんで、時間が経つにつれて少しだけ愛着というものが湧いたことは事実だ。

しかし、そんなものは、ほんの1パーセントにしか過ぎなく、やっぱり残りの99パーセントはこいつへの溢れんばかりの憎しみが圧倒している。

よって、こいつとの結婚というモノは完全に論外なのだ。

このままじゃ埒があかないので、この問題は保留とし、お互い頭を冷やす為にも、とりあえずここは一旦家に帰ることにしよう。てか、一刻も早くこの場から逃げなければ、あたしの身にどれくらいことが降りかかるような気がする。

「何か、周りが煩くなってきましたね？場所変えますか？そうだし！！俺の部：ふたりの新居に帰りましょうか！！」

ヨイシヨ、と腰をあげ、懐のポケットからコーヒー代を払う為に財布を取り出すのかと思いきや、出てきたのは目映いばかりにピカピカに光る一個の手錠で、ああそうか、こいつはこんな優男でも一応刑事なんてやってんだっけと改めて思いつつ、しかし、その手錠は一体何に使うのか？と疑問視している間に、ガチャリと音がしたと思って見たら、あたしの右手に綺麗に嵌められていた。

「さ、帰りましょうか？可愛い俺の奥さん♪」

そう言い終え、こいつの左手に手錠が嵌められようとしている瞬間に、生涯において最大の危機能力が発揮されたあたしは、渾身の左ストレートを顔面めがけてぶち込み、変態の嫁になるくらいなら誰でもいいから他の男と結婚すると、泣きながら捨て台詞を吐きその場から逃走するのであった。

「…痛っいなア…もう、本当に照れ屋さんなんだから。きょーこさんは、」

「…守様、コレを。鼻から血が出ております。」

いきなり現れ、鼻血を垂れ流しながら尚も勘違いする鴨志田にハシカチを手渡すこの初老の男、終始二人のやり取りを隣の席でガン見していた、鴨志田家に仕える執事、トウドウギイチロウ藤堂儀一郎。

「ありがとう、儀一郎。」

「よろしかったのですか？響子様をそのまま行かせて？」

「構わないさ。きょーこさんが行くところは一つだからな。愛の力ってやつで分かるんだよ。」

「流石は、守様。鴨志田家の御曹司でございますね。」

「それに、あの手錠にはGPS搭載してるしな…あ、手錠だけじゃねーよ？俺があげた髪飾りもバックも靴も…至る所に仕込んであるから抜かりはない。」

「守様…ご立派になられて…藤堂は嬉しゅうございます。」

自分が仕える御曹司が、立派に犯罪者として成長していることに微塵も気づかない藤堂は、ただただ嬉しく目に涙を浮かべて微笑む。

「…しかし、きょーこさんのさっきの言葉は許せねーな。嘘でも俺以外の男と結婚するなんて全く笑えねーよな。」

どす黒い感情丸出しの鴨志田を見て、やはりまだまだ守様も子供ですな、と、全くもって場違いな事を考えている少しズレた考えを持つ藤堂だった。

「1ヶ月くらい監禁して、俺が、どれだけきょーこさんを愛してるかって囁けば、結婚承諾してくれると思うか？」

「ええ…それは勿論。守様の深い愛情に改めてお気づきになられますでしょう。」

「だな。俺が本気になれば、きょーこさんの意思なんて関係なしで結婚できるけど、そうしないのは、本当にきょーこさんを愛してるからって気づいてくれるよな？…よし、そうとなれば、可愛い俺の奥さんを迎えに行くか。ご両親にも挨拶しなきゃいけないしな。…あと不本意だがアイツらにもな。」

「では、早速、車を表に回して参ります。」

そう言うと、藤堂は、足早に車を取りに店を後にするのだった。

「…きょーこさん、待っててね。今から行くからね。」

そう優しく微笑む鴨志田の目は、全くといって笑っていなかった。

その頃、ものすごい速さで変態から逃走していた響子というと、全身GPS人間となっていることなど知る由もなく（全て鴨志田からのプレゼントを身に付けている為に）実家へと爆走していた。

つづく

Episode 1. 『逃走』（後書き）

いかがでしたか（・∀・）

まだ、始まったばかりなのですが…、これから鴨志田くんをド変態へとしていけたらいいかなって思ってます

それと、補足ですが、

響子さんは、なぜ嫌いな鴨志田くんから貰った物を身に着けてるかというと、自分の物を身に着けて貰いたい一心で、鴨志田くんが響子さんのいない間に私物を全部捨ててしまっ、ぶちキレる響子さんに、嫌なら裸で過ごします？てか裸でお願いしますと、笑顔で脱がしにかかる鴨志田くんの提案を、てか鴨志田くんを一蹴し、泣く泣く身に着けることになったのです。

こうして、響子さんは全身GPSのGPS人間へと進化しました（・∀・）

さて、補足も終わったことなので、続きを練りつつ、昼寝してきます（・∀・）

バイバイ

Episode 2. 『狂想』 (前書き)

こんばんは (・∀・)

続きが出来たので、更新します

鴨志田くんが嫌なやつになってですが、温かい目でみてやって下さい (・∀・)

それでは、スタート

Episode 2. 『狂想』

『結婚はゴールではなく、スタートだ。』

よく、結婚したての先輩刑事が偉そうに周りに豪語していた。

俺は、それを遠目に見ながら、何言ってるんだ？このバツ2野郎が、結婚に二度も失敗したやつがスタートだ何だと語るんじゃないかと、内心馬鹿にしていた。

先輩刑事を馬鹿にはしたが、別にその考えを否定したわけではない。ただ、結婚をしたいと思うほどの相手がいなかったし、結婚Ⅱゴールだという事が俺の考えには無かったので、じっくりこなかっただけのこと。

もとより、俺に近づいてくる女は、俺個人に興味があるというよりも、どうも親の金目当てというのが前提にあるようで、媚びを売ったり、色仕掛けで迫ってきたりと、頭の悪いやつが考える、下品な接し方しかしてこなかった。

まあ、それでも一応は男。非常に悲しいが性には勝てず、頭は空でも、女の顔と身体の相性が良ければ、その誘いにしばしば乗っていた。しかし、それも一夜限り。楽しむだけ楽しんだら、ハイさよならと、相手の有無を聞かずに別れを告げ、それでも尚、しつこく食い下がってくる女には、めったに見せない本性を見せ、二度と自分に近寄ってこれなくなるようにトラウマとして残してやった。

酷い男？それで結構。これが本当の俺だし、遊びと本気の区別すらつかないような馬鹿な女が、軽々しく近づいてきたのが悪いだけ。と、まあ…人に対して、どこかひねた考えを持つ事しかできない自分だからこそ、特定の女、ましてや本気で結婚を考える程の女を作ることは、これから先、限りなく0に等しいだろう。

そう思っていた矢先、俺は、生涯においてただひとりの、愛する運命の女と出会うのだった。

俺は、どうしても人数が足りないからと同僚に頼み込まれ、普段は必ず断っている飲み会に参加していた。

見渡す限り、同じような化粧に同じような服装、同じような仕草と、まるで、お前ら全員金太郎アメでも目指してんのか？と、ツツコミたくなるような個性のない女の集団がそこにいた。

（ん？何してんだ…あの女？）

その金太郎アメ集団の中に、一人だけ確実に場違いな女がいて、ジツと俯いたまま微動だにせずに座っていた。

（暗い女だな…、てか、何か気持ち悪いな？）

別段気になるわけではないが、金太郎アメを見るよりはマシかと、その根暗女の様子を何となく観察していた。

（うっ…、は、腹が…）

鴨志田が、何となく観察していた女こそ、彼が後に運命の女と呼び、立派な変態へと変貌させてくれる人物、木ノ下響子^{キノシタキョウコ}だった。

なぜ響子が、この飲み会に参加していたかという、人数が足りなくて困っていた親友が、何とか帳尻を合わせる為に、たまたま空いていた響子に、タダ飯食わしてやるからと誘い、それならばとその誘いに乗ってやって来たのだった。

鴨志田に観察されていることなど知る由もない響子は、飲み会が始まってからずっと、自分の腹に襲い来る原因不明の腹痛と闘っていた。

(な、何があつたんだ…？変なもんなんか食べ………ん？そう
いえ…ば……)

響子は、数時間前の長男とのやり取りを思い出していた。

たまたま実家に帰省していた響子が、母親に飲み会があるから食事はいらないと話していたのをコッソリ聞いていた長男は、可愛い妹に変な虫がつくのを心配し、本人にしてみたら余計なことこの上ない妹思いぶりを発揮し、パンに腹痛を促す薬を盛って、その醜態を見た男がドン引きし妹に近寄らないようにと仕向けるのだった。

(…殺す！マジ…兄ちゃん殺す！)

タダ飯を食べようと思って楽しみに来た飲み会を、長男の余計なお節介に潰された事に、深い憤りを覚える響子だった。

「守くんのお家って、すごいお金持ちなんだね…」

根暗女を観察しているのに夢中になっていた俺に、いつ隣に座ったのか分からない金太郎アメの一人が、そう声をかけてきた。俺は、その女の香水臭さに若干苛つきながらも作り笑いを浮かべて、そんなことない、と答えた。

「ええー？でも、みんな言ってたよ？すごいお坊ちゃまだってー？…亜弓、守くんのお家見てみたいな？」

ダメ？と、甘ったるい声で、これでもかという程、腕に胸を押し付け上目遣いで俺を見ってくる女にうんざりしていたら、根暗女の友達らしき女が、未だに下を向いたまま微動だにしない根暗女を心配したのだろう…どうかしたか？と、声をかけていた。ちようどいい

…この場をしのぐには。俺は、絡みつく香水女の腕を振り解き、徐に席を立て根暗女の隣に座り大丈夫か？と、心配する振りをし、思ってもいないがそう言葉をかけて肩を軽く揺すった。

「…触るんじゃねーよ…」

「…え？何…」

俺が言葉を言い切る前に、根暗女は俺の手を払いのけ、人でも殺せんじゃねーかと思うぐらいの目つき（なぜか涙目）で俺を睨みつけると、あたしに触んじゃねーと、地を這うような声でそう突っぱねた。

思ってもみなかった根暗女のその態度に、俺がポカーンと固まっていると、根暗女は、反対側に座っていた友達の女に、もう我慢の限界だから帰ると、制止する声も聞かずにさっさと帰ってしまった。

（何なんだ…あの女…何なんだ…この気持ち…）

今まで、女に睨み付けられたことはおろか、拒絶されたことなど一度もなかった俺は、新鮮すぎる根暗女の態度に戸惑っていた。そして、あの涙目で苦痛に歪んだ顔が忘れられなかった。

その後の飲み会はというと、全く上の空で、終始、根暗女のことですら頭がいっぱいだった。

飲み会の帰り、迎えに来ていた車の中で、俺は、根暗女に対する謎の感情を、執事の藤堂に尋ねてみた。

「なあ、藤堂…」

「はい、守様。」

「ある女の苦痛に歪んだ顔を見たら、体中がゾクゾクしてきて、グチャグチャになるまで泣かせて、俺しか見えないようにしてやりたいって思っちゃうんだけど、これって何？」

「守様…それは、愛でございますね。」

「…あ、い？」

「はい、ようやく、守様も愛する運命の女性に出会えたのですね。」

「…そうか、これが愛というものか…そうか…」

「おめでとうございます。お祝いにシェフに命じて赤飯を作らせましょう。」

（あの根暗女…いや、あの人が俺の運命の女、あれ？ヤバい。すげー心臓がドクドク言ってる。）

それからの俺の行動力は素晴らしいほど迅速だった。運命の女、響子さんのことを徹底的に調べ上げて、どうすれば彼女と恋人になれるか…いや、結婚出来るか、そのことを日夜考え続けた。そして、そのチャンスは突然訪れる。

いつものように響子さんを観察していたら、その日、会社の上司に嫌がらせを受けてむしろしゃしゃっていた彼女は、行きつけの居酒屋で大好きな焼酎を、かなりのハイペースで飲んでいた。俺は、すっかり出来上がった彼女の隣に座り、酔いつぶれて眠るのを待ち続けた。

だが、思いの外、響子さんが強くてなかなか酔いつぶれない。2軒3軒とハシゴ酒に付き合っている内に、やっと完全に意識を失った彼女を抱えて、そのまま自宅へと連れ帰るのだった。

彼女をベッドに寝かせた俺は、温めてきたある計画を実行する。

その計画とは、ふたりの間に既成事実を作ってしまうというもの。既成事実と言っても、無理やり事に及ぼうという事ではない。ただ、『朝起きたら裸でベッド』という事実が欲しいだけ。思い立ったら即行動がモットーの俺は、彼女の服を丁寧に脱がせて、自分も服を脱ぎ、朝起きるであろう事柄を楽しみにしながら眠りについた。

そして、朝、自分が置かれた状況に、頭が真っ白になって固まる響子さんに、責任をとって下さいと、泣いたふりをして交際を迫った俺だった。

面倒見が良い姉貴肌の響子さんだからこそ、泣いてすげれば決して嫌だとは言わないと分かっていたので、それを利用して、まんまと俺は、彼女の恋人になった。

響子さんは、結婚は絶対にしないそれでもいいなと言っていたが、俺にはそんなことどうでもよかった。付き合った時点で計画は、次なる段階に移っていたからだ。

その計画とは結婚。バツ2野郎が言っていたスタートというものに俺と彼女は立つのだ。

結婚嫌いな響子さんのことだ。俺に結婚の意思があると気付けば、十中八九別れたいと言い出すだろう。しかし、俺は別れてやる気など毛頭ない。俺の奥さんとなるべくして生まれてきた彼女を手放すわけがない。どんな手を使ってでも結婚してやる。

悪い男？それで結構。俺をこんなにも狂わせる可愛いきょーこさんが悪いだけ。俺を本気にさせた責任はきっちりしてもらわないと。

「藤堂、きょーこさんのご両親に手土産を買っていくから、どこかに寄ってくれ。」

「はい、守様。」

「あ、それと…これから一緒に住むから、きょーこさんが困らないように必要な物全て手配するように。」

「かしこまりました。」

「早くスタートに立てるように、俺、頑張るからね。きょーこさん♪」

可愛い奥さんの写真（盗撮）にキスをして、未来の義父母が住む家への手土産に、一個10000円の有名老舗ケーキ屋の高級ロールケーキを買いに、車を走らせる鴨志田だった。

つづく

Episode 2. 『狂想』 (後書き)

ここまで、読んでくれて

ありがとうございます (・∀・)

いかがでしたか？

こうして、鴨志田くんは変態になったという回でした。

予定では、10話完結にしようかなと思っていましたが……、
出来るかな？ (・∀・)

今、順調に3話を下書きしておりますが、日曜日ぐらいには更新で
きたらなと思います……、
出来るかな？ (・∀・)

ここで、補足説明です

ふたりの年齢ですが、

響子さん (30)

鴨志田くん (27)

と、年下設定です。

それでは、皆さん

また、次に (・∀・) サヨナラ

Episode 3. 『捕獲』 (前書き)

こんばんは (・∀・)

深夜の更新で申し訳ありません。

会話が沢山入っている為に少し長いですが、どうぞ読んでやって下さい (・∀・)

それでは、スタート

Episode 3. 『捕獲』

「あら？響子ちゃんどうしたの…いきなり帰ってきて？」

「母さん！！今すぐこの家の鍵という鍵を全部閉めて！！早く！！」

「まあ！！響子ちゃんてば、手錠なんかつけちゃって…脱走犯ごっこ？そしてママは共犯者役なのね！！」

「流石はママ！！いきなりの傍若無人すぎる響子の振る舞いをみて、即座に理解するとは…で、パパは何役だい？」

「何の役もねーよ！！てか、いいから黙って早くしろよ！？」

変態の魔の手から逃れたあたしは、一目散に実家へと逃げ込んだ。理由は簡単、安全だから。鴨志田も、両親がいる実家なら手荒なマネをする事はないだろう。なんせ、両親の前じゃ得意の猫被りで、変態のへの字も見当たらない爽やか眼鏡好青年を演じているからな。娘の男の正体は、実はただの変態などと、近所でも超がつく程有名な、この天然ほのぼの夫婦に見破れるはずがない。

普通の親は、娘が片手に手錠をつけて、必死な顔で息を切らしながら帰ってきたら、何かあったと思うだろう。だが、そんな普通なことがこの親には通用しない。脱走犯ごっこをして遊んでいるアホな娘にしか見えないのだ。

まあ、そんな親だからこそ、子供の頃から多大な苦勞を強いられてきたが、それも、今じゃ手馴れたもんだ。しかし、今のやり取りは緊急事態だからこそ凄く苛つときた。納得がいかない顔でブルー言っている両親をリビングに押し込め、苛々しながらも、今、

自分がどれだけピンチな状態かを多少の嘘を交えつつ説明した。

「…ということなんだけど、分かった？」

「守くんが、響子ちゃんに、結婚指輪の変わりに手錠を嵌めながらプロポーズしてくれたってことよね？」

「違う、全然違う。何聞いてたの？てか、あたしの話聞いてたの？鴨志田が、プロポーズを断ったあたしに逆上して、拉致しようと手錠をかけたって言ってんだろ！？」

「響子！？守くんのプロポーズ断ったのか！？何故あんないい子を！？」

「え？最初から聞いてねーのか？だから、鴨志田はいい奴なんかじゃねーの！！ド変態で一緒にいたらあたしの身が危険なの！！もし…てか、確実にあいつが家に来るから、その時は、親父は『帰れ変態、娘はやらん！！』母さんは『死ね、この変態が！！』って言うの！！分かった！？」

「「分かった！！」」

（……ほんとかよ。）

本当に分かったのか半信半疑だったが、ここまで走ってくるのに夢中だったあたしは、精神的疲労と肉体的疲労が山のように蓄積していたので、ひとまず体を休める為にも深い眠りにつくのだった。

どれくらい眠っただろうか？窓の外を見れば、すっかり日が暮れ

て夜になっていた。まだまだ寝足りないが、変態のおかげで朝から何も食べていないので、鉄の胃袋との異名を誇る我が腹は限界を超えていた。

（今日の晩御飯なんだろ…）

とりあえず腹ごしらえをしよう、後のことはそれからだ。ふたりが、鴨志田を追い返してくれているはず、しばらくは顔を会わせなくていいから、などと、楽観的に考えていたあたしが、階段を下りてやけに騒々しいキッチンのドアを開けたら、

「遅いぞ…響子。先に鍋始めちゃった。」

「響子ちゃん、鴨志田くんがお土産買ってきてくれたわよ？ほら、お礼言って？」

「響子さん、寝ぼけた姿も可愛いね。お邪魔してます。」

「……………何でいる？」

変態が、家族と一緒に鍋を囲っていた。

「何でって…もちろん迎えに来たんだよ？これ食べたらふたりの新居に帰ろうね♪」

「お、羨ましいなママ？惚気か！？」

「若いって素敵ねパパ！」

「……………親父、母さん、ちょっとこっち来てくれる？てか、来い。」

」
数時間前のやり取りは、いったい何だったのか？和気あいあいと
楽しそうにする変態と両親に軽い立ち眩みがし、何とも言えない怒
りが腹の底から沸々と湧き上がってきたあたしは、ふたりを隣の部
屋に呼び出して、どういふことなのかと問い詰めた。

「言ったよな？変態は追い返せって？言ったよな？分かったって
？」

「「だって…」」

「だって、何？」

「…守くん、ママが大好きな、息吹屋のごろうケーキ買ってきて
くれたんだもん！一個10000円よ！？そんな高級ロールケーキ
買ってきてくれる人に悪い人はいないわ！！」

「知らねーよ！？何だよ、ごろうケーキって？何味だよ？」

「ばかね…ロールケーキって言えばクリームに決まってるでしょ
？」

「どんだけ高級なクリーム！？金粉でも使ってるのか？」

「そんな邪道なもの使わないわ！！値段が高いのはごろうの手間
賃よ！！！」

「いいか？二度と買うなよ、そのケーキ？」

ごろうは、とりあえず後でシバく。それより今はもっと肝心なことを話さねばならない。

「酷い!! ごろうが愛情込めて作ったケーキなのに!!」

「ママ!! パパというものがあながら浮気か!?! 浮気なのか!」

「いやだわ…パパったら。パパが世界で一番素敵に決まってるじゃない!!…愛してるわ、パパ」

「ママ…!! 僕も愛してるよ!!」

「ちょっと黙れ。3分でいいから。」

なぜ、この緊急事態に両親のラブラブシーンを見せられなければいけないのか? ほんと、親じゃなかったら殴り飛ばしたいぐらいだが、そのことも今は忘れて、第一に優先すべき人物の話をしよう。

「親父? 何で娘はやらんって言わなかったの?」

「パパは、ちゃんと言ったぞ?」

「言ったなら何でいんだよ?」

「バカだな響子。その後、パパが守くんに、どうぞ上がって下さいって言ったからに決まってるからだろう?」

「お鍋は、みんなで食べたら美味しいもの。」

「「ねー!!」」

「……………」

この人達に、期待したあたしが馬鹿だった。普通の人間が出来る
ことが、この夫婦に出来るわけねーよな…。何を夢見てたんだ…数
時間前のあたしよ。

「…きょーこさん♪」

「ひっ!？」

両親のボケっぷりに気を取られていたあたしは、背後に鴨志田が
立っていることに気付けなかった。

(ヤバい…キレてる!!)

恐らく…と言うか、確実に聞かれたであろう今の会話に、笑顔で
はあるが、全く目が笑っていない…完全にキレている鴨志田がいた。
そして、作られた笑顔のまま両親に向かって、チャイムが鳴ったが、
誰か訪ねて来たのではないかと知らせた。

「お兄ちゃん達かしら？」

「おや、もうそんな時間か…」

「あ、ちょ…待っ…」

「少し話そうか?…此处で。」

怒れる変態を恐れて、玄関へ向かう両親について行こうとしたあたしだったが、ものすごい力の変態に、後ろから羽交い締めされ阻止された。

「…ねえー? きょーこさん…」

「うわ!?! お前…なにし…」

身動きが取れず、されるがまま状態のあたしをいいことに、へ、変態鴨志田は、み、耳に舌を這わして…あろうことか、み、耳の中に舌を入れてきやがった。

「や、やめろ!! お…親父たちがいるんだぞ!?!」

「じゃあ…言うことあるよね? この俺に、」

ほら、ごめんなさいって言ってみな? と、なぜか上から目線の変態の態度に、ピンチの状況にも関わらずムツとしたあたしは、こいつの反応など考えもせずに、ついいつもの調子で、『誰が言うか、死ね変態が』と、返してしまった。

「…ふーん…そんな態度とるんだ。じゃあ、いいよ。きょーこさんが泣いて許しを乞うまで全身舐め「ぎゃあああ!!」うそうそ言うー!! ちゃんと言う…」

「お前ら何やってるんだ？」

いよいよピンチか、と思ったその時：スパーン！！と、勢いよく障子を開け、不思議そうに声をかけて来たのは、次男の淳^{ジュン}だった。

「……淳兄、お、おかえり……」

「おう、ただいま。」

「貴様、妹から離れろ！！この変態め！！さ、早くこっちへおいで響子！！」

「しゅ…俊兄ち…グウェ！？」

いきなりの兄達の登場に、驚いた鴨志田の手が一瞬緩んだので、長男の俊^{ジュン}に助けを求めて飛びつこうとしたら、すかさず首根っこを掴まれ引き戻された。

「お久しぶりです…お兄さん方。」

「どーも。」

「貴様に兄と呼ばれる筋合いなどない！！」

鴨志田が変態だということを知っている兄達は、あたしが、こいつと付き合っている事に反対していて、特に、鴨志田に対する長男の俊の感情というものは、嫌悪感しかなかった。

また、同じように鴨志田も、あたしの兄弟を敵視していた。

「……っ!!」

「……………」

「ちよっと、そこのお二人さん…ガキみてーに睨み合うのはいいけど、早く飯食いに行かね? 母さんたちが待ってんぞ?」

睨み合ったままのふたりに挟まれて、動けない妹を哀れに思ったのか、次男の淳がそう言って助け船を出してくれた。

「……行こっか、響子さん。」

「あ、おい…」

淳の助け船に、一瞬表情を曇らせた鴨志田だったが、すぐに元に戻り、あたしの手を取ると、そのまま引っ張って歩いていく。

「貴様に食わす飯などないわ!! 帰れ!!」

「まあまあ…」

その後に、納得のいかない俊兄を淳兄が宥めながら続いた。

「もう!! 遅いじゃない…ママ、待ちくたびれちゃったわ!!」

「義母さん、すいません…お待たせして。」

「守くんは悪くないわ。どうせ、俊ちゃんが意地悪したんでしょ?」

「俊！！意地悪いかなぞ？みんな仲良くニッコニコだ！！」

「な、何で私だけが！？」

「「だって、俊^{ちゃん}だもん！！」」

お前ら双子かよと、思うぐらい息ピッタリの夫婦だった。

「さ、守くん座って…お鍋の続き食べましょ。」

「ほら、響子も。どこに座るんだ？」

「響子さん、俺の膝…」

「座らねーよ。」

「ま、響子ちゃんったら…照れちゃって！！」

「いや、照れてねーよ。」

「よ、ご兩人！！」

「……………」

「響子、ほらここ座りな。」

アホ3人の会話に付き合っていたら、余計に苛々するだけ…、さっさと淳兄の隣に座ろう。鴨志田が何か言いたげだが、無視だ、無視。

「そういえば、話の途中だったんだけど…響子ちゃん、今日から守くんと一緒に住むのよね？」

「グフッ!？」

「コラ俊!!汚いぞ?」

いきなりの母さんの爆弾発言に、びっくりした俊兄は、口からしらたきを吐き出しながら、あたしに、こういうことだと聞いてきた。

「こういうことも何も、鴨志田が勝手に言ってるだけだし…てか、この際はつきり言うけど、あたしは、結婚はしない。結婚したいなら他の女としな。」

「よく言った響子!!さすが我が可愛い妹だ。というわけだ、さっさと帰れ、この赤の他人が!!」

「響子さん…俺は、響子さんを愛してるから、響子さん以外の女の人とは結婚しないよ。だから、響子さんと結婚する。」

「おい、貴様!!私を無視するな!!大体な、貴様のような変態が響子を幸せに出来るわけなからう!!」

「幸せに失敗したお兄さんよりは数億倍マシだと思えますけど?」

「そうね…お嫁さんに逃げられた、俊ちゃんだけには言われたくないわよね。」

笑顔でサラッと嫌みを返す鴨志田に、追い討ちをかける母さん。

てか、何で母さんそっちの味方なんだよ？そこで落ち込んでんのあ
んたの息子だろ？長男は打たれ弱いって分かってんだろ？

「ま、俊ちゃん如きが、どんなに騒いだところで、もう手遅れな
んだけどね。」

「響子の荷物は、今ごろ…全部、守くんの家に運ばれてるからな
！！」

「……………は？」

何を言っているんだ、この夫婦は？あたしの荷物が鴨志田の家に
運ばれてるだど？聞き間違えたよな！？聞き間違えたと誰か言っ
てくれ！！完全に嫌な予感しかぜず、『いや、でも、まさか…』と、
恐る恐る鴨志田の方を見ると、

「これから、ずっと一緒だね…きよーこさん♪」

溢れんばかりの笑顔で、そう言われた。不覚にも、その言葉を聞
いた瞬間、体中の力という力が抜け、あたしは、そのまま意識を失
った。薄れゆく意識の中に最後に焼き付いたのは、もの凄いキラキ
ラした笑顔の鴨志田とは対照的な、これまで生きてきた中で初めて
見た、両親の黒い笑みだった。

「守くん、今の内に響子ちゃんを連れて帰っちゃって。起きたら、
暴れちゃうから。」

「じゃあ、お言葉に甘えて…義父さん、義母さん御馳走様でした…藤堂。」

「はい、用意は出来ております…守様の奥方になられるお方だ、丁重に扱うように。」

鴨志田の呼ぶ声に、どこからともなく現れた藤堂は、黒服を着た二人組に命令し、意識を失ったままの響子を車へと運ばせた。

「それじゃあ、守くん、1ヶ月間響子ちゃんをよろしくね。」

「口は悪いが、本当は優しい子だから。」

「…響子さんが優しいのは充分に分かってます。…じゃなきゃ、俺なんかと付き合ってくれませんから。」

では、失礼します、と、両親に一礼してから、鴨志田は、車に乗り込み響子の実家を後にした。

「本当にいい子ね…守くんは。」

「ああ、響子はいいいお婿さんに巡り会えたな。」

「パパったら、気が早いわよう。守くんも言ってたじゃない？いきなり結婚なんて事になったら、響子ちゃんが気後れしちゃうから、その前に、1ヶ月間響子ちゃんと同棲するって。結婚は、それからよ。」

「おや、そうだったかな？いかんいかん、年を取るとつい忘れっぽくなってしまふな！！」

響子が寝ている間に、鴨志田から、言葉巧みに多少の嘘を交えつつ話を聞かされた夫婦は、これから1ヶ月間、自分の娘が、同棲と言う名の監禁生活を強制される事など知る由もなかった。

「…どうしたの淳ちゃん？浮かない顔して…守くんに何か言いたかった？」

「よく言うぜ…、何も言うなオーラ出して牽制してたクセに。」

「あら、バレた？…だって、俊ちゃんならともかく、淳ちゃんが出て来ちゃったら話がややこしくなっちゃうんだもん！！」

「いいのかよ？響子が嫌がってたのにあんなことして？」

「バカね…ああやってママ達が背中を押さないと、響子ちゃんが、ちゃんと守くんと向き合わないでしょ？」

「向き合わないって…響子は別れたいんじゃない？」

「そんなの言うだけよ。響子ちゃんは、自分でも気がついてないだけで、守くんの事は大好きなはずよ。じゃなきゃ、いくら守くんが別れないって言ったって、そんなの聞かずにとっくに別れてるわ。」

「淳も、まだまだ女心が分かってないな！！」

「……そんなもんかね。」

絶対違うだろうが、嬉しそうに断言する両親を前に、間違っていると言いきり出してくい淳は、その言葉を濁した。そして、そんな両親のおかげで、これから大変な目に遭わされるであろう妹に、心の中でエールを送った。

一方、その頃、鴨志田はというと、未だにショックから目を覚まさない響子の頭を膝に乗せ、一点を見つめたまま何やら考え込んでいる。彼のその行動を、ミラー越しに見ていた藤堂が、気になって声をかけた。

「……いかがなされましたか？」

「いや…ただ、」

そう言っただけで鴨志田は口をつぐんだ。彼の頭の中には、次男の淳が浮かんでいた。長男の俊と睨み合っていた時、淳が口にした言葉を、思い出していた。

『ちょっと、そこのお二人さん…ガキみてーに睨み合うのはいいけど、早く飯食いに行かね？母さんたちが待ってんぞ？』

確かに、あの言葉は、俺と俊の二人を指した。だが、どう考えても、あれは俺だけに向けられた言葉にしか思えない。何故なら、奴の目が、俺の目だけを捉えそう言ったからだ。

『クソガキが。』口にはしないが、目の奥がそう語っていた。

言ってくれるじゃねーか、お兄さんよ。可愛い妹が、俺みたいな性悪男に奪われるのが腹立たしいっていう気持ちは分かるよ…あながち間違っていない。だが、一つ訂正だ。奪うんじゃない、返してもらうんだ。だって、この人は生まれた時から俺のものなのだから。

「ね、きょーこさん♪」

愛する人の髪を優しく撫でながら、やっと自分の手元に帰ってきた彼女との、これから始まる（監禁）生活のことを考えると、嬉しくて仕方がない鴨志田だった。

つづく

Episode 3. 『捕獲』 (後書き)

ここまで読んで下さって、ありがとうございます (・∀・)

いかがでしたか？

急いで仕上げたんですが、おかしいところはなかったでしょうか？

1&2話は、独白文だったのですいすい書けたんですが、会話文が入ると、なかなか思うように書けませんね (・∀・)
しかも、登場人物が多いと余計に書けない。

なので、4話からは、二週間に1話ぐらいの感覚で更新していこうかと思います (・∀・) それまでに出来たら、すぐ更新しますね。

そして、ここで、

恒例の補足です (・∀・)

響子さんが寝てる間に、鴨志田くんちに荷物を運んだ業者さんは、ごろうが副業で経営している引越し屋さんでした。

ごろうケーキを買いに行くついでに、勝手に作った合鍵を渡して、頼んでおきましたとさ (・∀・)

むしろ、引越しの方がメインで、ケーキはついでみたいな。

さて、ここまでくだらない話に付き合ってくれてありがとうございます
ました (・∀・)

それでは、皆さん

また次の話で (・∀・) サヨナラ

Episode 4. 『条件』 (前書き)

こんばんは、

深夜の更新すいません (・A・)

順調に4話が出来たので、

読んでやって下さい (・A・)

それでは、スタート

Episode 4. 『条件』

「響子さん：朝だよ？朝食が出来たらから起きて。」

眠っているあたしに声の主は、優しい香りと共に夢から呼び覚まそうとする。焼けたパンに温かい珈琲、これは：ベーコンエッグか。どれも、あたしの大好きなもので、朝、どんなに時間がなくても必ず食べて会社に行く。

ズルイ：あたしの好物を知ってて誘惑するなんて、よくある映画のワンシーンみたいに、あたしは、ゆっくり目を覚ま……………すわけがなかった。

おいおい、そんなんで、目を覚ますなんて思うなよ？てか、目を覚ましたら最後、自分が置かれている現実と向き合わなければいけないのは必至。だから、このまま夢の中に逃げ込んでやる。

「……………そっか、そういうことね。」

何がそういうことだ？もしかして：寝たふりしてるのがバレたのか、と、緊張で息をのんだあたしをよそに、

「響子さんも、情熱的だね？朝から誘ってくるなんて。そんな淫乱響子さんのお言葉に甘えて……………」

ヨッコイショ、と、寝ているあたしの上に跨り項にキスをする。誰が淫乱だ！？ぶっ飛ばすぞこの野郎……………って、あれ？これっでもしかしなくても、ピンチ？せから始まってすで終わる、男と女の裸のコミュニケーションに持ち込もうとしてるのか？

「大丈夫だよ……………ベッドから出れなくなるぐらい気持ち良くしてあ

げるから。」

そう、変態に囁かれた、あたしのその後の行動は、疾風の如く早かった。跨る変態を力いっぱい突き飛ばし、急いでベッドから這い出て、いつの間に外したのか分からないブラのホックを留め、間合いを取った。そんなあたしを見て変態は、少し残念そうに、でも楽しそうな顔で、おはよう、と、微笑んだ。

「朝食が冷めないうちに食べよう。」

そう言い残してキッチンへと向かう変態に、何だか拍子抜けしたあたしは、しばらく考えてから、昨日の夜も結局ご飯食べられなかったしな、と、誰に言い訳するでもなくキッチンへと向かった。

「…ふふっ♪」

「……………何だよ？」

気持ち悪い笑い方してんじゃねーよ？てか、見てんじゃねーよ。黙々と朝食を食べる姿を、飽きもせず、ただジッと見つめてくる鴨志田の視線が、物凄く気になる。

「いや、幸せだなんて…、朝からこうして響子さんと一緒にいるコトが。今、俺は世界で一番の幸せ者だよ。」

な、何てこっぴどかしいやつ！！全身が痒くなるような台詞をサラリと言いやがって…キザったらしいのも大概にしろよ？ま、まあ……不覚にも、ほんのちよっとだけときめいてしまったけど、これ

はあれだ。生理現象みたいなもので、まだ、あたしが女を捨ててないっていう立派な証拠だ。だから、断じて、コイツのことが格好よく見えたとかじゃない。

何だか急に恥ずかしくなったあたしは、それを隠すように視線を白い壁に掛けられた時計に合わせた。

（もう…9時か…え？9時！？）

「どうしたの、響子さん？」

「どうしたじゃねーよ！！早く仕事に行かないと！！もう、9時だぞ！？完璧遅刻じゃねーか！！」

慌てふためくあたしとは対照的に、優雅に珈琲を飲み続ける鴨志田を不審に思い、尋ねた。

「…何で、そんな落ち着いてるんだよ？お前だって仕事だろ？」

「仕事？俺、辞めたから。」

あっけらかんと言う鴨志田に、驚くあたしは、更にその理由を尋ねた。

「理由？可愛い奥さんに苦労はかけたくないからね。だから、父親の会社に就職することにした。」

「そうか…あたしには関係ねーけど、お前の奥さんになる人（いろんな意味で）苦労させるなよ。」

「アハハ、大丈夫だよ。安心して俺の奥さんになってね。」

「だから、ならねーよ。」

それから5分間、なる、ならないと、ふたりの会話は平行線を辿り続けた。

「って、こんなことしてる場合じゃない！！早く用意しないと！！」

「無駄だよ、響子さん。」

「確かに遅刻決定だけど、休むわけにいかねーだろ？」

「じゃなくて、今日から響子さんは無職だから、行く会社なんてないよ？」

「無職？あたしが？こいつは何を言ってるんだ？変態過ぎて、ついに頭がパーンになったのか？」

「今朝、響子さんの会社に、退職願いの電話しといたから。ちゃんと受理されたよ。」

「お、おま：な、ええ！？」

平然と言ったのける鴨志田に、突然の無職宣言をされたあたしの思考回路はショート寸前で、言いたいことが山ほどあるのに、言葉が出てこない。

「荷物は、響子さんの実家に送ってもらうように、会社に頼んで

あるから。」

「ち、ちょっと待てよ！？意味分かんねーよ？何で会社辞めなきゃいけねーの？てか、これからどうやって生活して行くんだよ！？」

「何でって：響子さんは、俺と結婚するんだから働かなくてもいいでしょ？これからは、夫である俺が稼いでくるんだから、生活の心配だってしなくて大丈夫だよ♪」

おかしい：おかしいぞ？前々からおかしな奴だとは分かってたけど、ここまでとは：。全く笑顔を崩さない鴨志田に対して、少しの恐怖が生まれた。そんな、あたしの心を見透かしたみたいに、鴨志田は、

「何も怖いことなんてないよ？これが、ホントの俺だもん。」

「こんなことしてもいいと思ってるのか？お前、これ犯罪だぞ！？」

「そうだね：犯罪だね。けど、俺言ったよね？きょーこさんと結婚するって。愛してるのはきょーこさんだけって何回も。：でも、きょーこさんは相手にしてくれないし、挙げ句の果てには他の男と結婚するなんて言うし。すごく傷ついちゃった俺。だから、俺が、どれだけ本気か、きょーこさんに分かってもらうには、どーしたらいいのかなって考えた時、そうだ！！四六時中一緒に居てもらおう、それにはきょーこさんを閉じ込めておく必要があるから、ここに監禁して少しずつ分かってもらえばいいんだって答えにたどり着いたんだ。」

冗談じゃない、そんな理由で無職にされて、おまけに監禁までされて！！その行動のどこに愛があるというのだ？シバく…こいつ、マジでシバく！！

あたしの中で、鴨志田に対して、恐怖よりも怒りの感情が支配した。

「…でも、俺も鬼じゃないから、まさかとは思うけど、万が一、きょーこさんが本気で嫌がってるっていうんだったら、この場所に繋ぎ止めておくのは可哀想だなんて思うんだ。」

「あたしは、その『まさか』に、まさかだよ。」

あれだけ嫌だと声を大にして言ってたのに、全く気づいてなかったのか？

おいおい、お前は、どれだけ都合のいい頭の持ち主なんだ。

「だから、俺ときょーこさんで賭けをしよう。」

「……賭け？」

「そ。俺は、この同棲生活で、きょーこさんの気持ちを必ず変えてみせる。そして、1ヶ月後にプロポーズした時、あなたに『結婚する』と言わせる。そしたら俺の勝ちで、晴れてふたりはゴールイン。」

「で、あたしは、この監禁生活を忍び耐えて、1ヶ月後のプロポーズで、今度こそ、はっきりと、完膚なきまでに断ればいいんだな。そしたらあたしの勝ちで、晴れてお前とグッバイ。」

何か出来すぎた話ではあるが、1ヶ月間だけ耐えれば、自由の身。
……あたしの気持ちが変わることは絶対ないし、

「どうする？ きょーこさん♪」

「もちろん、乗る。」

この賭け、悪いがあたしの勝ちだな。

「じゃあ決まり。この条件に目を通してね。」

「分かった………ん？ 条件？」

そう言うと、鴨志田は、ポケットから一枚の紙を取り出し、あたしに手渡した。

その紙には、結婚の賭けに対する条件と題して、次のように書かれていた。

1. この部屋から勝手に出たら結婚。
2. 晩御飯は、必ず作る。出来なければ結婚。
3. 他の男（兄弟も含む）と話したら結婚。

「お前、なんだよコレ!？」

「ホントは、もっと書きたかったんだけど、これでも譲歩したんだよ？ ちゃんと守ってね♪」

「守ってね、じゃねーよ!？ こんな詐欺じゃねーか!？」

賭けの事など、端から頭にはなく、鴨志田の狙いはこっちだったのかと、この時、初めて自分がハメられたのだと分かった。

「無しだ、この賭けは無し！！最初に説明しなかったからな。だいたい、なんだよ？部屋を出たら結婚って？どこにも行けねーじゃん。晩御飯作れだど？お前なんかそこらへんの草でも食ってろ！！それに、最後！！他の男に兄弟が含まれてるのが意味分かんねーよ？兄弟だぞ？」

「たとえ兄弟でも、性別上は立派なオスだからね。だから、ダメ。それから、一度ご了承いただいたものは、無効にすることは出来ませんので、あしからず。」

しばし、悪徳商法のセールスマンと、それに引かれた客のような会話を繰り返して、悪びれる様子のない鴨志田に、最大限の怒りに達したあたしは、尚も賭けは無効だと食ってかかった。

「あたしは、こんな条件、絶対飲まないからな。賭けは無しだ！！」

「きょーこさん、」

「何だよ？」

「これ、な〜んだ♪」

そう言うと、またまたポケットからある物を取り出した。

「……………」

あたしは、それを見た瞬間、固まった。鴨志田が取り出した物は、おそらく犬用であろうと思われる赤い首輪と、銀色に輝く、見るからに頑丈そうな長い鎖だった。

「きよーこさんが、これ以上駄々こねると……条件4に、これを使用するって、書き加えちゃうよ？嫌だよ？俺も、嫌だよ……だって、これじゃあ恋人じゃなくて、ペットだもん。まあ、興奮しないでもないけどね♪」

なんだかホントに監禁みたいだね、と、暢気に喋る奴の目は本気だった。

「で、どうする？」

「…さ、さっきの、条件で…お、お願いしまーす…」

「ホント？ちょっと残念な気もするけど良かった。きよーこさんが物わかりがよくて♪」

与えられた選択肢など、皆無に等しかった。

「じゃあ、改めて…1ヶ月間よろしくね♪俺、負けないから。」

意気込む鴨志田とは反対で、早くも、気力が完全に削ぎ落とされたあたしは、1ヶ月間乗り切れるか不安でいっぱいだった。

こうして、理不尽な監禁生活が幕を開けるのだった。

つづく

Episode 4. 『条件』 (後書き)

読んで下さって

ありがとうございました (・∀・)

何とか4話まで終わりました (・∀・)

この前、更新は二週間後かなとかほざいてたのに、何か順調に出来て4日で更新しました。

もう、こんな奇跡二度とないと思います (・∀・)

さて、ここでいつもの補足を。

賭けの条件

その3にあった

他の男と喋ったら結婚。

ですが、

これに含まれない方がいるのです。

それは、響子さんのお父さんと

執事の藤堂さんの2人です。

この2人とは、喋ってもOKということです (・∀・)

それでは、皆様

いつになるか分かりませんが、

また次回の話で (・∀・) サヨナラ

Episode 5. 『天敵』 (前書き)

こんばんは (・∀・)

いつものように

深夜の更新で申し訳ないです

今回は、

次の話への繋ぎみたいなもんなんで、短いんですが、

どうぞ、読んでやって下さい (・∀・)

それでは、スタート

Episode 5. 『天敵』

「それじゃあ、行ってくるね。今日は、初出勤だから遅くなるかもしれないけど、響子さんの手料理が早く食べたいから、無視して帰ってくるよ。」

「いいよ、別に。そのまま帰ってくんなよ？てか、今日の晩飯カップ麺だからな？お前に食わせてやる手料理なんかねーよ。」

「いいよ、カップ麺でも。：俺に出せない程、響子さんが料理下手くそで、豚の餌みたいなものしか作れなくて恥ずかしいっていう気持ちは分かってるから。だから、俺我慢するよ。」

「ちよつと待てコラ？誰の飯が豚の餌だと？そこまでいうなら作ってやるよ：腕によりをかけてな！！今日の晩飯はお前の好きなものを完璧に作ってやるから楽しみにしてろよ！！」

「うん、楽しみにしてる♪」

つくづく単純で可愛い人だと、鴨志田はニヤリとほくそ笑んだ。そして、豚の餌呼ばわりされ怒りを露わにする響子の頬にキスをして、部屋を後にした。

キスされた箇所を真っ赤になるまで袖で拭いながら、響子は、二度と奴が帰ってきませんようにと、願いを込めてドアチェーンをかけるのだった。

「さて、邪魔者もいなくなったし：気晴らしに遊びにでも行くか。」

うだうだ考えつつあって仕方ない。嫌でも1ヶ月は、この生活に耐えなければいけないのだから。幸い、昼間は鴨志田も仕事でいないとなれば、ストレス発散の為にも、どこか遊びに行くしかないだろう。

『部屋を出れば結婚』の条件なんぞクソ食らえだ。要はバレなければいいのだ。あたしを見張る者は、誰一人としていないのだから。化粧も服もバッチリ、さあ、後はこの部屋を出るだけ…なんて、そんな甘い考えが通用する世の中ではなかった。

「奥方様…どちらに？」

一見、優しく穏やかに喋っているように見えるが、その中にはしつかりと、あたしを咎める声が含まれている。

あんな一体いつ入ったんだよと、困惑しながら、その声のする方に振り返ると、そこには、鴨志田家きつての切れ者執事、藤堂さんがいた。

「奥方様、おはようございます。」

「と、藤堂さん…お、おはようございます…」

「まさか、お忘れになられていないとは思いますが、そのドアを開けて、一步でも外にお出になられたなら、守様と即結婚という形になります…で、どちらに？」

「べ、別にどこにも行かないですよ？カギ…そう！ドアのカギをちゃんと閉めたか確認にきたんですよ！！今の世の中物騒ですからね…」

「そうでしたか…それは、失礼いたしました。では、玄関にはも

う用はありませんし、キッチンへ参りましょう。今、美味しいカプチーノを淹れますので。」

苦し紛れの言い訳が通用したとは思わないが、何とかこの場を凌いだあたしは、藤堂さんの後について、キッチンへと向かった。

「どうぞ…カプチーノです。」

「ありがとうございます…」

気まずい…すごく気まずいぞ。何でこの部屋にいるんだよ？てか、何しに来たんだよ？カプチーノを淹れる為に来たわけじゃねーだろ？突然の訪問に、困惑しかないあたしを察したのか、藤堂さんは、自分がこの部屋に来た本来の目的を告げた。

「守様の御命令により、これより1ヶ月間、守様が不在の時間は、私が奥方様をお守りいたしますのでご安心を。後、何か必要な食材や物がありましたら、お気になさらずになんなりとお申し付け下さい。」

すごく良いように聞こえるけど、言い方を変えれば、鴨志田がない時、ちゃんとあたしが条件通りに過ごしているかを、監視し報告する役回りってわけだな。あいつ余計なことを……てか、さっきからすげー気になってんだけど、奥方様って何？

「どうかなされましたか？」

「いえ…あの…その奥方様っていうのは？」

「そのままの通りでございます。響子様は、いずれ守様とご結婚なされて、鴨志田家ご長男の未来の奥方になられるお人ですから。」

「期待を裏切るようで申し訳ないんですけど、あたしは、鴨志田とは結婚しません。だから、未来の奥方にもなりません。」

「奥方様、ティラミスもいかがですか？」

「聞こえてるのに無視ですか？結構な音量で喋りましたけど？てか、結婚しねーって言ってんだから奥方様って呼ぶな！！」

さすが、鴨志田に仕える執事…主人に似て腹立たしいことこの上ない。都合の悪い話になると、すました顔で聞き流すところなんて鴨志田そっくりだな。

「いけませんぞ？仮にも守様の奥方様になるお人が、そのような汚い言葉を使つては？これでは、この1ヶ月の間に完璧な花嫁になるためにも、礼儀作法の練習もせねばなりません。」

駄目だ…、何を言っても聞く耳持たぬってやつだ。

「あ、それから奥方様にお伝えせねばならないことがございました。」

「…何ですか？」

「近々、守様の奥方様を拝見しに、妹君の美奈子様がいらっしゃいますので、何分失礼のないようにして下さい。」

「いや別に来なくていいですよ？ 拝見なんかしに来ないで下さい。」

「美奈子様は、年の離れた守様の事が大好きでいらっしやいまして、守様がお選びになられた花嫁を、是非ともこの目で見て、二人きりでお話をされたいとおっしゃっております。」

「つまり、大好きな兄貴の嫁になる女は、どこの馬の骨なのかをチェックしにくるっつーわけですね。」

何が二人きりで話がしたいだ、ついでにイビってやろうっていう魂胆が丸見えなんだよ。ま、黙ってイビられる程、ヤワに出来てるあたしじゃないんだけどな。

「十分休憩いたしましたので、それでは始めますか。」

「始めるって何を？」

徐に席を立ち、パチンと指を鳴らした藤堂さんの行動を不思議に見ていると、どこからともなく現れた黒服の男2人組が、大きな荷物を抱えて入ってきた。その荷物を藤堂さんの隣に置くと颯爽と帰って行った。

「藤堂さん：この荷物なんですか？ てか、今の二人組はどこから入ったきたんだ！？」

「これは、今から立派な花嫁になれるように、私も敢えて心を鬼とし、響子様を厳しく扱きあげる為の道具類でございます。」

「何それ！？ 今の今までほんわか爺さんみたいな雰囲気だったの

に、何で急に鬼教官のような目つきになってんの！？てか、薄々感づいてたけど…あ、あんたアレだろ！！実は、あたしのことすげー嫌いだろ！？」

「何をおっしゃいますやら。では、早速料理の練習からいたしましょうか：鴨志田家の次期当主に、豚の餌など食べさせられますまい。奥方様のようなお方が食べるのならまだしも、守様のお腹はデリケートなので、一流シェフが作った物しか口にすることがないですよ。」

あれ？これって、完全にイビられてるよね？妹にイビられる前に執事にイビられてるよね？遠まわしに悪口言われてるし…つか、豚の餌の件を知ってるってことは、ジジイは最初からこの部屋にいやがったってことだな。

「それでは、奥方様もおっしゃったように、今日は、守様の大好きな料理の一つ、コシードを作りましょう。あと、デザートにロスコン・デ・レジェスも。」

「すいません、それ何料理ですか？液体ですか？固体ですか？」

「おやおや、自分の夫の好きな料理を知らぬとは…とんだ恥知らず。それでは、鴨志田家の嫁は務まりませぬぞ？そんな無知な奥方様にはこれを差し上げましょう。私が監修いたしました鴨志田家料理辞典を見て、5分以内に2つの料理についてお調べなさい。ああ、そうそう…時間を過ぎればペナルティーが科せられますので。」

「……………」

もはや、ただのイビリと化したジジイは、荷物の中からタウンペ

ージよりも遥かに分厚い料理辞典を取り出し、あたしに手渡した。
その辞典を何ともいえない気持ちで見つめながら、結構、自分はヤ
ワに出来てるんだあと、心の底から知るのだった。

つづく

Episode 5. 『天敵』 (後書き)

毎度ありがとうございます(・∀・)

今回は、執事をテーマに書かせて貰ったんですが、何かただのイビリキャラみたいになってしまいましたね(笑)

なぜ、藤堂さんが響子さんにキツくあたるかというと、響子さんが鴨志田くんに嫌らしく接しているのに、内心腹を立てているからです(・∀・)

可愛い坊ちゃんになにさらすんじゃ!! 的な感じです。

そして、今回の補足ですが、小説に出てきた料理、

コシード

ロスコン・デ・レジェス

2つともスペイン料理です

コシードが肉や野菜を煮込んだポトフみたいな感じで、ロスコン・デ・レジェスがパンみたいなお菓子です

ざっくりした説明ですいません(・∀・)
私も受け売りなものでよく分かりません。

補足も終わったことですし、

それでは、皆様

また次に(・∀・) サヨナラ

Episode 6. 『兄妹』 (前書き)

こんばんわ (・∀・)

毎度お馴染み深夜の更新です

相変わらずの駄文ですが、

読んでやって下さい (・∀・)

それではスタート

Episode 6. 『兄妹』

「ちょっと、」

「……何でしょうか？」

「この紅茶ぬるくて飲めないわ。やり直して。」

「……………」

その種族は、遙か古来より存在する。

男性の前では、力いっぱい猫なで声に、いい子ぶりっこな振る舞い。しかし、自分と同性、つまり女の前では、何かが憑依したのではないかと疑うほど、目つき顔つき、声に態度、性格までもが一変する。

それに不快感しか示さない女達は怒り狂い『合言葉は裁き』と、その種族を一斉に責め立てるが、何とも皮肉なことにその行いが、何も知らないアホな男共の反感を買い、こちらが悪と見なされ逆裁きを受ける。そして、また怒り狂うという悪循環を繰り返す。

なぜ、女達はそこまで怒り狂うのか？その答えは簡単だった。その種族の容姿は、ほとんどと言っていいほど、綺麗もしくは可愛いに属する。そして、結構運動神経がいい。それに頭がよければ尚更だ。中学の同級生で、テニス部の主織ちゃんもそうだった。つまり、何が言いたいのかというと、早い話がただの僻みである。

「紅茶もろくに淹れられないなんて：お兄様は、あなたの何が良かったのかしら？」

だが、圭織ちゃんもここまでではなかった。どんなに心が腐っていても、少しは良いところがあった……気がする。

「それに、容姿も……可もなく不可もなくって感じだし。」

テスト中に落とした消しゴムも、こっそりと拾ってくれたし。

「その上、口は悪いし乱暴だし……ホント最悪ね。お兄様には相応しくないわ。」

何より、こんな溢れんばかりの殺意など沸かなかった。

「ほら、何ぼさつとしてるの？早く紅茶!!」

全く気が利かない嫁だと、文句を吐かれながら、小姑から突き出されたカップを見つめ、響子は、熱湯を注いだとびきり熱い紅茶を淹れて、その五月蠅い口を黙らせてやろうか？などと真剣に考えていた。

兄の嫁が、そんなことを考えているなど知らず、まるで、この家の主かのように我が物顔でソファーに座る小姑こそ、執事の藤堂が、近々拝見しにやってくると宣言していた、鴨志田の妹、美奈子だった。

なぜ、彼女が、兄の家で兄の嫁と対峙しているかという点、その理由は、さかのぼること二時間前の兄の発言からだった。

「今日、妹の美奈子が響子さんに挨拶するついでに遊びに来たいって言ってるんだけどいい？」

「ダメに決まってるんだろ？こちとら挨拶なんてねーよ。それに、あたしは今すげー忙しいんだよ？早く断れ。」

それは、とある日曜日の、クソ忙しい朝から始まった。

「えっ、でも…響子さんがOKすると思ってたから、藤堂が迎えに行っちゃった。」

テヘッと、何とも可愛らしいポーズをとる鴨志田に、2割増でイラついたあたしは、手にしていた折り鶴を片っ端から投げつけたい衝動に駆られた。

「ねえ、響子さん…」

「…何だよ？」

「さっきから気になってただけど、何やってんの？」

「見りゃ分かんたろ！？千羽鶴折ってたんだよ！！タイムリミットが今日の5時までだからな！！」

そう、あたしは今、あのクソムカつくジジイ（執事）の命令で、地獄の千本ノックならぬ、千羽鶴ノックを受けていた。

『鴨志田家の嫁たる者、手先が器用でなければ務まりませぬゆえ。不器用で使い物にならない奥方様には、私特製の極小折り紙で指先を鍛えていただきます。そうそう…明日の夕方5時までに折り上げなければ、ペナルティーとなりますので。』

笑顔で言い放たれ、渡された折り紙1000枚を握りしめたあた

しは、悔しさのあまり、必ず5時までに折り上げて目にもの見せてやるからなど、威勢よく啖呵をきってしまった。

「そっか…、藤堂は、真剣に響子さんのことを考えてくれてるんだね。」

「違うだろ？明らかに故意だろこれは！？」

でなきゃ、わざわざこんな折りにくい特製極小折り紙なんて用意するかよ！！5時までには、何が何でも折らさないつもりだろうが、意地でも折ってギャフンと言わせてやるからな！！

「だから、人なんて迎え入れてる暇ねーんだよ？さっさと執事に電話入れる。」

「仕方ないか…美奈子には、日を改めてもらうよ。」

「いや、もう来なくていいし。挨拶とかいらないし。」

鴨志田が携帯を取り出し、執事に電話をかけようとしたその時、

『ピピピ…ピンポーン！！』

と、来客が到着したことを示すインターフォンが、けたたましく鳴り響いた。

「…ごめん、響子さん。来ちゃったみたい……」

「……………挨拶したら帰らせろよ……」

「……うん!! 約束する!!」

叱られた犬のような目で、本当に申し訳なさそうに謝る鴨志田相手に、これ以上怒ることは何だか気が引けてしまい、ため息はしっかり吐きつつ、ホントは嫌だが渋々中に通すことを許可した。

「響子さん、妹の美奈子です。」

「はじめまして。いつもお兄様がお世話になっております。」

「あ、いえ…別に言うほど世話してないんで。」

ピンポンダッシュ並みに、インターフォンを連打してくるようなやつだから、どんな妹が入ってくるのか内心不安だったが、おじやましますと、玄関から鴨志田と共に現れたのは、モデルのようにスレンダーな体型の、大和撫子を想像させるような美しい女の子だった。

「美奈子、響さんは用があってお前の相手出来ないから、もう少ししたら帰れよ?」

「はい、すみません…お忙しい時に来てしまって。これ、ケーキ買ってきたので、良かったらお兄様と一緒に召し上がって下さい。」

なんて常識人なんだ。鴨志田の一族だから、ろくでもない妹なんだろうと、思ってたあたしがろくでもない。まだ、高校生だっていうのにしっかりした子だな…ホントに鴨志田と兄妹なのか? 橋の下に捨てられてたとかいうオチじゃないのか?

「そういえば、藤堂の姿が見えないけど…」

「そうでしたわ！…私ったら、響子様にお逢い出来ることばかりに気を取られて、大事な事を伝えそこねるところでしたわ。藤堂さんが、お兄様に至急お仕事についてお話されたいことがあるそうなので、車まで来て下さいっておっしゃってましたわ。」

「車まで…？別にここで話せばいいのに…」

「私たち部外者には、聞かれてはならないお話なのではないでしょうか？…響子様、お兄様たちのお話が終わるまで、ここで待たせていただいてもよろしいですか？」

「あ、どうぞ。鴨志田も早く行ってこいよ？急ぎなんだろう？」

「ごめんね、すぐ戻ってくるから！！…美奈子、おとなしく待ってろよ？響子さんに我が儘言っ困らせるなよ？」

「はい、お兄様。」

お前じゃあるまいし…こんな常識ある子が我が儘言うわけないだろ？なんて思いながら、鴨志田が部屋を出て行くのを、妹とふたりで見送った。

そう、その考えが甘かったのだ。

「美奈子ちゃん、こっち来て座っ……………」

「馴れ馴れしく喋らないで下さる？…………オバサン。」

「……………え？」

鴨志田がいなくなった瞬間、態度を180℃変えた妹に、我が耳を疑うあたしだった。

そして、話は冒頭に戻る。

「どうぞ……熱いんで、気をつけて飲んで下さいね。」

「……熱っ…、あなたホントに紅茶淹れるの下手くそね!! 加減を知らないの!? 火傷したじゃない!!」

「だから言ったじゃないですか? 気をつけろって。若いのに聞こえなかったんですか?」

よくよく考えてみたら、こんな小娘相手に下手に出ることはないのだ。なぜなら、あたしは鴨志田と結婚するわけじゃない。なので、気に入ってもらえるように媚びを売ることもないし、相手に与える印象が、最悪だろうが最低だろうが知ったこっちゃない。

それよりも、むしろこの状況をチャンスだと思わなければいけない。小娘に不躰極まりない行動を取り、怒らせ、あわよくば結婚を破談へと導いてくれる使者のような存在になってもらおう。鴨志田も身内が反対するのを無視してまで結婚は出来まい。

「これじゃあ、お兄様の嫁は最悪だったってお父様に報告しないとね。」

「それは、結婚に影響しますかね?」

「するに決まってるでしょう？きつと破談ね。お兄様には申し訳ないけど、お父様の言うことは絶対だから……って、何であなたそんなに笑顔なのよ？」

ほら来た！！……しかし、完全なる使者までには、もう少し怒りの要素が足りないな……もつと、不躰に行かないと。完璧に計画を遂行するには度が過ぎるくらいがちょうどいいんだが……。

「だいたい、あなたがお兄様に近づいた理由ってお金でしょう？」

「近づいてないし……むしろ遠ざかりたいぐらいだし。」

「今までもそうだったわ。財産目当ての女達は何も知らないような顔して、お兄様に近づいては交際や結婚を迫って……私は、いつも見てきたから分かるの……あなたもどうせ財産目当てだってね。」

「は？なに言ってんだ？財産になんか興味ねーよ……てかな、そもそも、結婚迫ってきてんのはお前の兄貴の方だからな、間違えんなよ……！！」

「いくら必要なの？いくらでも出してあげるから、お兄様にコレ以上近づかないでちょうだい……！！」

「いい加減にしろよ！……さっきから聞いてりや……金目当てじゃねーつつてんだろが？……まあ、百歩譲って仮に金目当てだったとしよう……それでも、あたしはやっぱりお前の兄貴となんて結婚しねーけどな……！！うだうだ言ってねーで、お前はあたしと鴨志田の破談だけを考えて遂行すりゃあいなんだよ……！！」

「……………っ!!」

あたしがそう言うと、酷く驚いたような表情で顔を下へ伏せ、小娘は何も喋らなくなった。

あれ？ちよつと言い過ぎた？ねえ、何で黙ってんの？何で動かないの？

「お、おい…」

微動だにしない小娘に、恐る恐る近づき顔を覗き込んだら、目にいっぱい涙をこぼしながら泣いていた。

なぜ泣く？泣く程のこと……………言ったのか？あたしが悪いのか？た、確かに…身内のことを悪く言われて傷つかないやつはいないよな。よ、ようし……………謝ろう。

「あの……………ご、ごめんね？た、確かに鴨志田の家は金があるから、それ目当ての女もいると思うけど、あ、あたしは…そうじゃない女もいると思う…よ？ほら、あいつ顔は良いし、優しい……………ことも、なきにしもあらずのような…、と、とにかだ!!金なんかより、あいつと本気で結婚したいと思う女はきつという。だから、もう泣くなんて!!」

「……………私、感銘いたしましたわ……………」

「……………え？」

「私は、てっきり響子様も財産目当てだとばかり思っておりまして……………しかし、財産になど全く目もくれず、ただただ、真摯にお兄

様を愛しておられるのだという事が、今の言葉でよく分かりました。お兄様は、本当に幸せな方です。こんなに素敵な運命の女性に巡り逢えたのですから。響子様……いいえ、それでは他人行儀ですわね。これからは、お姉様と呼ばせていただきます。至らない妹ですが、どうぞ……これから末永くよろしくお願いします。」

「なに！？意地悪したこと怒ってんの！？ねえ、怒ってんだろ！？だから、そんなこと言うんだろう！！」

深々と頭を下げ、勘違いに勘違いを重ね、急に態度を翻した小娘に、慌てふためいていると、タイミングが良いのか悪いのか分からないが、話を終えた鴨志田が帰ってきた。

「遅くなってごめんね……藤堂がなかなか終わらせないから長引いちゃった。」

「鴨し………」

「お兄様……私、お兄様とお姉様のご結婚、心から祝福いたしますわ……！」

「どうした……美奈子、急に？」

「お兄様のことをこんなにも大切に考えて下さり、また、愛して下さる方は、この世界中を探してもお姉様しかいらっしやらないですわ。」

「当然だろ？」

「いや、ちが………」

「ですから、何か粗相を働いて、お姉様に嫌われて結婚が破談にならないように、お兄様も十分気をつけて下さいね？私、お姉様以外の人は認めませんから……！」

「分かってる。必ず響子さんと結婚して幸せにしてみせるよ。」

「いや、それがすでに不幸………」

「さすが、お兄様ですわ……！お姉様の幸せは未来永劫安泰ですわね……！」

「おい、そこの兄妹……！人の話を聞………」

「お姉様……！ご安心下さいませ。私、これより家に帰って、お父様とお母様に、お姉様は素晴らしい女性だということを伝え聞かせて参ります。きっと、ふたりもお姉様の事を気に入り、鴨志田家の新たな一員として迎え入れてくれると思いますわ……！」

「美奈子、頼んだぞ？」

「はい……！それでは、お兄様、お姉様、今日はこれにて失礼いたします。お忙しいのに時間を割いて下さったお心遣いもちやんと伝えておきますわね♪」

「いい……！言わなくていいから……！そんな使者、望んでないから……！」

「美奈子に認めてもらえて良かったね、響子さん♪」

悪因悪果というかなんというか……妹の美奈子に対し悪意の塊で接してしまったことによる報い（？）を受け、晴れて両家公認の仲になった響子は、これで益々、結婚へと一直線に向かって進むのだった。

「どうでしたか？奥方様は。」

藤堂は、帰りの車の中で、美奈子に響子の印象について尋ねた。

「とっても素敵な女性でしたわ……あのお方ならば、お兄様のことを大切にして下さると思います。逢うのに渋っていた私でしたが、藤堂さんの粘り強い説得のおかげで、連れて来てもらった甲斐がありました。」

「それは、ようございました。」

「藤堂さんは、本当にお姉様のことを信頼なさっているのね。だから、私にふたりの結婚を認めてもらいたくて連れてきたのでしょう？」

「いいえ……私は、ただ、守様（の求婚を突っぱね続けるあの小娘に、目にものをみせてやりたくて）に幸せになっていただきたくて、それには、妹君の美奈子様（を連れて来たら、小娘の性格上、美奈子様に媚びたりしないので、きっと気に入られるだろうと踏み）の祝福が一番だと思い、奥方様（さすれば、旦那様や大奥様も結婚に賛成し、晴れて守様の願いが叶い結婚となるだろう）の元へ足を運んでいただいたのです。」

「藤堂さんは、本当にお兄様が好きなんですね。」

「^{だけ}守様が幸せになってくれることが私の幸せですから。」

響子のことなんぞ知ったこっちゃないと言わんばかりに、今回の計画を立てた張本人は、完璧に遂行できたことに満足し、美奈子と共に屋敷に戻るのだった。

そして、まんまと執事の計画に嵌り、失意のどん底に陥った響子は、結局5時まで千羽鶴も折れず、こちらも執事の思惑通りになり、後日、ペナルティーを受けるのだった。
つづく

Episode 6. 『兄妹』（後書き）

いつも、ここまで読んで下さりありがとうございます（・∀・）

今回、妹君が登場ということでしたが、どうでしたか？

本当は、もっと小姑感溢れるやつにしたかったのですが、それじゃあ、藤堂さんとキャラかぶっちゃうなアと思いまして、あっさり目にしました。

ここで、恒例の補足です

響子さんが、藤堂さんから受けた千羽鶴のペナルティーは、藤堂さんお手製の激辛青汁一気飲みでした（・∀・）
2時間は悶え苦しむ威力です。

そんな訳で、

また次の話をぼちぼち書いて、なるべく早く更新できるように頑張ります（・∀・）

それでは、皆さん

（・∀・）サヨナラ

Episode 7. 『佐藤』 (前書き)

こんばんは (・ω・)

3日ぶりですね。

更新が早いので

外は雨が降ってます (・ω・)

今回のサブタイトルを見て、
ん？と思われたでしょう。

私もあります。

30分悩んだ結果、

こうなりました (・ω・)

それでは、駄文ですが

読んでやって下さい (・∀・)

スタート

Episode 7. 『佐藤』

ピリリリ……と、どこからか固定電話の鳴る音が聞こえる。

この異世界に、電話なんてものが存在したのかと、音の鳴る方へ近づきながら、そんなことを考えていた。同棲生活という名の監禁生活を強いられてからというもの、外部との接触は愚か、唯一の伝達方法の携帯電話も取り上げられていたので、何だかこの電子音が酷く懐かしく感じた。

「これって……出てもいいのか？」

未だに鳴り止まない電話の前で、誰に聞くわけでもなく一人悩んでいた。さっさと出ればいいのになぜ悩むのか。それは、鴨志田と（無理やり）交わした条件のせいだった。『男と話をしたら即結婚』それが、頭に過ぎり出るのに躊躇ってしまう。しかも、こんな時に限って鴨志田とジジ……藤堂さんは、また車の中で仕事の話をしているのです、あたしを見張る奴がいない。

罨なんだろうか？これに出たら知らない男からで、あたしを罨に嵌める為に誰かを雇って、電話口で喋った瞬間、現行犯逮捕といわんばかりに二人で現れて、あれよあれよと言う間に結婚させられるんじゃないだろうか…。

そんな風に疑心暗鬼に陥るあたしだったが、止まることを知らず鳴り続ける電話に、もしかしたら、何か急ぎを要する電話が、鴨志田宛てに掛かってきているのではないだろうかと思い、もし仮にそうだとしたら、電話口の相手が、例え男であったとしても、それを理由に使えるし、全く関係なければ、何も言わずに電話を切ってしまえばいい…、そう自分に言い聞かせて受話器を取り相手に話かけた。

「も…もしもし…?」

『あ、響子? あんた電話に出るの遅すぎ…昼間から夫婦でナニや
ってたのよ?』

「……………」

『もしもし? 響子? もしもーし?』

「…一美、何の用?」

意を決して、恐る恐る出た電話の相手は、急ぎを要する者でもな
く、知らない男でもなく、あたしの幼なじみで親友の一美^{ヒトミ}だった。

『別に用はないんだけど、あんたに、おめでどうって言ってな
かったでしょう? 携帯繋がらないし、だから、守くんに聞いて家
の番号教えてもらったのよ。』

「おめでどうって何が?」

『またまた、あんた守くんと結婚したんでしょう? あんなに結
婚嫌がってたくせに…ちゃっかり、あんないい男と結婚しちゃっ
てさあ、親友のあたしに一言ぐらいあってよかったんじゃない?』

「いや、結婚してないし。てか、しないし。」

鴨志田の奴、あたしの親友にまでホラ吹きやがって…!!

『ええ？してないの？…守くんが、一緒に暮らしてるって嬉しうに話してくれたから、てっきり夫婦になったのかと思ったわ。』

「変態と夫婦になんて死んでもならないから安心してよ。」

『そんなこと言って…、あんたもあたしも、もう立派に三十路なんだから我が儘言ってるんじゃないのよ？守くんみたいに、金持ちで、顔が良くて、優しくて…まあ、多少変態だけど、あんなに愛してくれる人ってなかなかいないわよ？…それとも何？あんた、まだ佐藤くんのこと引きずってるの？』

「はあ？何で、そこで佐藤が出てくるの？」

『……………あんたは、自分の事に関しては、人一倍鈍いからね。』

「一美……………意味が分かんない。」

『あんたの結婚嫌いつて、佐藤くんと別れてからじゃない？だから、まだ好きなのかなって……………思っただけ。』

「冗談…、あんな男、もう懲り懲りだっつーの。それに、あたしが結婚しないのは、……………とにかく嫌だから！！」

そう、嫌だから。決して、あんな浮気男、佐藤隆行サトウタカユキのせいではないのだ。ソイツは、あたしが、初めて付き合った男で、本気で結婚を考えた男。高校卒業してから22の春まで付き合ったから、4年とちょっとの付き合いだったが、楽しい思い出など、とうの昔に風化してしまい、嫌な思い出しか残っていない。この男と付き合ったことは、いろんな意味で、黒歴史として闇に葬り去りたいぐらいだ。

『やっぱ…お前と結婚無理だわ。何か…ウザイ?』

それが、奴との最後の言葉。『ウザイ?って、あたしに聞かれても知らねーよ、死ね。』と、今のあたしなら返せただろうが、あの頃の乙女MAX時代だったあたしは、その言葉に、柄にもなく傷つき、しばらく飯が喉を通らないくらいだった。

まあ、初めての彼氏で少々浮かれてたというか…いろいろ若気の至りみたいな行動があったのは確かで、今、思い返しても、穴があったら出てきたくないくらい恥ずかしいし、ウザイと言われても仕方ないだろう…。

『…ま、それならいいんだけど。何かあったら言ってね?相談くらいは乗るから。あんた、昔から弱音吐いたりしないからね。』

「ありがとう…一美。」

やっぱり持つべき者は、親友だと、一美の言葉に、ジーンと胸を撃たれ感動したあたしだったが、先ほど発言したある言葉に引っこかり尋ねた。

「ねえ…さっき、鴨志田に聞いたって言ってたけど、何で一美、鴨志田の番号知ってんの?」

『何でって、あんた…そんなの守くんに、あんたの好きなモノや嫌いなモノ、男のタイプ、恋愛遍歴、その他諸々を全部教えてあげたのあたしよ?』

「情報リークしてたのあんただったの!?」

余計な事を……、突然、どす黒い顔した鴨志田が家に来て、どこで調べたのか、歴代の男の話をしだした日があったが、あの時は、マジで大変だったんだからな！？どうやって抱かれたのか、一日に何回やったのか、誰が一番気持ち良かったのかと、何故かそっちの話ばかり、根ほり葉ほりベッドの上で延々問いただされた時は、もう死ぬかと思った。

最終的に、鴨志田が一番だと、泣きながら無理やり言わされた時の屈辱感は忘れない。

『あ、でも安心して。佐藤くんの事は喋ってないから。』

「当たり前だ！！バレたらあたしの身に危険が及ぶだろ！？」

あの嫉妬の塊に、乙女MAX時代の頃の話などしたらどうなることやら。今度こそ、マジで、あたしは死ぬ。

『あんたに危険が及ぶかどうかは知らないけど、佐藤くんは確実に殺されるわね。』

アハハと、電話口で呑気に笑う親友に、怒れるあたしは、ミシミシと鳴るくらい受話器を強く握り締めた。

「一美！！あんた……、」

『あ、ごめん響子……今から合コンだからもう切るわ。じゃあね。』

「一美！？……マジで切りやがった。」

女の友情なんてそんなもんだよな……あたしより、合コンの方が大

事なんだよな。もういいよ…一美のばかやろう。

親友に対して、文句を吐きつつ受話器を置いて振り返ったら、

「……きょーこさん。」

「…ヒィィ!？」

目の前に鴨志田の顔面があった。

「おま、おまえ…ビックリするだろ!？声かけろよ!!」

「…ねえ、きょーこさん…佐藤って誰？」

「は？さ、佐藤?…あ!!お前、電話盗み聞きしたのか!？」

プライバシーの侵害だと、何回注意しただろうか。もう数え切れないぐらいに侵害されているから分からない。

「俺ときょーこさんは、夫婦なんだから、プライバシーなんて関係ないでしょ？」

「馬鹿野郎!!夫婦にだってプライバシーは必要なんだよ!!一人で何かしたいときだってあるだろうが!？…てか、夫婦じゃねーよ!!他人だよ!!」

「へえ…きょーこさん、ひとりですてるとこ見せてくれるんだ。」

「

「ちげーよ!？何でそうなるんだよ!？そんな意味で言った……」

「ねえ…きょーこさん？俺、今…すげー怒ってんだけど…分かる？」

ええ、分かりますとも。あの日とは比べものにならないくらいに、どす黒いオーラ纏ってらっしゃいますものね。そんなことは、最初から気付いていたのですよ、けど、気付かない振りをして、何とか話を逸らそうと頑張っていたのですよ。無駄だったけどな！！

「もう一回聞くな。…佐藤って誰？」

「い、嫌だなァ。ひと、そう一美の彼氏だよ！！今、付き合ってる奴が佐藤って言うんだよ。あ、アハハ…」

ヤバイ…！！とにかく、この場から逃げなければ…そうだ、トイレに行こう！！鴨志田が落ち着くまでトイレに閉じこもっていよう！！平然を装いながら、鴨志田の横をすり抜けようとしたら、

「…どこ行くの？まだ、はなし終わってないよ？」

壁へと追いやられ、無駄に長い二本の腕に閉じ込められて、身動きが取れなくなったあたしに、完全に目が据わっている鴨志田は、更にこう言った。

「…ここで、ひとりでしてみせるのと、おれに、佐藤のはなしするのと…どっちがいい？」

「さ、佐藤の話で…お願いします。」

「…じゃあ、どうぞ…はなして？いちからぜんぶね。」

「……………はい…。」

そうして、鴨志田怖さに、馬鹿正直に佐藤の事と、乙女MAX時代の自分のことを全部話したあたしは、ベッドの上で、文字通り『死』の体験をするのだった。

つづく

Episode 7. 『佐藤』（後書き）

いつも、

ここまで読んでくださり

ありがとうございます（・∀・）

最初、サブタイトルは『親友』で行こうと思ったんですが、

これは、どう考えても『佐藤』だなアと思い、採用しました（笑）

響子さんの最初の男、

佐藤くん。

もう出ることはないけど、

鴨志田くんに葬り去られたのかは誰も知らない……（・ω・）

さて、ここで補足と参りましょう。

佐藤くんにウザイと言われ別れた響子さんですが、ショックで喉に飯が通らないほど弱っていました。

そんな妹を見て、長男の俊ちゃんは、次男の淳ちゃんを連れて、佐藤くんをボコボコにしましたとさ（・∀・）

以来、佐藤くんは、響子さんの前には現れておりません。
めでたし、めでたし（・ω・）

それでは、皆様

いつになるやら分かりませんが、
また次回に（・ω・）

（・∀・）サヨナラ

Episode 8. 『浮気』 (前書き)

どうも、

二週間ぶりでしょうか (・ω・)

毎度、深夜の更新で申し訳ないです

急いで続きを仕上げたので、もしかしたら変な部分があるかもしれませんが、温かい目で読んでやってください (・ω・)

それでは、スタート

Episode 8. 『浮気』

明らかに自分のではない長い髪の毛に、ワザと存在を示している
としか思えないキツイ女物の香水、そして、『○○くん、大好き』
と、書かれたチャラついたメッセージカード。この三種の神器が、
付き合っている男の上着から紛れもない証拠として挙がったら…そ
れは、もう立派な浮気である。

「……ふん…そういうことねえ…へえ…そうなの!!」

誰もいない部屋で、鴨志田の上着を握り締めながら大声でわざと
らしく喋る響子。その理由は、手にしている恋人の上着にあった。

いつもならキッチンとハンガーに掛けてある上着を、珍しく鴨志田
がソファーに脱ぎ捨ててあったので、皺になったらダメだと考えた
響子が、これまた珍しくハンガーにでも掛けてやるかと手に持った
ら、ムワーンとキツイ香水の匂いがし、よく見ると襟の部分に長い
髪の毛がついていて、更に追い討ちをかけるように内ポケットから
は、何のイタズラか、メッセージカードがヒラヒラと床に落ちた。

それを無言で10秒見つめた後、わざとらしく喋り出し、何かを
納得したかのように、鴨志田の上着をソファーに投げ返した。

「ま、まあ…奴も腐っても男だからな…」

浮気の一つや二つするだろうよ。口では、愛してるとか結婚して
とかほざいてたくせに、結局これかよ。べ、別に…いいけどな。確
かに腹は立ったが、よく考えろあたし。これで、鴨志田が、どこぞ
の可愛い子ちゃんと浮気が本気になれば、あいつとは綺麗さっぱり
別れられるじゃないか。結婚を迫られることもなくなるし、監禁生
活からも解放される…また、昔みたいに気ままな生活に戻れるのだ。

だから、このまま…に、しておこう……もう忘れるんだ。

「……けど、何かムカつく。」

自分でも、何故こんなに腹の底から沸々と怒りが沸いてくるのか分からない。でも悩むのもめんどくさい。なので、こういうときは、何か美味しいものでも食べてスッキリしよう。そう思いキッチンに向かっていたら、

『ピンポン…』

と、来客を知らせる音が、一つ鳴った。

「…チツ、誰だよ？」

突然の来客訪問に、舌打ちをして、機嫌の悪さを全面に押し出しながら玄関を開けたら、

「どちらさま……って、母さん……？…何でここに？…てか、何で泣い……」

「…パパが……パパが……！」

死人のように青白い顔をし、まるで、滝のようにボタボタと涙を流す母親が立っていた。

「親父がどうかしたの!？」

こんな母親の姿を見るのは初めてで、父親の身になにか大変なことがあったのだと思い、詰め寄った。

「パパがあ……う、う……」

「……う!?」

「う……うわ……」

「……うわ!?」

「……浮気したのよ!!」

「う、わき……?……?……って、浮気!?」

おいおい、どっかで聞いた話……って、いやいや、親父に限ってそんなことあるわけない。……鴨志田じゃあるまいし。きつと何かの間違いだ!! 鴨志田じゃあるまいし。

「何で浮気だと思うの? 何か決定的な証拠でも出てきたとか?」

「証拠は、この耳よ!! ……ママ聞いたのよ……^{コウ}幸くんの彼女に……
パパがっ……!!」

「幸の彼女……?」

たった今、話に出てきた幸という人物は、今年で25になる木ノ下家の三男坊で、未だ定職に就かずフラフラと毎日を生きている馬鹿息子だ。本人曰わく、座右の銘が『ラブ&ピース』らしく、愛さ

えあれば何でもできると高校卒業してから今までに、幸が『マジ結婚したいんだよね〜イエーイ♪』と、両親のもとに連れてきた彼女の数は、先々月、二桁を超えた。

そんな身も心もチャラ過ぎる息子の彼女との浮気なんて……何かの間違いであってほしい。

「幸くんの彼女に……パパが……」

「……親父が……!？」

ゴクリと、一つ息を飲んで、母親の次の言葉を待った。

「……パパが、『太陽みたいに明るいい人だね』って、言ったのよ!！」

「…………で!？」

「………何が？」

「いや、だから浮気の証拠!！」

「……その言葉こそが証拠よ!！紛れもない浮気よね!？そうでしょ響子ちゃん!！」

「知らねーよ!？つか、それ浮気か!？」

てつきり、親父と幸の彼女のイヤンアハンな展開でも聞いたのかと思えば、太陽みたいに明るいつて……ただの褒め言葉じゃん!？全然浮気と関係ないじゃん!！

「浮気に決まってるでしょ！？ママ：凄くショックだったわ。だって、パパと出逢って初めて言われた言葉と同じだったのよ！？酷いわ！！パパの浮気者！！」

「ちよっ、落ち着い……」

「響子ちゃん……、ママ決めたわ。パパを誰かに盗られるくらいなら、いっそ殺してママも死ぬわ。」

「だ、ダメダメダメ！？な、何言ってるの！？」

「だって言うでしょ？（浮気を）やられたら、殺り返せて？」

ちげーよ…そんな意味で使う言葉じゃねーから。てか、目がマジ過ぎて怖いから！！本気なんですよ感がひしひしと伝わってきて怖いから！！…と、とにかくだ、ご近所に聞かれて誤解でもされたら大変なので、部屋に入れてゆっくり話そう。ベストな解決策を早く見つけねば、家族全員が、これからの人生バッドに送るはめになるからな！！

何もかもが手遅れになる前に、有無をいわさず殺る気マンマンの母さんの手を掴み、部屋の中に引きいれ、何がどうなって浮気？へと行き着いたのか、諸悪の根元は一体誰なのか、数時間前におきたことを尋ねてみることにした。

『へえ、ここが幸の家？ウケる』

『そ、んで…この2人が俺の父ちゃんと母ちゃん。』

『ねえ……幸くん？こちら、まさか……』

『そ、俺の彼女。マジ結婚したい女……イエーイ♪』

『はじめまして、彼女つか、妻？の、まりでーす……イエーイ♪』

幸くんが、11人目のマジ結婚したい彼女を連れて、朝、家に来たの。……見た目で人を判断しちゃいけないということは分かっているけど、どうしてそんなに黄色いの？っていう髪の毛に、どうしてそんなに真っ黒なの？っていうお肌に、どうしてそんなに短いの？っていう洋服を着た女の子が現れて、パパもママも我を忘れて、つい、その子をマジマジと見てしまったわ。

『『はあ……はじめまして……』』

『つか、幸って…母ちゃん似じゃね？ウケる』

『男兄弟みんな母ちゃん似だぜ？姉貴だけ父ちゃん似。』

『え？あんた姉貴もいるの？小姑とかウケる』

『でも、今は彼氏んちに居候？だっけ？……何か住んでる。』

『なにそれ？姉貴って小姑な上に宿無し？マジやばい。ねえ、姉貴って美人？それとも、可愛い？』

『うーん……ふつかじゃね？』

『ギャハハハ！！なにそれ！？ウケる。ま、でも人間ふつーが一番だしね。』

「……そんなやり取りをずっとふたりが目の前で繰り広げて、なにも面白くないのに、なぜか話す度に、『ウケる』を連呼するのよ？ ママはもうついていけなかったわ！！パパがやっと喋り終わったふたりに、『幸の彼女は、太陽みたいに明るい人だね』って……。何だかママ、無性に腹が立ってそのまま家を飛び出してきたの。ねえ、響子ちゃん…何がそんなにかしいのかしら？」

「頭がおかしいんだよ、きっと。」

母さんが腹を立てる気持ちは痛いほど分かるな…なんていうかわざいことこの上ないしな。それに、親父の肩をもつわけじゃないけど、母さんに言った意味とはまるっきり別で、もう、太陽みたいに明るいと言いたいようがなかったんだろう。何とかしてふたりを仲直りさせてあげたいけど……つーか、幸とその女おぼえとけよ、人のことボロクソに言いやがって……帰ったら、何を差し置いてでも一番にボコボコにしてやる。

「ねえ、響子ちゃん…ママをしばらく此処に置いてくれないかしら？ ママ…あんなお嫁さんと暮らすのなんて嫌だわ！それに…パパの顔だって今は見たくないもの。」

「ええー！？それは、あたしの判断じゃ決めかねな……………」

待てよ…、母さんがしばらくこの部屋に居るってことはだな、迂闊に鴨志田もあたしに手を出せないってことだよな…？ジジ…藤堂さんも露骨にあたしをイビれないってことだよな…！！それって、最高じゃん！！

「ダメ…：…かしら？」

「いい！！全然いい！！なんならずっとこの部屋に居て！！」

悪いな、親父よ。仲直りは、ちょっと待ってくれ。しばらく母さん借りるわ。娘の幸せの為に我慢してください。

「良かった〜！！響子ちゃんに断られたらどうしようかと思ったわ〜！！…でも、守くんは大丈夫？」

「浮気野郎は大丈夫。あたしが文句なんて言わせないから。」

「浮気野郎？」

「な、なんでもない！！こっちの話……………」

やばっ、うっかり口に出ちゃった。浮気という単語に敏感な今の母さんに、『実は、あたしも浮気されてます』なんて、余計なこと喋って、心配かけちゃまずいよな。

「そう…？」

不思議そうな顔で見てくる母さんに、アハハ…と、苦笑いを返し

た。

「な、何か食べようか…」

気まずい空気を一変させようと、本来の目的であったやけ食いを思い出し、再びキッチンに向かおうと思ったら、

『ドンドンドン!!』

今度は、来客が訪問を知らせる為に、今時、借金取りでもそんな叩かねーよと思うぐらいの力で、ドアをこれでもかと叩く音がけたましく響いた。

『ゆうこー!! 僕が悪かった!! もう二度と君以外に太陽の称号は使わないから!! てか、僕の太陽は君しかいないから!! だから…お願いだ、帰ってきてくれ!! ゆうこー!!』

「お、親父!？」

扉の向こう側で、ドアを叩きながら泣き叫ぶ父親の声が聞こえた。

『君が帰ってきてくれないなら、僕はもう死ぬー!! てか、家族みんな殺して死ぬー!! 君のいない人生なんて生きる価値がないから!!』

「一人で死ぬよ!?! 家族巻き込むんじゃねー!!」

父親のバイオレンス発言に、慌てて玄関を開けそう叫んだ。

「きよ…きよーこ！！ママはどこだ！？ママに合わせて下さい！！
！お願いします！！パパからママを奪わないで下さい！！」

「ちょ、なにやってんの！？やめて！！めっちゃ見てるから！！
ご近所さんがドアの隙間から白い目でめっちゃ見てるから！！あた
しの人格疑われるだろうが！？」

玄関先で、プライドなどかなぐり捨てて土下座する父親と、土下
座される娘を、近所の奥様方は、火曜サスペンス並みの食いつきで
ガン見していた。

「ほ、ほら！？母さんに合わせるから立てって！！早く中にはい
……」

「…京介さん！！」

「…ゆ、ゆうこ……」

「い、今の言葉…ほんとう？太陽の、称号は…私以外の人につか
わない？」

「ほ、本当だ！！約束する！！君以外の人間は、……み、ミミズ
だ！！オケラだ！！アメンボだ！！」

「それ、悪口になってるようになってねーよ。」

「京すけ…さ……うわあーん！！ごめんなさいー！！勝手に出て
行ったりしてー！！」

「いいんだ！！君さえ戻ってきてくれたら、僕はそれで幸せだ！

！」

「愛してるわ！！世界中の誰よりも！！」

「愛してるよ！！世界中の誰よりも！！」

土下座する親父の元に駆け寄り、泣きながら謝る母さん。それを愛おしそうに抱きしめる親父。白い目で見ていたご近所の奥様方も、両親のハッピーエンドに、いつの間にやら涙を浮かべ本当に良かったかと拍手している。そして、その拍手に、ふたりが照れくさそうに応える。……………なんだ、このクソ茶番劇は？ふざけんじゃねーぞ？あたしは、一人だけそんな気持ちでいっぱいだった。

結局、浮気……てか、浮気でも何でもなかった、ただの騒動は、引っ掻くだけ引っ掻き回しといて、ふたり仲良く手を繋ぎ、ラブラブで帰って行くという終演で幕を閉じるのだった。

「へえ…、そんなことがあったんだ。響子さんも大変だったね、お疲れさま。」

「まあな…、まさか、母さんがあそこまで嫉妬深い女だとは……そして、親父があそこまでヘタレだとは思わなかった。」

今日のクソ茶番劇を、仕事から帰ってきた鴨志田に話した。

「あの義父さんが、浮気なんてするはずないのにね。義母さん大好きっていうのが、体中からにじみ出てるのに。」

「ホントだよな。誰かさんと違って浮気なんてするわけないよ

なく。誰かさんと違って。」

ソファで、ふんぞり返って嫌みたっぷりにそう言うと、あたしは、横目で奴の反応を伺った。

「……あれ？おかしいな……ねえ、響子さん？ここにあった俺の上着知らない？……香水臭かったからクリーニングに出そうと置いてあったはずんだけど……」

って、無視かよ……。誰かさんていうのは、紛れもなくお前のことだぞ？てか、香水臭いっていうのを認めるという事は、浮気を認めるということだな……。ま、どうでもいいけどな。つか、今朝の上着なんて、胸くそ悪いからゴミ箱に葬り去ってやったわ。

「……んなもん、知らねーよ。どっかの（女の）家にでも忘れてきたんじゃないの？」

「そんなはずは………って、こんなところに……」

「あ、悪い……あまりに臭かったからゴミかと思って間違って捨てた。」

ゴミ箱から容易く（てか、わざと見つけやすいように捨ててやった）上着を見つけた鴨志田は、棒読みで平然とそう返したあたしに困り顔で、どうしてこんなことをするのかと、その理由を尋ねてきた。

「理由？だから、ゴミだと思って間違って捨てた。」

「じゃなくて……俺なんか響子さんの気に障ることした？何でそ

んなに怒ってるの？」

「別に、怒ってないし。ムカついてないし。腹立ってないし。」

「……そっか、何かに怒ってて、ムカついて、腹立ってるんだね。ねえ、何に怒ってるの？教えてくれなきゃ分かんないよ？」

隣に腰を下ろし、あたしの顔を覗き込みながら被害者面して尚も理由を聞いてくる鴨志田に、そんなに知りたきゃ教えてやるよと、今朝の浮気の三種の神器について逆に問い詰めてやった。

「これ…、この長い髪の毛誰んだ？あたしのじゃねーし、勿論お前でもない。ラーメンマンみたいに天辺だけ伸ばしてるとかい言うい訳はいらねーから。それから、このメッセージカード。ずいぶんと愛されてんだなあーハートだらけじゃねーか…羨ましいな色男。そして、最後にこの香水。男はつけねーよな？こんなファンシーな匂い？まあ、別に、お前にそっちの気があるなら問題ないけど？」

浮気の証拠を突きつけて、一気にまくしたてると、鴨志田は、観念したのか下を向いたまま動かなくなってしまった。

「お前、あたしに、ただひとりの運命の女だからって言ってたくせに、ちゃっかり外にも女作ってんじゃねーかよ!!」

「……………ッ……!!」

「下向いてないで何とか言えよ？」

何かを堪えるように、ずっと俯いていた鴨志田だったが、もうダ

メだと顔を上げ、いきなり大声で笑い出した。

「な、何がおかしい！？ 笑い事じゃねーぞ！！」

「だ、だって…きよ、こさんが…ハハッ、可愛いく…」

「は、はぁ！？ そんな言葉で騙されねーぞ！！」

「ち、違う…ああ、ちよっ、待って！！ 腹痛い…」

何がおかしいだ！？ こっちは真剣なのに…浮気野郎が、なめくさりやがって！！

「それ…まさか浮気の証拠って思った？」

「思ったじゃなくて、実際そうだろ！？」

「じゃあ…その、浮気相手を示す証拠全部が、うちのお袋っていうオチ…信じないよね？」

「信じるわけねーだろ！？ あたしはそんなにアホじゃねーよ！！」

そんなベタな言い訳、今時、中学生でも使わねーよ！！

「そうだねって言ってあげたいけど、そうもいかないかな？ そのメッセージカードの裏見て？」

「あ！？ メッセージカードの裏だ…と……………あ、」

何をバカなと思い、カードを裏返して見てみると、そこには、『

息子へ、愛を込めて。母より』と、綺麗な字で書かれていた。

「昨日、お袋が親父に愛妻弁当を届けにきてたんだけど、ついでだからって俺の分も作ってきてくれてさ……だから、そのカードは弁当に入ってたやつ。で、上着が香水臭いのは、煙草の臭いが大嫌いなお袋が、俺の煙草臭い上着に腹を立てて、勝手にふりかけていったんだよ。髪の毛は……、その時についたものかな？」

「そ、そんな出来過ぎた言い訳信じないぞ!？」

「これ……お袋。髪の毛の色と長さ、ピッタリ一致しない？」

確認してみても、差し出された鴨志田の母親の写真を見て愕然とした。確かに、あの髪の毛は、この写真に写る人と長さも色も一致する。しかも、なんだろうか……何て表現したらいいか分からないが、ああこの人は、ファンシーな香水をつけてるなっというのが、丸わかりな感じの人だった。

「その顔は、信じてくれたみたいだね？」

恥ずかしい……恥ずかしすぎて死にたいぐらいだ。んなベタな!？という展開に、引っかかるあたしは、もはやカスとしか言いようがない。

「でも、嬉しいな……。響子さんが嫉妬してくれるなんて♪」

「嫉妬……!？」

「そ、俺が浮気してると思ったから、ゴミ箱に上着を捨てるくらいに腹が立ったんでしょ？本っ当に、可愛いね響子さん。」

しししし、嫉妬だなんて…！？それじゃあ、まるであたしがこいつのことめっちゃ好きみたいじゃん！？何それ！！すげー屈辱的なんですけど！？クソ！こうなりゃあたしも浮気して、コイツを嫉妬の渦に落として嘲笑ってやる！！

「響子さん、俺を嫉妬させる為に浮気してやろうなんて考えてるんだったら、やめた方がいいよ？」

「…へ！？」

「万が一、響子さんが、そんなことしたら…：響子さんも浮気相手も楽には死なせないから。そうだな、浮気相手は、生まれてきた事を後悔させてから殺してあげるよ。で、きょーこさんは、嫉妬に狂った俺に朝も昼も夜も関係なくずっと犯され続けてそのまんま死んでいくの…：…：…：だって言うよね。（浮気を）やられたら犯り殺せて♪」

「だから、言わねーよ！？聞いたこともねーよ！！」

何を血迷っていたんだ響子！！こいつの嫉妬深さは、佐藤の件で身も心も嫌というほど味わったじゃないか！！

「じゃあ…：響子さんの話は解決したし、今度は俺の番だね。」

「な、なんだよ？」

にっこりと笑う鴨志田に、嫌な予感しかせずたじろぐ。

「浮気なんてするはずなのに、あらぬ疑いをかけ、俺を傷つけた響子さんには罰として、今から、楽しい楽しいお仕置きタイムを執行します♪」

「は、はぁ！？ちょ、ま……」

「もちろん、朝まで……ね。明日は、休みだから今夜は寝かせないぞ☆」

そう言って左手で響子の手を掴み、それは一体、何に使うんだと聞きたいような聞きたくないような、長く頑丈なロープを右手に持ち、鼻歌を混じえながら地獄と化した寝室へと、響子を引っ張り込む鴨志田だった。

つづく

Episode 8. 『浮気』（後書き）

いつも、ここまで読んで下さってありがとうございます（・ω・）

下書きは出来ていたのですが、諸事情で、手直しがだいぶ遅れてしまい、急いで更新しました（・∀・）

前回のエピソードでは、鴨志田くんの嫉妬深さをテーマに書いたのですが、今回は響子さんの可愛い嫉妬を書こうと思ったのですが、伝わったでしょうか？

では、ここでのいつもの補足を。

三男の名前は、幸^{コウ}くんでしたが、

まだ、登場していない一番末っ子の名前は、剛^{ゴウ}くんと言います。

チャラ男の幸くんとは、正反対の寡黙でクールな大学4年生です（・∀・）

剛くんも、そのうち登場させたいと思います。

では、皆様

また次回に（・ω・）

サヨナラ（・∀・）

Episode 9. 『特別』 (前書き)

こんばんは (・ω・)

今回の話は、Episode 3で、

鴨志田くんが響子を連れて帰った後の、
木ノ下家の話です (・∀・)

つまり、早い話が、

箸休めの話です (笑)

私が、すっかり気に入ってしまった

三男の幸くん視点となっています。

あと、さり気なく末っ子が登場します。

良かったら読んでやって下さい (・∀・)

それでは、スタート

Episode 9. 『特別』

イエーイ☆俺の名前は、木ノ下幸。らぶ&ぴーすをもっとーに、定職につかず親友の学^{マナブ}の経営するショップでバイトする今をときめく25さい。一週間前に、マジ結婚したかった女のリカと別れてからというもの、住む家がなくなったんで、今は実家に出戻り中です。実家ライフは、ちょー快適だけど、一つだけ悩みが…。

出戻り兄ちゃん達のおかげで、いつの間にやら自分の部屋が荷物置き場と化してしまったので、寝るところがない可哀想な俺は、一人暮らし中で実家にいない姉ちゃん^{姉ちゃん}の部屋を借りているのだが、たまに…ってか、結構な割合で実家に帰ってくるので、そのたびにソファで眠らなければいけない。朝起きると全身がダルすぎて、何かもうやるせないのも、あんまり帰ってくるなと姉ちゃんに伝えるのだが、

『うるせーこのヤリチンが!! あたしの苦勞が分からないやつは死ね。』

と、女の子の可愛さのかけらもない暴言を吐かれ、怒りの鉄槌を喰らわされる。何でそんなにキレることがあるんだよ? あの日なのか?などと、口にする勇氣は俺にはなく、いつも泣き寝入りするのだ。てか、下の弟には甘いくせに何で俺だけきびしーんだよ!! まあ…いいけど。いや、やっぱよくないけど、今は、それどころじゃないから。

話が一気に飛ぶんだけど、さっき母ちゃんから今日は早く帰ってこいってメールが入ってたんで、せっかくの楽しい楽しい合コンを切り上げて仕方なく帰ってきた。つーか、姉ちゃんの男が来るとかどーでもいいし。なんでそんな理由で早く帰らなきゃいけないの? と、言ってるやりたいが、今は、実家に身をおくものとして母ちゃ

んの命令は絶対なので、渋々従っている。てか、ぶっちゃけて言うけど、俺は、あの鴨志田ってやつが嫌いだ。イケメンキャラ被ってるし、何か分かんないけど、めっちゃ睨んでくるから怖い。オーラがハンパない悪意で満ち溢れてるし、笑顔だけど目の奥が笑ってないんだよ…マジ、姉ちゃんの男の趣味疑うわ。何がいいんだ？まだ佐藤の方がよくね？…いや、どっちもどっちか。

「ただいま…って、暗っ！？なにこの通夜モード？」

「あら、幸くんおかえりなさい。」

「なあ、母ちゃん？…あれなに？」

帰宅一番、目に飛び込んできたのは、キノコでも生えてんじやねーのって思うくらいに、ジメジメ空気を含んで何かに打ちひしがれる俊兄の姿だった。

「俊ちゃんたら、響子ちゃんが守くんと結婚することになっちゃったから、落ち込んでるのよ。」

「ええ！？姉ちゃん結婚するの！？」

「結婚などするわけなからう！！うっ…響子！！」

「しないの？どういうこと？」

さっぱり分からない。母ちゃんは結婚するって言ってるし、俊兄は結婚しないって言ってるし…、てか、結婚なんてしない、行き遅れ上等が口癖な姉ちゃんが結婚なんてするわけねーよな。っーこと

は、俊兄が正しいのか？

「あの忌々しい赤の他人め！！可愛い可愛い響子を…クツ、無理やりに！！」

「もう！守くんをそんな呼び方しないの！これからは義兄弟になるのよ？」

でも、やっぱり母ちゃんが乗り気ってことは、鴨志田と結婚するのか？

「今頃、あの赤の他人に、あんなことやこんなことをされて…きき、響子！！待ってろ！！今お兄ちゃんが行くからな！！」

「俊ちゃん駄目よ。あの約束忘れたの？」

「うわあああ！！そうだった！！」

「…約束？なにそれ？」

「1ヶ月の監禁生活の間に、俺たち兄弟が姉さんのところへ行ったら即結婚だって。」

「剛？お前、帰ってきてたの？てか、監禁生活ってなに？」

「イヤねー剛くん。監禁生活じゃなくて、ちょっと早い新婚生活よー！！」

「それは、男の視点。姉さんの観点では、監禁生活以外の何物でもない。」

「つまり、姉ちゃんは自分の彼氏に1ヶ月間監禁されるってこと？」

「馬鹿の幸でも分かったか？」

なにそれ？ちょーやべーよ。あの男、危ないとは思ってたけどそこまでだったとは！！彼女を監禁するって…兄弟が訪ねてきたら結婚だって…、俺、そんなやべーやつと義兄弟になりたくねー…って、誰が馬鹿だこら！？

「おい剛！！呼び捨てにすんな！！お兄ちゃんもしくはお兄様と呼べって言ってるだろ！！」

「黙れ、駄目^{カス}人間が。兄と呼んでもらえる努力をしてから物を言え。」

な、なんて可愛くないやつ！！姉ちゃんには、キモイぐらい可愛い弟ぶりを発揮するのに、男兄弟、とくに俺には、ゴミでも見るかのごとく冷たい目で見下しやがって！！

「剛くん！！ダメでしょ？幸くんにカスなんて言っちゃ？いくら本当のことでも、幸くんが可哀想だわ。謝りなさい。」

か、母ちゃん！？なにさり気なく俺のことカスって言ってんの！？てか、自分の息子をカスって思ってたの！？あれ？やばい…涙出るかも。

「そんなことより、淳兄は？姿が見えないんだけど？」

「淳ちゃんなら、飲みに行くって行っちゃった。顔には出してなかったけど、響子ちゃんのことをやっぱりシヨックみたいね。」
どっかで泣いてるんじゃないかしら？」

「泣き上戸だからね。」

「俊兄はともかく、泣き酒飲むくらいなら、なんで淳兄止めなかつたんだよ？」

「ん？やはり馬鹿だから復活が早いな。」

「うるせー！！大学生がなんぼのもんじゃい！！高卒なめんなよ！！？」

ちょっと頭がいいからって、ちょーしに乗るなよ！！お前なんかあれだ！！何かすげーもんにつまづいて、二度と起き上がれないほどの挫折を味わったらしいんだ！！

「物言いたげな淳ちゃんに、ママがずっとダメ！って合図を送ってたからよ？」

「早い話が、ブラック母さんが降臨したってわけだ。」

そっか…、ブラック母ちゃんが出てきたんじゃ淳兄も勝ち目ねーよな。あの時の母ちゃん、マジこえーもん。

「とにかく！！響子ちゃんと守くんの幸せの為に、くれぐれも邪魔しないように！！…特に、俊ちゃん！！いいわね？」

「……は、はい!!」

「じゃあ、ママもう寝るから。あなた達も歯磨きして早く寝なさいね。」

「え!?! 母ちゃん、俺……ご飯……」

「おやすみなさい。」

「……………」

「ぬうおお!! 響子!! 何も出来ない兄ちゃんを許してくれ!! 1ヶ月後必ず赤の他人をボコボコにしてやるから、それまで耐えてくれ!!」

「さ、腹もいっぱいになったし、勉強するか。」

「……………」

母親のおやすみ宣言を皮きりに、各自部屋へと戻っていく兄弟達。……ぐすん、寂しくなんかないやい!! 腹なんか減ってないやい!! あ、冷蔵庫にストックしてある父ちゃんのプリンがあったよな? 一個ぐらい失敬してもわかんねーよな? それ食って……、

「あ、そうそう……幸くん? 冷蔵庫にあるパパのプリン食べたら……ママがフライパンでぶん殴るから?」

「食べません!! 絶対、食べません!!」

「良かった。パパを悲しませる悪い子は、ママが神様になっ

てぶつ殺さなきゃいけないからね……ふふっ、おやすみなさい。」

「おおお、おやすみなさい!!」

物心ついた時から存在する木ノ下家（裏）家訓。

1. 母ちゃんを怒らすことなかれ。
2. ブラック母ちゃん存在を父ちゃんと姉ちゃんに教えることなかれ。

上記2つが守れない者は、潔く母ちゃんの鉄槌を受けるべし。

反抗期というやつは、俺にも平等にやってきて、昔、すげー荒れてた次期に、一度だけ父ちゃんを困らせたことがあったが、あの時に母ちゃんから受けた仕打ちは、ホントに母親か？と、疑問視してしまうぐらいに恐ろしいものだった。まあ、そのおかげ……なのかなからないが、悪の道に逸れることなく今を楽しく生きてるからいいんだが。それは、俺に限ったことではなくて、他の男兄弟全員が通ってきた、いわば大人になる為の登竜門的存在。

その登竜門に、姉ちゃんが参加してないのは、父ちゃんと一緒に姉ちゃんも母ちゃんは溺愛しているからだ。数字に表してみるとわかりやすい。父ちゃんが100大事なら、姉ちゃんは90で、残る男兄弟全員が、均等に30ぐらい。差は火を見るよりも明らかで、しかし、それを兄弟でグチるやつは誰もいない。

つまり、なにが言いたいかというと、姉ちゃんは俺たち兄弟にとっても特別だということだ。だから、口ではあんまり帰ってくるなと言ってるけど、姉ちゃんがこの家に帰ってくる度に、父ちゃんも母ちゃんも兄ちゃん達も剛も、もちろん俺も、嬉しくて仕方ないのだ。

俊兄が赤の他人て呼ぶのは単に現実を認めたくないからで、淳兄が泣き酒を飲むのは姉ちゃんすら気付いてない気持ちに薄々気が付きかけてるからで、剛が密かに鴨志田の弱点を探っているのも、父ちゃんが本当はちよっぴり寂しがっているのも、母ちゃんが心から姉ちゃんの幸せを願っているのも俺は知ってる。

「……腹減った。」

先のことなんて誰も知らないけど、みんながみんな幸せになれば、俺はそれでいい。それにはまず俺から率先して幸せにならなければ。幸せといえ、今日の合コンにいた、まりちゃん可愛いかったなあ。ちょータイプなんだよなあ。あれ？やばい。何か結婚してー。マジ結婚してー。まだ合コンやってるかな？学に電話しよーっと。

「あ、もしもし？俺だけど……」

11人目のマジ結婚したい女と、ついでに晩飯を求めて、幸は再び合コン会場へと繰り出すのだった。

つづく

Episode 9. 『特別』（後書き）

ここまで、読んで下さってありがとうございます（・∀・）

いかがでしたか？

ちょっと本編がまとまらないので、気分転換に兄弟視点で話を書いてみました（・ω・）

そして、さり気なく末っ子の剛も出してみました（・ω・）

姉に甘く、兄達には舐めくさった態度をとる（ちゃんと愛はある）クールボーイの剛くんであります（・∀・）

てか、みんなシスコン設定になっちゃいましたね。

さて、ここで補足説明にまいります。

なぜ、響子さんは、一人暮らしにもかかわらず頻繁に実家に帰ってきていたかというと、お察しの通り、鴨志田くんの魔の手から逃れる為であります（・∀・）

それと、もう一個。

今回の話に、お父さんが登場しなかったのは、すでに寝ていたからです（・∀・）

お父さんは、早寝早起きなので、けっして、出すのがめんどくさかったとかではありません。

それでは、みなさま

次はいつ更新になるか分からない話でまた（・ω・）

（・∀・）サヨナラ

Episode 10. 『初恋』 (前書き)

おひさしぶりです（・∀・）

2ヶ月ぶりでしょうか？

更新が滞っておりますが

、続きが何とか仕上がったので、

読んでやって下さい（・∀・）

未だにDr. スランプ状態なので、

文章が変かもしれませんが、

そこは温かい目でスルーしてやって下さい（・∀・）

それでは、

スタート

Episode 10. 『初恋』

『……マモルさん。あなたに言っておかなきゃいけないことがあるの……あのね……私、』

『何も言うな、キョウコ!!』

—キョウコの言葉を遮るような、マモルの突然の熱い抱擁—

『ま、マモル……さ……ん?』

『……とつくに知ってたさ。君が、あの時のキョーだってことは。』

『う……うそ……!?!?』

『気付かないはずがないだろう……。だって、キョー……いや、キョウコ。君は、僕の初恋の人だからね。』

『マモルさん!!』

『キョウコ!!』

—15年の年月が経ち、ようやく互いの初恋が実った、マモルとキョウコだった—。

「……なんだ、この3流ドラマは? つか、主役二人の名前に悪意を感じるよな。」

だいたい、幼少期のあだ名がキョーでどんな女だよ? あしたの○

ヨーじゃあるまいし。つか、こんなドラマで泣くやついんの？
いるわけねーよな。人の心を忘れた鴨志田なんてウジ虫でも見るよう
な目をし……て……

「うっ…、い、い…ド…ドラマ、だったね…」

「ど、どこらへんが！？てか、なんで泣いてんの？お前は、こん
なんで涙流せるほど心が優しいやつじゃねーだろ？」

許可もしてないのに、勝手にあたしの隣に座り、陳腐なドラマを
見てなぜか号泣している鴨志田に目を見張った。

「だ、だって…こ、ど…らま…俺、とき…きよ、こさんのようで、
…そう、思…と、感、動…て。俺た、ち…こんな…風に…な「らな
いし、全然違うし。てか、嗚咽しすぎてなに言っただのかわかんね
ーよ？男がめめめ泣くんじゃねー！！」

嗚咽が酷すぎて聞き取りにくい上に、記憶を改ざんして語る鴨志
田に二重の苛立ちを覚え、さっさと泣き止めと一喝した。

「つか、幼少期のあだ名キョーじゃねーし。」

「違う違う、そうじゃなくて…、俺が言いたかったのは、響子さ
んが俺の初恋の人ってこと。」

「……いやいや、嘘つくなよ？んな甘い笑顔で甘い言葉言われた
って信じるわけねーだろ？だいたいなあ、お前みたいな奴が今まで
恋愛したことないとかありえねーよ？」

そういえば女が落ちるとでも思ってたのかよ…、あたしをそんじ

やそこらの女共と一緒にすんじゃねーぞ。

「酷いな…本当のことなのに…。ドラマ見てマメルと自分を照らし合わせて過去を振り返ってみただけど…それで気づいたんだよね。俺、今までまともに恋愛ってやつをしたことがないんだよ。」

「恋愛したことないって…、お前、あたし以外に何人もの美女と付き合ってきたんだろ？」

「確かに、何人かとは一夜を共にしたことあるけど付き合った内に入らないよ。この人好きだなとか、この人を振り向かせたいとか、この人の泣き顔すぐ素敵だとか、この人服従させたいとか、この人を誰の目にも触れさせたくないとか、この人をいつそのこと監禁しようと思う女、響子さん以外には出逢わなかったしね。」

「そんな危ない思考の持ち主、出来ることなら、あたしだってスルーしたかった。」

「響子さん以外の女はみんな従順っていうか、金目当てっていうのもあるから何しても怒らないんだよね。ほら、俺って多少性格に難ありでしょ？だから、そういうすぐ屈服する女って嫌いだな…一回やったら興味がなくなっちゃうんだよ。でも、響子さんみたいに、何度躡ても刃向かってくる野良犬みたいな女は大好き、見ててすげーぐちゃぐちゃに泣かせたくなる。てゆーか、響子さんが大好き。」

「お前って、すがすがしいほどのゲス野郎だな。」

その鬼畜外道の考え、もう嫌み通り越して尊敬に値するわ…：つか、野良犬ってなんだ！？バカにしてんのか！？

「昔から、初恋は実らないってよく聞くけど、それはあくまで一般論。…だって、俺たちの初恋はちゃんと実ったしね。」

「お前の初恋も一生実らねーよ。…てか、何でちゃっかりあたしの初恋の相手がお前になってんだよ？全然違うし。1ミリも違うし。」

「だいたい、あたしの初恋は、とっくの昔に叶ってんだよ？」

「……なにそれ？どういうこと？……詳しく聞かせてよ？」

「あれ？話してなかったっけ？ほら、3番目に付き合った男！！
淳兄の友達で、居酒屋やってる真ちゃん……あの人あたしの初恋の相手なんだよ。」

隣で、顔に青筋を浮かべてもの凄い形相で自分を見つめている鴨志田に気付きもしないで、ベラベラと初恋相手の真のことを喋る学習能力ゼロな響子。

「初めて真ちゃんに会ったのは中学の時で、友達何人かと一緒に淳兄が家に連れてきたんだよ。最初は、ただの兄ちゃんの友達って感覚だったんだけどさ、何回か話す内に気になる存在になって……で、気がついたら真ちゃんに恋してる自分がいたってわけ。けどさ、そんな時は真ちゃん彼女いたし、告白して変に気まづくなるのも嫌だったから、淡い想いは胸の内に留めて忘れることにしたわけ。」

「……で？なんで忘れたはずのはつこいが実ったの？」

「いや、それがさ……縁で存在するもんで、ある日、たまたま飲みに行った居酒屋が真ちゃんの店で、そこで色々と言話して盛り上がったんだけど、実は、あたしの初恋は真ちゃんだって話したら、向こうもホントは当時すごく気になってたとか嬉しいこと言ってくれてさ……そんな時お互いフリーだったし、じゃあ……いっそ付き合っちゃおう？みたなノリになって、それで付き合ったわけ。」

「へえ……そうなんだ……」

「でも、その1年後、真ちゃんの女癖の悪さに呆れて別れて、今は仲良く友達やってんだけどね。……ま、今思えば、あたしと真ちゃんの縁は、恋人じゃなく悪友の縁だった……」

「そんな、胸くそわるいえんなんてひきちぎればいいよ。なんなら、いっそそいつごとひきちぎろうか？」

浮かんでくる楽しかった思い出を、満面の笑みで語り終えた響子は、鴨志田にふと視線を向けるが、そこにいたのは、自分とは正反對の絶対零度の笑みを浮かべた大魔王だった。

「な、なんだよ！？何でそんなキレてんの！？詳しく聞かせろって言ったのお前じゃん！！」

「響子さん、『正直者が馬鹿をみる』って言葉知ってる？可愛い顔して楽しそうにウジ虫野郎との思い出を喋ってさ……なに？俺に對する挑戦？」

「ち、ちが……ってか、お前だって、鬼畜外道の恋愛癖を普通の顔

して普通に喋ってたじゃねーかよ!？」

「俺はいいの、俺は。でも、響子さんが俺以外の男のことを想って口にするのはダメ。」

「な、そんな横暴だぞ!! あたしだって、誰かを好きになる権利はある!!」

「ないね。なぜなら響子さんは、俺が好きだから。」

い、意味分かんねー!! なんだこいつ? それ、マジで言ってるのか!? 腐ってるのは心だけじゃなくて、頭もなのか!?

「だから、響子さんの本当の初恋も、そのウジ虫野郎じゃなくて、この俺なの? 分かった?」

「分からない、理解できない、したくない。」

「なにその俳句返し? はんこうてきだね……おれ、すごーくきにくわない。」

(し、しまったー!?! 完璧キレた!?!)

自らの態度が、墓穴を地下深く掘り続けていることに、今更気付く響子だった。

「さっきもいったよね? 何度しつけてもはむかってくるのらいぬをくっぶくさせるのが、俺のいきがいだって?」

「ひ、ヒィ!? そ、そんなこと言、いましたか!?!」

互いの鼻先が今にもくつつきそうなぐらいの距離まで近づき、愛らしいように響子の頬を撫でる鴨志田。

「さて、どうしようもなかね……この可愛いかわいい、おれだけのわんちゃん？」

「あ、あれ？なんだろう？何か急にあたしの本当の初恋相手は、お、おま……じゃなくて、鴨志田、くんのように思えてきたな？」

見え透いた嘘でも、言わざるをえない状況に立たされていると気付いた響子は、声を上擦らせながら相手の目を見てゆっくりそう言った。

「……………」

「……………か、鴨志田、く……………った。」

響子を見つめたまま、突然フリーズした鴨志田に、恐る恐る声をかけるが、それは彼の小さな呟きで遮られる。

「…え？な、んて？出来れば聞きたくない単語が聞こえ「勃・っ・ち・ゃ・っ・た♪」

「なんで！？今の会話のどこにそんな要素があった！？お前、マジで頭腐ってんなー！！」

「だって…響子さんが、俺を見つめながら、初恋の人は俺だって言うから☆」

せっかく回復した鴨志田の機嫌に、『言ったんじゃねー、言わされたんだ』など言える筈がなく、涙をこらえて言葉を飲み込んだ。

「よしっ!! テレビのふたりみたいに、俺たちの初恋も叶ったことだし……」

「うわぁ!?! な、なにす……」

「なにって………ナニ?」

響子の問いに可愛く首を傾げて答えると、鼻歌混じりに彼女を抱き上げ、今日一番の笑顔を見せた大魔王は、有無を言わず捕らわれの姫を、自分の根城（寝室）へと引きずり込むのだった。

つづく

Episode 10. 『初恋』（後書き）

ここまで、読んで下さってありがとうございます（・∀・）

いかがでしたか？

何とか仕上げた話でしたが、

変なところだらけではなかったでしょうか？

長らくスランプが続いておりまして、

全く続きの内容が浮かんでこないのですが、

浮かんできたら、

すぐに更新したいと思います（・∀・）

それまで、しばしお待ちを

ところで、

ここらで恒例の補足説明を

今更ですが、小説に登場する人々の職業説明をしたいと思います。
まず響子さんですが、職業は普通のOLです。

次いで、鴨志田くんは元警察官で今は父親の会社に就職しました。
ちなみに俊ちゃんは、弁護士で、

淳ちゃんは、美容師になってます。あ、剛くんは親友が経営するシ
ョップのバイトです。

それでは、皆様

またいつ更新出きるかわかりませんが、

その時まで

バイバーイ（・∀・）

Episode 1. 『災難』 (前書き)

こんばんは (・∀・)

意外に早く更新できました (笑)

毎度おなじみ駄文ではありますが、
読んでやって下さい (・∀・)

それでは、

スタート (・∀・)

Episode 1. 『災難』

イエーイ☆みんな、俺のこと覚えてる？木ノ下家きつてのイイオトコ三男の幸くんです。昨日、マジ結婚したかった女のまりと別れてからというもの、ブロークンしたハートを隠すために、めずらしくバイト先の親友の店で仕事してるんだけど……。

「なあ…、なんでここにいんの？」

「別に。」

「なあ…、用がないなら帰れって。」

「用ならある。」

「…何の用だよ？」

「お前に言う義務はない。」

「……………」

と、まあ…こんな風にかわいくない生意気な弟が、さっきから居座っているおかげで、仕事が全く手につかない。

「いいじゃねーかよ？店ヒマだし…それに、弟イケメンだから女の子よってくるかもしれないねーじゃん。」

「よくねーよ？こいつ顔も性格も母ちゃんに一番似てるから、なんか見張られてるみたいで落ち着かないんだよ！！参観日気分なん

だよ!!」

嫌だよ!! 25にもなって、こんな緊張して仕事するの!! もっと、楽しくダラダラ仕事したいんだよ!!

「なあ、頼むから帰ってくれて!! お兄ちゃんの一生のお願い!!」

「お前の一生は何回あるんだ? これでもう783回目だぞ?」

「もう!! こういうところが嫌なんだよ!! 爽やかな顔して、ネチネチと細かいことをいつまでも覚えてるところが、ホント母ちゃんそっくり!!」

「帰ったら真っ先に、お前が母さんの事を普段からそう思ってるって伝えてやるよ。」

「え!?! う、うそっ!! お願い言わないで!! 一生のお願い!!」

「784回目。」

「き、キィー!! ねえ聞いた!? 今の聞いた!? 学!! 俺、いつになったら口でコイツに勝てるかな!?!」

「安心しろ。お前たちのやり取りを聞いてたけど、お前が弟に勝てる日は一生来ねーよ。」

弟にナメられっぱなしで、切なすぎる親友の姿を見て学は、特に気にするわけでもなく、そう吐き捨てた。

「てんちよー、何か店に男が来てるんですけどー？」

ドアから顔を出して三人の間に突然割って現れたのは、間延びした口調が特徴的な、この店のバイトで高校生の町田悟マチダサトルだった。

「いや、そりゃ来るだろーよ？来なきゃ商売あがったりだな。」

「違いますよー。客じゃないんですよー。」

「はあ？客じゃないなら何しに来たんだよ？」

「それがー、いきなり入ってきたと思ったらー、馬鹿出せて言ってきたー…、多分、幸さんのことじゃないですかねー？」

「なんでだよ!？」

悪びれるわけでもなく、ストレートに自分を馬鹿扱いする、町田に突っ込む幸。

「ああ…多分、てか絶対そーだな。ほら、幸!!お前の客だ、早く行け。」

「どうせ、また彼氏持ちにでも手を出したんだろ？お前は見境がないからな…行ってボコボコにされてこいよ？」

「い、いや!!ボコボコいや!!…学くん、俺たち親友だよね？ちよっと一緒に「めんどくせーからイヤ。」

「…ご、剛く「俺もパス。けど、骨は拾ってやるよ。」

「なんかー、そいつ堅気の雰囲気じゃかったですよー？アレは軽く6人は殺ってますねー。」

「すぐ7人なる。」

「い、イヤアァー！？死にたくない！！まだ結婚もしてないのに、こ、この若さで千の風になりたくないー！！……は！？ま、町田くん！？き、キミ喧嘩強そうだね！？そんな顔中にピアスつけてるんだから、強いよね！？そのピアスの一つ一つは、強さの証だよね！？だから、一緒に来て下さい、お願いします！！」

「違いますよー？ただの趣味ですよ？それより、ホントご愁傷様です……じゃあ、てんちよー休憩行ってきまーす。」

「おう、いつてらっしやい。」

自分を見捨てて、颯爽と休憩に出かける後輩の後ろ姿を、恨めしい気持ちで見送る幸だった。

「もう、諦めろ。」

「ま、まな…」

「大丈夫、ヤバくなったら救急車呼んでやる。」

「……………うん。」

親友の優しさ（？）に腹を括った幸は、意を決して、男が待つカ

ウンターへと向かう為、ドアノブに手を掛けようとしたその時、一足先に外側からガチャリとノブが回され、見たことがある、もしかしたら近い将来義兄弟になるかもしれない人物が入ってきた。

「な、なん…で？ここ、に…？」

「馬鹿を呼べって言うてるのに、いつまでもお前がこないからだ。……俺を待たすなんていい度胸だな？」

「やっぱり、お前のことだったんだな。……で、誰？そいつ？」

「ね、姉ちゃんの…か、かれ「旦那。」…だそうです。」

「…旦那？」

腕を組んで偉そうに幸の前に立ちほだかる人物、彼ができれば一生会いたくなかったと思う相手、それは姉の彼氏で、彼女を監禁している張本人、鴨志田だった。

「で、あの…その…お、俺に…な、何の用ですか？」

てつきり、彼氏持ちの女を寝取った報復だと思い込んでいた幸は、一応免れた修羅場にホッとしたのも束の間、一難去ってまた一難…鴨志田が現れたおかげで、新たな修羅場の予感を感じていた。

「お前に用はねーよ、用があるのは、そっちのクソガキだ。」

「へ！？」

「……………」

そう答えると、これでもかというぐらいに、剛を上から見下す鴨志田に、負けてたまるかと対抗するように、椅子に座ったまま下から睨みつける剛。

その間に挟まれて右往左往する親友をみて、学は、救いの手を差し出すはずもなく、

「なんか…めんどくせー雰囲気だから、俺も休憩行ってくるわ。幸！…後でどーなったか話聞かせてくれよ？」

町田と同じで、颯爽と休憩に出かけるのだった。

「ま、待って！！置いてかないで！！」

彼の悲痛な叫びは、ただただ虚しく消えてく。

「……俺に用ってなんだ？」

「年上には敬語を使えって習わなかったか？」

「生憎、あんたに使う為に敬語は習っちゃいないんでね。」

「かわいくねーガキ。お前らホントに響子さんと兄弟かよ？……ま、いいわ。ガキと遊んでるほど暇じゃないんでね、大人は。」

そういうと、鴨志田は懷から小さな箱を取り出し、剛に向かって放り投げた。それを片手で受け取り怪訝そうに見つめる。彼が手にしたその箱を見て幸が尋ねた。

「……なに、コレ？」

「見りゃ分かるだろ？プレゼント。」

「ええ！？な、なんで鴨志田さんが剛に！？」

「馬鹿、なんで俺がクソガキにやるんだよ？……響子さんからだ。」

「姉さんから…！？」

「なんで、姉ちゃんが……あ、そっか！！お前、今日誕生日だっけ！！」

鴨志田が放り投げた小さな箱は、彼が、響子から『何でも一つだけ言うこときいてやるから』との条件で、渡してくれと頼まれた弟への誕生日プレゼントだった。

「本当なら、そんなもん燃して捨ててやるんだが、可愛い奥さんの頼みだ。仕方ないからシスコン野郎に届けてやった。」

有り難く思えよと、踵を返してそのまま帰ろうとする鴨志田を、ちよつと待てと、剛が引き止めた。

「この際だから、はっきり言っておく。あんたみたいな卑怯者に姉さんはやらない。さっさと解放した方が身のためだ。」

「……………あゝ？」

「ちょ、ご、剛くん！？なに言ってるの！？」

剛の挑発的な言葉に、帰ろうとしていた鴨志田が、足を止め、ゆっくりと振り返った。只でさえ鋭い眼光が、さらに鋭くなり彼を真っ直ぐ捕らえる。豹変した彼の姿を隣で見ていた幸は、慌てて弟を諫めた。

「あんたが、偶然を装って姉さんに近づき、汚い方法で恋人になったってのは調べがついてるんだ。ソレを姉さんが知れば……………何て言うかな？」

きつと幻滅すると、勝ち誇った笑みを浮かべた剛に、今の今まで、鬼のような顔をつきで睨みを効かせていた鴨志田の表情が、スーッと、ほぐれていき、気がつけば背筋が凍るほどの美しい笑みで彼らを見つめていた。

二人は、全身から血の気が引くのを感じた。

「きょうこさんがおれをきらいになる？」

「あ、ああ…なるだろうな…」

幼い子どものような口調に、戸惑いながらも答える。

「そっか……………なら、」

楽しい悪戯でも思いついたかのような表情で、一步、また一步と、ゆっくり剛に近づき、目の前に立ちこう呟いた。

「おまえ、ころさないとな。」

「……っ!？」

「おいっ!!！」

異様な雰囲気の鴨志田に、弟の身に危険を感じた幸が、慌てて二人の間に割り込んだ。

「……………フッ…ハハッ!!！」

「な、何がおかしいんだよ!？」

「……馬鹿が、本気かどうか見破れねーやつが生意気いうんじゃねーよ。」

「な、騙したな!!きたねーぞ!!！」

「うるせー馬鹿。大人は汚い生き物なんだよ?一つ勉強になったな。……おい、クソガキ。良かったなお兄ちゃんが守ってくれて?」

「……………なんだと!？」

馬鹿にした言い方で幸の後ろに立つ剛を見た。その態度が癪に障った剛が、鴨志田に喰ってかかった。

「お、落ち着け剛!!8人目になるぞ!!！」

「…あゝあ、お前らと遊んでたらこんな時間になったじゃねーか。」

腕時計を見て大げさに溜め息をつく。

「さっきも言ったが、大人はな、お前らガキと違って忙しいんだよ？…また、今度遊んでやるよ。」

じゃあなと、今度こそ帰る為に踵を返す。その背に、逃げるのかと罵声を浴びせる。

「はなせっ！！あいつをぶん殴ってやる！！」

「馬鹿っ！！20歳の誕生日にお前を前科持ちになんか出来るかよ！！」

「あ、そうだ…」

帰り際、何か思い出したように立ち止まり、必死で弟を抑える幸に向かってこう言い残した。

「おい、馬鹿。」

「なんだよ！！あ、うそ…！！な、なんですか！？」

「響子さんから、お前に伝言。」

「姉ちゃんが？」

なんだろう…剛にじゃなくて俺に伝えたいことって？実をいうと、ちょっと寂しかったんだよ？剛にはプレゼントあげるくせに、俺には何もないって…でも、なんだかんだ言っても姉ちゃんも俺のこと可愛く思っ……

「『帰ったら、一番最初にぶっ殺す』ってさ。」

「……………へ！？」

鴨志田の口から出てきた言葉は、幸が期待していたのとは全く逆だった。

「じゃあな、ちゃんと伝えたからな。」

「ちょ、待って！！な、なんで！？なんでぶっ殺すの！？」

そして、やはり幸の呼びかけに見向きもせずに、鴨志田は、颯爽と帰っていくのだった。

「なんで、剛には誕生日プレゼントわたりするのに、俺には、ぶっ殺すとかいうの！？姉ちゃんわけわかんねーよ！？……は！！も、もしかして…姉ちゃんの大事にしてるCD、うっかり踏んで割ったことが！？そ、それとも…家に誰もいない間に彼女を連れ込んで、姉ちゃんの部屋でえっちしたことがバレたのか！？…な、なあ剛？どう思う！？なんで姉ちゃんが怒ってんのか分からねーと、俺ぶっ殺されちゃうよ！！」

「安心しろ、幸…。」

「ご、剛…？」

「姉さんが、お前をぶっ殺す前に、俺がお前をぶっ殺してやる。
……………姉さんの部屋でナニやってんだ？この駄目人間が？」

「ご、剛さん？お、落ち着いて…ね、話しあおうよ？いつ、一生
のおねが、いだから！！」

「……………785回目、」

「ご、ご…う…ギヤアア…アアア…！！！」

シスコン弟の前で、姉の部屋でのふしだらな行為は、犯してはならない禁忌であり、また、鴨志田のおかげで腸が煮えくりかえっていた分、半ば八つ当たり要員として、幸は制裁を受けるのであった。そして、仕事が終わわり、ボロボロの身体を何とか引きずり帰宅した彼に、更なる追い討ちをかけるべく、弟の告げ口で鬼と化した二人の兄が、彼の帰宅を今か今かと待ち構えているのであった。

つづく

Episode 1. 『災難』（後書き）

ここまで、読んで下さってありがとうございます（・∀・）

いかがでしたか？

サブタイトルにありますように、今回は、三男の幸くんに降りかかる災難をテーマに書かせてもらいました。

剛くんVS鴨志田くんの図が上手く書けていたか心配でしたが、文才がない私は、これが限界でした（笑）

さて、ここで補足説明の時間です。

響子さんが、剛くんにあげたプレゼントはシンプルなデザインのシルバーブレスレットでした。

ちなみに、幸くん宛てに頼んだ伝言は、『帰ったら一番にぶん殴る』です。

ぶっ殺すは、鴨志田くんの捏造でした（・∀・）

それでは、皆さん

また次の話に☆

さようなら（・∀・）

Episode 12. 『寵愛』(前書き)

こんばんは (・∀・)

今回の話は、前回の話と繋がっています。

短いではありますが、どうぞ読んでやって下さい (・∀・)

それでは、スタート

Episode 12. 『寵愛』

1ヶ月間だけの監禁生活から、今日で半分が過ぎた。響子は、壁にかけられたカレンダーを、まだ半分なのかとウンザリした気持ちで見ている。

この監禁生活で、改めて分かったことがある。それは、自分は家庭的な人間ではないということだ。この二週間、鴨志田の帰りを待ちながら、掃除に洗濯・料理、ついでに執事のイビリに耐えながら、甲斐甲斐しく家事をこなしてきたが、苦痛以外の何ものでもなかった。

やはり、自分は、男に頼ることなく外で働き、自由気ままにその日を暮らしている方があっているのだ。

「……ん？」

ジーンと、カレンダーを眺めていた響子だったが、あることに気がついた。

「…もしかして…、明日って…」

しまった…と、見覚えのある数字を凝視する。明日は、末の弟の誕生日なのだ。毎年、家族（と言っても、自分と両親だけだ）で、盛大にお祝いしてあげる目に入れても痛くない可愛い弟の誕生日を忘れるなんて…。

ひょっとして、鴨志田のやつ…これも計算の内だったのだろうか？

「いや、まさかな…」

いくら兄弟達と仲が悪いからといって、年に一回の楽しみを奪う

ほど悪いやつじゃないだろう。

「考えすぎだな。」

もっと鴨志田を信じてやろう……。それよりも、今は、弟へのプレゼントをどうするか考えなければ。煙草は吸わないからライターなんて贈れないし：服や靴は好みがあるから尚更だ。去年は、サンダラスが欲しいと言うので一緒に店まで買いに行ったけど、今年はそれが出来ない。

そうになると、第三者に代わりに買ってきと頼まなければならぬ。弟の好みを知っていて、尚且つ連絡が取れる同性……

「……………そうだ!!」

条件を満たす者が一人いる、響子の脳裏には母親のゆうこが浮かんでいた。

「そうと決まれば、電話だ。」

響子は、急いで母親の携帯に電話するのだった。

「木ノ下くん…、ちょっといい？」

大学の講義を終えた剛が、友人と帰宅しようとしていたら、一人の女子生徒に後ろから呼び止められた。愛の告白などと冷やかかしを入れてくる友人を軽くあしらひ、先に行くように伝えた。

「何か用？」

「木ノ下くん…明日、誕生日だよね？」

「そうだけど？」

顔を赤らめ、うつむき加減でボソボソと女子生徒が喋る。それを心底ウンザリした気持ちで見っていた。

「その…友達に聞いたんだけど…、彼女いないんだってね…。だから、その…もし、よかったら、明日、私と過ごしてもらえないかな？」

「悪いけど、明日は家族と過ごすから」

自分でも驚くくらいに冷たい声で彼女に告げる。

「あ…そう…ごめんね。急にビックリしたよね！！予定ないわけないもんね…本当にごめんなさい！！」

剛の言葉に酷く傷ついた様子の女子生徒は、無理やり笑顔を作ると何度も頭を下げて走り去っていった。すれ違いざま、彼女の目には涙が浮かんでいたのに、それを見て見ぬ振りした。

『剛のクールな所は、長所だけど、短所でもあるな。』

目に入れても痛くない程可愛い姉が、そう言ったのを思い出した。確かあれば、自分が高校生だった頃の話だ。その当時、好意を持ってくれていた同級生の熱烈過ぎるアタックをうざったく思い、こっ酷く降ったのをたまたま姉が見ていて、その時に言われた言葉。

『いいか？幸のようになれとは言わないけど、女の子には優しく

接っしないと：俊兄の二の舞になっちゃうぞ？」

そんなの嫌だろうなんて：笑いながら自分を諭してくれた、いつかの姉の姿。

剛は、しまった：と、先ほどの女子生徒への酷い対応を、今更ながらに後悔するのだった。

ただの八つ当たりだ。彼女は何も悪くないのに、ただ誕生日を一緒に過ごさないかと聞いただけなのに、その言葉に過剰反応してしまったのだ。

本当ならば、明日は大好きな姉と過ごすはずだった。自分がこの世に生を受けてから、毎年欠かさず祝ってくれていて、そのたびに他の兄弟達は、いつも自分に羨望の眼差しを向けていた。もちろん大人になった今でも。

末っ子というのもあって、姉は自分を本当に大事にしてくれた。他の兄弟には何かと口うるさく（特に、俊兄と幸に）言うが、自分にはそれがなかった。喧嘩だってしたことがない。ただの一度もだ。自分は特別という嬉しい思いとは反面、それが、時々寂しくも思えた。

いずれ、姉は木ノ下家を出て行く。嫁に行かないとは言っているが、きつと行ってしまうのだ。自分の手が届くことのない遠いどこかへ。姉の隣には知らない誰かがいて、自分から奪い去っていく。今までずっと一緒に生きてきた自分から、それこそ疾風の如く一瞬で奪い去っていくのだ。

その憎き泥棒男が、すでに姉の隣に立っていて：もうすぐ彼女を連れ去る事に、剛は、まだ氣付きたくなかった。

「なあ、頼む、この通り！！」

「悪いけど、響子さんの頼みでも、それは出来ないかな。」

鴨志田は、ウンザリしていた。その理由は、この目の前にいる、目に入れても痛くない、むしろ目に入れて閉じ込めておきたいくらい可愛い恋人にあった。

「なんでだよ？ いいじゃねーか、プレゼント渡すくらい！！」

「よくないよ、それを渡す事は、俺にとって屈辱的な事なの。」

せっかく、明日を潰せると思っていたのに。まさか、母親にプレゼントを頼むとは。しまった…、こんなことを響子さんに言うと、確実に怒られるだろうが、彼女がそこまで頭が回るとは考えていなかった。

俺が、彼女を監禁した目的の一つに、生意気な末の弟の誕生日を潰す事が入っていたとは夢にも思わないだろう。いつか話してくれた事があった。弟の誕生日を毎年祝っているんだと。その時の彼女は、本当に楽しそうだった。

だから、嫉妬した。彼女の愛を一身に受ける弟に。他の兄弟達とは接する態度が明らかに違う末の弟に。話しをしている彼女の隣で、ドロドロとした醜い感情が渦巻いていた。

「俺じゃなくて、義母さんに頼めば？」

「頼めるもんなら頼んでるよ。でも、明日は、ご馳走やケーキ作るのに朝から忙しく働いてるから頼めなかったんだよ。」

「別に夜でも渡せるじゃない？」

「そうだけど…、早く渡してやりたいじゃん。」

「なら、今日渡して貰えば？」

「それじゃあ、早すぎだろ？」

誕生日は明日なんだぞと、何とかプレゼントを渡して貰おうと、食い下がってくる彼女を軽くあしらひソファに座る。そんな俺の態度に、響子さんは俯いたまま立ちつくしていた。

我ながら大人気ないと思う。可愛い恋人の頼みなら是が非でも叶えてやりたいと思う。だが、それを叶えてやったら、何のために潰しかかっているのかわからない。響子さんには、本当に申し訳ないが諦めてもらおう。そのプレゼントもゴミ箱に捨ててしまえばいいのだ。それが出来ないなら焼却処分でも構わない。

「分かった…。」

俯いたままの響子さんがそう呟いた。やっと彼女も納得してくれたいだ。

「…このプレゼントを剛に渡してくれたら、お、おまえの…いうこと、何でも一つ聞いてやる。」

何でもだと、最後は消えいりそうな声でそう言った。それは、つまり：響子さんが、たまらなく恥ずかしがるようなお願いでも聞いてもらえるということなのだろうか？何でもということは、そういうことだろう…。

「…ど、どうなんだ？」

何も口にしない俺にしびれを切らした響子さんが、恐る恐る尋ね

てくる。嫌がる響子さんにあんな事やこんな事を……………男の心と
いうものは案外単純だった。

「…仕方ないな。俺の負けだよ、可愛い可愛い響子さんのお願い
聞いてあげる。」

「かも「但し、絶対になんでも聞いてね。」……………」

一つだけだからと、何度も念押しする響子の言葉など届かず、
恋人と過ごす濃厚な一夜に想いを馳せる鴨志田だった。

つづく

Episode 12. 『寵愛』（後書き）

いつもありがとうございます（・∀・）

いかがでしたか？

如何にして、響子さんが剛くんへプレゼントできたかを、分かっていただけたら幸いです（・∀・）

響子さんは、鴨志田くんに一体どんなお願いをされたんでしょうね……それは、皆さんのご想像におまかせします。

さあ、補足説明の時間です

前回の話とリンクしてますが、

まず一つ目

鴨志田くんは、響子さんから預かったプレゼントを、わざわざ本人に渡すのが嫌だったので、木ノ下兄弟の中で、一番害がない幸くんに渡しておけと命令しに店に出向くのでした。

二つ目

なぜ、響子さんは帰ったら一番に幸くんをぶん殴るのかというと、Episode 8. 『浮気』の幸くんとその彼女だったまりの会話を腹を立て、未だに根に持っているからです。

また、気が向いた時でもチェックしてみてください。

長々と語ってしまい失礼しました（・∀・）

また、次の更新でお会いしましょう。

それでは（・∀・）

（・∀・）サヨナラ

Episode 13. 『喧嘩』(前書き)

こんばんは(・∀・)

続きが何とかできたので、更新します

いつものように駄文ではありますが、
読んでやって下さい(・∀・)

それでは、スタート

Episode 13. 『喧嘩』

鴨志田と喧嘩した。いつものおふざけじゃなくて、本当の喧嘩をした。もしかしたら、ふたりが出会ってから初めてかもしれない：そんなことを考えながら、響子はクッションに顔を埋める。

喧嘩の原因は、響子の弟が先日の誕生日プレゼントのお返しにと、彼女に贈ったペンダントにあった。

母親経由で、それを受け取った響子は、可愛い弟がくれたものだからと早速身につけた。会社から帰宅した鴨志田がそれに気付き、自分は贈った覚えがないものを響子が身につけているのを疑問に思い尋ねた。それを待ってましたと言わんばかりに、響子は、弟からお返しに貰ったのだと、鴨志田に嬉しそうに話すのだった。

笑顔の響子とは対照的で、鴨志田の機嫌は急降下。それをいつものことだと思っていた。だが、今回は違った。話している最中に、ふと鴨志田の手がペンダントへと伸びてきた。その行動に気付いた響子が、どうかしたかと聞く間もなく、彼の手は、ペンダントを思いつき掴み容赦なく引きちぎった。

『こんなもの：イラナイ』

無表情で、そう呟くと迷うことなくゴミ箱へと投げ捨てた。

一瞬の出来事で、何が起きたか即座に理解出来なかった響子だったが、無惨にゴミ箱へと投げ捨てられたペンダントを見て、一気に怒りがこみ上げてきた。

『な、なにするんだ!!』

大声で怒鳴りつけ、ゴミ箱へと駆け寄ろうとするが、鴨志田に阻まれる。

『イラナイって、いつてるだろ?』

『……っ!?!』

痛いくらいに腕を掴まれ引き戻された。

『おれいがいのおとこのものをみにつけたら…だめだろう?』

『あたしの弟から貰ったものだ!! 他の男とか言うな!!』

頭にきていた。可愛い弟からのプレゼントをゴミ箱に捨てられて。だから、本当は、あんなこと言うつもりなんてなかったのに、つい口に出てしまった。

『あたしの家族を悪く言うな!! お前なんか…赤の他人のくせに
!!』

『……ッ!?!』

その言った瞬間、鴨志田の顔色が変わり、掴んでいない方の手を振りあげた。

殴られる、そう思ったあたしはとっさに目を瞑った。

しかし、いくら待っても殴られる気配はない。ゆっくり目を開け鴨志田を見たら、そこには、酷く悲しそうな顔をした鴨志田があたりを見ていた。

『…おい』『…頭冷やしてくる。』

そう言うとき鴨志田は、背を向けて部屋を後にした。

なんだよ……なんでお前が被害者のような顔をするんだよ……クッシヨンから顔を上げて、ボロボロになったペンダントを見た。

大事なペンダント引きちぎられて捨てられたのはあたしなんだぞ……泣きたいのはこっちなのに、鴨志田の顔が頭から離れない。

響子は、机に置かれたペンダントと、先ほどのやり取りを思い返して、深い溜め息をつくのだった。

響子さんと喧嘩した。いつものおふざけじゃなくて、本当の喧嘩をした。俺は悪くない……いや、悪いのだろう。けど、響子さんの方がもっと悪い。

そんなこと思いたくないのに……鴨志田は頭を抱えながら、響子との喧嘩の原因を心底恨んだ。

会社から帰宅した鴨志田は、自分を出迎えてくれた響子の様子がやけに嬉しそうなので、何かいいことでもあったのかと、響子に尋ねようとした。その時、彼女の首に見覚えのないペンダントがかけられている事に気が付いた。

自分が贈ったモノではないし、勿論、響子の私物は全部チェック済みなので彼女のモノでもない。なら、響子の母親のモノだろうか？ 確か今日、遊びに来ると言っていた筈だから。色々な考えを巡らせながら、そのペンダントはどうしたのかと本人に尋ねてみた。

『気づいたか？ いや、剛がさ……この前のお返しについて、プレゼントしてくれたんだ。』

可愛いよな、なんて嬉しそうに話す響子さん。その笑顔は、他の男が与えた笑顔なんだと思ったら、気持ちが急速に冷めていくのを感じた。

『気なんか使わなくていいのに…、剛のやつ毎年プレゼントのお返しだって言ってくれるんだよ。これじゃあ、誕生日プレゼントをあげた意味がない。』

そう思うだろうと、同意を求めてくるけど、それに答えてあげる余裕はなかった。

笑顔で話してくれている最中、ずっと、彼女の首にかけられているペンダントが首輪に思えてしかたなかった。弟の所有物だと言わんばかりに。弟には、そんな気は一切なく、ただただ純粋な気持ちでプレゼントしたペンダントが、自分には彼女を縛り付ける首輪にしか思えなかったのだ。だから、引きちぎった。解放するために。そして、二度と縛り付けることのないように捨ててやった。イカレてる、きつと、誰もがそう笑うだろう。でも構わない。それほど、自分は彼女のことを愛しているから。

『あたしの弟から貰ったものだ！！他の男とか言うな！！』

頭に来た。必死になってペンダントを取り返そうとする彼女に。自分はこんなに想っているのに、まるで、俺が悪者扱い。気持ち、押し付けだとは重々承知だが、それでも許せなかった。

だから、本当は、あんなことするつもりなんてなかったのに、つい手が出てしまった。

『あたしの家族を悪く言うな！！お前なんか…赤の他人のくせに！！』

その言われた瞬間、俺の中の何かが切れて、思わず掴んでいない方の手を振りあげた。

殴られると思った響子さんは、身を低くしてギュッと目を瞑って

いた。

なんてことを…愛おしくてたまらない人を殴ろうとするなんて。赤の他人なんて言われ慣れてるはずなのに…、俺という人間が、彼女の中では存在しないみたいで悲しかった。

『…おい』『…頭冷やしてくる。』

響子さんが、心配そうな顔をして俺を呼び止めようとした。でも、今、彼女と一緒にいると自分が何をするか分からないので、そう言うって部屋を後にした。

響子さんは、優しい。口は悪いし喧嘩っ早いところも多々あるので、そう見えないかもしれないが、誰にでも平等に優しくかった。

この監禁生活だって、警察にでも何でも駆け込めば、即座に終了するのにな、そうはせず、いまだに俺に付き合ってくれている。だから、勘違いしてしまうのだ。本当は、響子さんも…などと。その優しさが時折、無性に苦しかった。

謝ろう…、俺が彼女を殴ろうとしたことは、事実だ。彼女の心を傷つけたことを謝らなければ。

鴨志田は、深い溜め息を一つ吐くと、ゆっくり立ち上がり響子のいる部屋へと重い足取りで帰って行くのだった。

ガチャリと、ドアが開く音がした。きっと、鴨志田が帰ってきたのだと急いで玄関まで駆けていった。

「……………」

「……………あ、あの…」

気まずい。非常に気まずい。普段は、俺様な態度で強引に話を進める鴨志田が、今じゃ叱られた子どものように顔を伏せて何も喋ろ

うとしない。

でも、その態度でコイツが十分に反省していることがわかったの
で、

「……さつきは、悪かったな。」

まだ、納得いかないが、あたしが折れてやることにした。

「ほら、突っ立ってないで上がれよ。ご飯にしよう？ あたし、腹
減っ……！？」

リビングに戻ろうとするあたしを、鴨志田は後ろから抱き締めた。

「……ごめん…、」

小さい声、でも精一杯の気持ちで謝ってくれた。だから、何も言
わずに、頷いて震えるその手を握りしめた。

こんな鴨志田が見れるなら本気の喧嘩もたまにはいいかもしれな
い、なんて暢気に笑っていた。

この喧嘩を境に、少しずつ鴨志田との距離が離れようとしている
なんて気づきもせずに。

「……さつきは、悪かったな。」

謝りたいのに、いざ、本人を目の前にとすると、なかなか言葉が出
てこない。そんな俺の心を見透かしたかのように、響子さんがそう
言った。

「ほら、突っ立ってないで上がれよ。ご飯にしよう？ あたし、腹
減っ……！？」

大事なモノを壊されて許せるはずなんてないのに、まるで気にしていない響子さんの姿を見ると、申し訳ない気持ちが一気に溢れてきて、思わず後ろから抱き締めた。

「……ごめん…、」

何が、なんて聞かなかった。ただ、小さく頷いて俺の手を握りしめてくれた。それだけで、さっきまで空っぽだった俺の心は、いっぱい満たされた。

本当に優しい。でも、やっぱりその優しさが苦しい。

願わくば、このまま時が止まって、今が永遠にればいいのに…そんなことを思って、彼女をもう一度、強く抱き締めた。

つづく

Episode 13. 『喧嘩』 (後書き)

毎度、ありがとうございます (・∀・)

いかがでしたか？

七夕の日に喧嘩エピソード (笑)

何気にシリ阿斯で申し訳ないです。

この話から折り返しになります。

いよいよ、物語も佳境ってやつですね (・∀・)

自分が思い描く物語が書けるよう頑張ります

さて、ここで補足説明なのですが、

今回は、……特にないですね。

強いていうなら、頭を冷やすからと、部屋を出た鴨志田くんが向かった先は、マンションの屋上だった…ですかね。

それでは、皆さん

また、次の話で (・∀・)

(・∀・) サヨナラ

Episode 14. 『宝物』 (前書き)

こんばんは (・∀・)

深夜の更新ですいません。

続き…と、言っても番外編で申し訳ないのですが…、
出来ましたので読んでやって下さい。

それでは、スタート☆

Episode 14. 『宝物』

「ただいま、母ちゃん腹減ったー！！」

腹を空かせてバイトから帰宅した木ノ下家の三男坊が、母がいるであろうリビングにそう言いながら入ってきた。

「…母さんなら、父さんと食事にでかけたぞ。」

「あれ？俊兄…なにやってんの？てか、母ちゃんいないって…おれのご飯は？」

しかし、そこに居たのは母ではなく、一番上の兄、俊だけだった。

「…飯なら、冷蔵庫の中にレトルトカレーがあるから、それを温めて食べろ。」

「ええー！！クタクタになるまで働いてきた息子にレトルトカレーって…！！もっといいもの食べたい！！寿司とか寿司とか、あと…寿司食べたいー！！」

「…文句を言うな。たまの二人だけの食事なのだから。というか、お前はクタクタになるまで働いていないだろう？寿司などおこがましいわ！！」

定職にも就かずダラダラと毎日遊ぶことばかり…と、怒る兄に対し、はいはい…すんませーん…反省してまア…と、ものっ凄いい軽いい、それでいて全く反省の色が見えない態度で、ソファ―に座る兄の隣に腰を下ろした。

「ん？アルバム？」

「そうだ…荷物を整理していたら出てきたから見ていた。」

「へえ…あ、これって姉ちゃんが1歳の時？」

幸が指し示した写真には、1歳の誕生日を迎えた姉の両隣に、対照的な表情で座る二人の兄が写っていた。

「淳兄めっちゃ笑顔じゃん。つか、髪長いから女の子みてえ。…それに比べて、俊兄ちょーブサイク。なんでこんな不機嫌なの？」

「誰が不細工だ！？すみれ保育園の中で、私に適うやつは誰一人として存在しなかったんだぞ！！一番可愛かったんだぞ！！………これには、色々あったのだよ。」

「あつそ…、ご飯たべよつと。」

いきなり遠い目で、当時を思い出し始めた兄に、全く興味を持たない弟は、腹ごしらえをするべく席を立った。

「ちよつと待て！！なんだその態度は？ちゃんと話を聞け！！」

「ええー！！だって…その話って長くなるでしょ？おれ、8時から見たいテレビあるもん。」

「…………仕方ない、ほらさっさと電話しろ。」

「…………へ？どこへ？」

「寿司を取るのだろうか？早く電話しろ。」

「…お、お兄様～！！ち、ちよつ、待ってね！！すぐ電話して話
きくから～！！」

そう言うのと、急いで電話をかけるべく、タ○ンページを取りにい
く現金な弟だった。

子どもの頃から何をさせても、完璧だった私は、若干3歳で平仮
名をマスターするほどの優秀な人間だった。

いや、『だった』じゃないな…、それは、今も現在進行形であり、
また、未来においても同じ事と言えるだろう。

一流の大学に合格して、一流の弁護士事務所に就職し、そこで看
板弁護士として日夜忙しく働き、そして、一流の女と結婚をする。

端から見れば羨むほど順風満帆な生活を送るものだと思信していた。
しかし、神とは何と残酷なのだろうか？私が完璧であるゆえ、そ
の類い希なる才能に嫉妬し多大な試練を与えた。

その試練とは、何も言わず三步下がってついてくるような女だと
思っで結婚した妻が、いざ蓋を開けてみると羊の皮を被った魔王だ
ったということだ。

結婚してからは、シンデレラのごとくひたすらこき使われる毎日
で、口答えをしようならば雷おやじも恐れを成す鉄拳で制裁される。
まさに、恐怖政治の到来だ。

数少ない友人の一人が、結婚とは人生の墓場だと嘆いていたが、
ようやくその意味が分かった時には……、

「あ～！！！」

「なんだ？人が話している途中に？」

「俊兄の自慢話と、すげー悲惨な結婚話は今度聞くからさ…、この写真の話してくれない？」

写真の思い出を話すのかと思いきや、待てど暮らせど自分の話しかしない俊に、痺れを切らした幸は、早く本題に入るように促した。

「さっきも聞いたけど、なんで俊兄不機嫌なの？姉ちゃんの誕生日なのに？」

「人間というものは不思議な生き物でな、今は目に入れても痛くないほど可愛い響子が、昔は疎ましくて仕方がなかった。」

「ええ！？なんで？てか、初耳なんだけど！？」

「お前が生まれてくる以前の話だからな。」

兄の口から驚きの事実を告げられ心底驚く幸。そんな弟の姿に笑いながら当時のことを懐かしむように語りだした。

幼少の頃は、響子に対する感情が、どこか冷めていた。今思えば、それは、ただの嫉妬だったのかもしれないな。

私と淳と男が続いた木ノ下家で、初めて生まれた女の子の響子は、それはそれは、周りにたいそう可愛がられた。

後から生まれたくせにでしゃばりおって…私は、お前よりも先に生まれたんだぞ。今は、みんな物珍しいだけで時期に飽きる、1番先に生まれた私が1番可愛いに決まっている…そう考えていた。

私は、1番だという優越感に浸っていたんだ。

「うんうん：俊兄は、昔からいんけんな子どもだったんだね。」

しかし、時は経っても一向に響子を取り巻く状況は変わらない。それどころか、ますます周囲の溺愛ぶりは加熱していく。

いつしか私は、優越感に浸るのではなく、しがみつくようになっていた。

そして、事件は起こった。

響子が、私が宝物のように大切にしていた海賊船の模型を壊してしまったのだ。勿論わざとじゃない。私がしまい忘れたその船を、代わりに片付けるために部屋まで運ぼうとしていたのだ。

普段、響子に対して冷たく接していた私の物を、なぜ片付けようと思ったのか：それは、彼女が知っていたからだ。この船が私にとって何より大切な物かを。

この船は、今は亡き祖父に、小学校の入学祝いに買ってもらった。私は、いつかこの船のような海賊船で、自分だけの宝物を探しに行くのを夢見ていた。

「へえ：俊兄にもそんな子どもらしいところがあったんだ。」

だが、その船は、私が運ぶのでも少々手こずるぐらいの大きさで、4歳の、しかも女である響子が運ぶのは至難の業であり、案の定、重さに耐えきれず落としてしまった。

『…ご、めんなっ…さい!!』

泣いて謝る響子に、母さんは許してやれと言ったが、私は、壊れた船をみて、自分の夢が永久に閉ざされたようで許せなかった。

『ぜったいに、ゆるさない!! きょうこなんて…大きらいだ!!』

私は、泣いて叫んで、そのまま家を飛び出した。

勢い余って家を出たのはいいが、行く宛てなどない私は途方にくれていた。いっそ、ハーメルンの笛吹き男なり、赤いくつ履いてた女の子をさらった異人なりが出てきて、私を連れて行ってくれればいいとさえ思った。

「うわぁ…なにその荒んだ考え!?!? そんな6歳児いやだよ!!」

そんな願いなど叶うわけがなく、私が行き着いた先は、父さんとよく遊びにきていた公園だった。

何時間そうしていただろうか、ブランコに座り、ジッと空を見ていた。辺りは暗くなり沢山の星が綺麗に光っていた。

まるで、宝箱に入っている財宝みたいだと、星を見上げて泣いていた。

『…俊くん。』

『…っ!?!?』

星を見入るのに夢中になっていた私は、帰りが遅いのを心配し探しにきた父さんが、後ろに立っていたことに全く気づかなかった。

『と、とうさん…なにしに來たの…』

『俊くんを迎えに來たんだよ? おなか減ったでしょう、…さあ帰ろう。』

にっこりと笑って手を差し出す父さんに、私は、帰らないと首を横に振った。

そんな私の隣に腰を下ろした父さんは、こう尋ねてきた。

『…俊くんは、響子ちゃんがきれい？』

『…き、きれい…』

『どうして？』

『わたしのたからものをこわした。』

『…わざと？』

『…ちがう、けど…』

『けど？』

『みんな、きょうこばかりみるから…きれい、』

『そっか…』

『とうさん、なんできょうこばかり…だいじにするの？』

『うーん…パパは、俊くんも淳くんも響子ちゃんも、勿論ママもみんな大事だよ？』

『…でも、きょうこをおひめさまみたいにするじゃないか？』

『それはね、響子ちゃんがお姫さまだからだよ。』

『…え?』

父さんの言葉の意味がわからなかった。

『俊くんには、いつか言わなきゃいけないと思っていたから言うけどね、響子ちゃんとは、ずっと一緒には暮らせないんだよ。』

『なん…で?』

『それは、世界のどこかにいる素敵な王子さまが、いつか響子ちゃんの前にあらわれて、幸せにするために連れて行っちゃうからだよ?』

悲しそうに父さんは笑った。

いつか響子がいなくなる、私が、その言葉におぼえた感情は嬉しさではなく、同じく悲しみだった。

『だから、王子さまがあらわれるその日まで、パパ達は響子ちゃんをお姫さまのように大切に育てているんだ。』

『そうだったのか…、』

『そして、俊くんと淳くんは、響子ちゃんが本物の王子さまに出逢うまで、勇敢な騎士^{ナイト}としてそばにいて守ってあげなきゃいけないんだよ?』

『…わたしとじゅんが?』

『そう、出来るかい?』

『………できる。とうさん、わたし、きょうこをまもる!』

『よし、約束だ。』

私と父さんは、約束のあかしとして指切りをした。

『わたしがホンモノのおうじさまかどうかをみきわめて、ちがうやつなら、ならくのそこにつきおとすよ!』

『ははっ、そのいきだ……よし、』

『……?』

『…帰ろっか。』

優しく笑って手を差し出した。私は大きく頷いて、今度は、その手を取った。

月明かりが照らす道を歩きながら、私は父さんにこう尋ねた。

『とうさん…』

『ん?』

『きょうこ…おこってるかな?』

その場の勢いで大嫌いだと言ってしまった事に、今更ながら後悔していた。

『大丈夫。響子ちゃんは、ちゃんと分かってるよ。』

『うん…』

その言葉を信じたかったが、やはり、不安でいっぱいだった。

『ただいま。俊くん帰ってきたよ！』

『おかえりなさい、パパ。俊くん。』

『おかえりー』

玄関を開けると、母さんと淳が笑顔で迎えてくれた。しかし、その中に響子の姿はなく、ますます不安になる。

『響子ちゃんは？』

私の心を察するように、父さんが母さんにそう尋ねる。

母さんは、ちょっと待ってねと笑って、響子の名前を呼んだ。呼ばれた響子は、画用紙を手にし、不安げな表情でこちらに歩いてきた。

『……しゅんくん、これ…』

私の前までやって来て、手にしていた紙を恐る恐る差し出す。

『……………これは、』

受け取った画用紙に描かれていたのは、星が燦然と輝く夜空を、航海する一隻の海賊船の絵だった。

『その絵はね、淳くんに手伝ってもらって、響子ちゃんが一生懸命描いたのよ？上手に描けてるでしょう。自分が俊くんの大切な船を壊しちゃったからって。……もらってあげてくれる？』

私と響子の髪を優しく撫でながら母さんが言った。

『…ごめんね。たいせつなふねをおとして…』

『ううん、べつにいいよ…。わたしこそごめん。大きらいなんていったりして。ほんとは、だいすきだよ。きょうこ、ありがとう。このふね、たいせつにするね。』

『だいすき…？きょうこのときらいじゃない？』

『うん！！だいすきだよ。』

私のその言葉をきいた響子は、満面の笑みで嬉しそうにこう言った。

『きょうこも、しゅんくんだいすき！！』

『……、』

私は、その時の響子をみて、気がついたよ。

「なんだ、こんなにも近くにあったのか…私の宝物は、って。…この海賊船が、私を本当の宝物へと導いてくれたのだ。」

「これって…、」

そう言いながら、幸に一枚の古ぼけた画用紙を見せた。そこには、色あせて半分消えかかっているはずなのに、

「私の大切な宝物だ。」

今も昔も変わらず、俊の目には、夜空を燦然と輝く海賊船の絵が映っていた。

「そっか…なんか、いい話聞いたなあ…：…つーわけで、はい。」

ニコニコしながら、手を差し出す幸。

「なんだ??」

その不可思議な行動に、首を傾げる俊。

「いや、だから…お・か・ね!! まねーぷりーず!!」

「なんで…私が、貴様にお金を渡さなければならんだ?」

「ま、またまた…：出前代でしょ? さっき、寿司の出前取ったじやん!!」

「だ・か・ら、なんでそれを私が払わなければならないんだ!!」

「だ、だって!?! 電話しろって!!」

「金を出してやるなど、一言も言ってないぞ?」

「そ、そんな〜!!じゃあどうすんの!?俺、今、財布に7000円しか入ってないよ!?5000円の寿司代払ったら2000円しか残らないよ!!給料日まだ10日あるのに!!」

「知らん、勝手に自分の都合のいいように解釈する貴様が悪い。」

「鬼!!悪魔!!…って、言ってる場合じゃないよ!!早くキャンセルの電話しなきゃ!!」

寿司屋にキャンセルの一報を入れるべく、急いでタ○ンページを取りに行く幸。

「馬鹿めが…、今から間に合うわけなからうが。」

そんな弟の後ろ姿を、呆れ顔で見送る俊だった。

「…さ、風呂に入るか。」

さんざん自分の思い出話に付き合わせたくせに、弟をあっさり見捨てて、話したいことを話せて満足した俊は、風呂に入る準備をするべく、自分の部屋へと戻っていくのだった。

その手には、しっかりと宝物を握りしめて。

つづく

Episode 14. 『宝物』（後書き）

いつもありがとうございます（・A・）

いかがでしたか？

続きを書かなければいけないのに、番外編で申し訳ないです。

さて、補足説明をさせてもらいます。

出前をキャンセル出来なかった幸くんは、泣く泣くお金を支払いました。

給料日まで2000円で過ごせるはずがなく、親友の学に援助を頼むのですが断られ、バイトの町田くんに頼みましたが断られ、最後の岩のパパに頼みましたが、ママに返り討ちにあいましたとさ☆

それでは、皆さん

また、次に

（・A・）サヨナラ

Episode 15. 『変化』(前書き)

こんばんは(・∀・)

続きがやつと出来たので、

いつもながらの駄文ではありますが、
読んでやって下さい。

それでは、

スタート(・∀・)

Episode 15. 『変化』

最近、鴨志田の様子がおかしい。いつものようにベタベタと甘えるだけ甘えてきたと思えば、急に、我にかえったようによそよそしい態度で接してくる時がある。

いや、別にそれはいいのだ。アイツの甘え方は、おそらく周囲が見たらドン引きするくらいに異常なものだから、たまによそよそしいぐらいが調度いい。

しかし、何と言いませばいいのか……とにかく、一言でいうと気持ち悪い。何か裏があるのか、単純にあたしに飽きてきたか……後者なら万々歳。

確か、佐藤の時もそうだった。あんな万年浮気男でも、あたしにもそれなりに優しくかった。浮気の後ろめたさとかそういうんじゃないくて、一応『付き合ってる恋人』への優しさからだ……思う。だが、その優しさは次第に薄れて行き、気がつけば恋人から『タダの女』にランク下げされていた。

要するに飽きたのだ。あたしよりイイ女は沢山いる。だから、鴨志田も……。

” チクッ ”

まただ……最近、こういうこと考えると胸が痛くなる。狭心症だろうか？嫌だな……年を取るって。明日にでも、人間ドックに行こう……って、出られないんだった。

「足りない頭を働かせるより、目の前のことに集中し、手を動かさないませ。」

「痛っ！！」

考えに浸っていた響子の手に、容赦なく藤堂の指し棒が飛ぶ。

「今はお花の稽古中でございますぞ？よそ事を考える暇などありませんまい。」

返事は、と…目の奥を光らせる藤堂に、ハイと、震えながら答える響子だった。

「全く…少しは、努力する事を覚えなさいませ。料理も裁縫も未だ上達しないとは、それでも鴨志田家の嫁ですか。」

「すいませんね…不器用で。ムカつくあたしと違って、可愛い可愛い坊ちゃまは努力なんてしなくても完璧ですもんね。あと、嫁になった覚えは全くないんで。」

やれやれと、嫌みを吐く藤堂に、嫌みで返す響子。三週間で、少しだけ成長したのだった。

「努力もせず何事も完璧にこなせる人間など、この世にはおりませんまい。そんな事も分からないとは…本当にあなたは賢くないのですね。」

「だ、誰がアホ「坊ちゃまの事を本当にそう思いならば、それは愚の骨頂。坊ちゃまが如何に努力し現在に至るか知りもしないで、二度とそのような事を申すではありませんよ。」

静かに真っ直ぐ響子の目を見て言った藤堂が、やけに真剣だったので、思わず次に出す言葉を引っ込めてしまった。

「守様は、いずれ鴨志田家をお継ぎになる身。即ち、鴨志田家に関わる総ての人間の人生を背負っておられるのです。それは、家族や一族だけではありません。私達、鴨志田家に仕える者や鴨志田家が運営する会社で働く者、そしてその家族。何千人という人間の運命が、彼の行動次第で左右されてしまうのです。」

「そ、そんな…オーバーな…。」

「いいえ、それが人の上に立つという事なのです。例えば、その事を守様が望んでいないとしても。」

少しだけ昔話をしてもよろしいですかと聞いてくる藤堂に、首を縦に振った。

「この話は、守様が10歳の誕生日を迎えられた時の話です。まだ、大旦那様…つまり、守様のお祖父様が健在されておられ、可愛い孫の誕生パーティーに色々な著名人を迎えて盛大に披露する計画を立てられておられました。まあ、誕生パーティーとは名ばかりで、本当は、守様の10歳の節目に、正式な鴨志田家の跡継ぎとして財界の方々に御披露目する為の席でしたが。」

「たった10歳で？アイツも大変ですね。」

「ええ…。大旦那様は大変厳しい方で、例えば我が子であっても鴨志田家に相応しくない者は、容赦なく跡継ぎ候補から外しました。守様の叔父上がそうであったように。」

「叔父上？」

「元来、守様の父上は跡継ぎではなかったのです。なぜなら、嫡男は兄の創様ハジメでしたから。しかし、10歳の御披露目の席でピアノの演奏に失敗し、跡継ぎ候補から外されてしまいました。」

「ピアノの演奏に失敗したって……それだけで!？」

そんな世界が本当にあるのかと、響子は目を丸くした。

「はい、それだけです。しかし、鴨志田家の頂点に立つ者として、それは許されぬ失敗だったのです。なぜ直前になって曲を変更したのかと、大旦那様を泣いて責める創様に耳を貸すことなく、弟の保様タモツを、自分の跡継ぎとしてその場で発表されました。」

「直前で曲を変更って……まるでわざと失敗させようとしてるみたい。何でそんなこと……?まさか、鴨志田の時も?」

「ええ……そのまさかです。守様も直前になって、大旦那様から曲目の変更を伝えられました。」

「……どうだったんですか?」

「見事に失敗いたしました。……しかし、創様とは違い守様は、正式な跡継ぎとして発表された。」

「結果は、ふたりとも失敗だったのに、何で鴨志田は……?」

「それは、演奏後の守様が、ただ一言、悔しいと言って涙を流されたからです。」

藤堂の発した言葉の意味が分からなかった響子は、どういう事かと再度尋ねた。

「二人とも条件は同じでした。与えられた曲目を直前に変更され、失敗。しかし、その後二人が取った行動は、見事に対照的でした。なぜ曲を変更したのかと他者を責めた創様と、なぜ変更された曲をキチンと練習していなかったのかと己を責めた守様。大旦那様は、このピアノ演奏に、2つの意味を隠したのです。」

「2つの意味？」

「まず、1つ目。それは、失敗を恐れること。大旦那様が、直前に曲目を変更したのは、それを学ばせる為だったのです。二人は、演奏に失敗し大旦那様からの信頼を失うという恐怖に陥った。そして2つ目。失敗した事に対しどう行動したか。」

「人のせいにしたか、しなかったかって事ですか？」

「とどのつまり、そういうことです。他人を責めた創様は、反省することはなく次へ繋げる努力を怠る：そこに残るものなど何もない。しかし、逆に己を責めた守様は、この事をしっかりと反省し確実なる次へと繋げる為に努力する事でしょう。そして向上心が生まれるのです。大旦那様は、演奏を通して、人の上に立つ者としての資格を、お二人に問おうとしたのです。先程も申しましたが、鴨志田家の頂点に立つという事は、関わる総ての人間の人生を背負うという事。会社に置き換えると、たった一度の失敗で依頼主の信頼を失う。即ち会社を危機に陥れるという事。仮に失敗した場合でも、

それを反省し次へ繋げる事で、依頼主への信頼を回復しようと努力する。その努力は、会社を今以上に大きくし未来へと繋げるのです。大旦那様は、その資格を持つ者こそ鴨志田家の頂点に立つべき人間だと、そう仰りたかったのでしょう。」

全く食えないお方だと笑う藤堂に、響子は、先ほどから引っかかっていった疑問をぶつけた。

「そんな大それた御披露目会まで開くといて、何で鴨志田は刑事になったんですか？」

出会った頃の鴨志田の職業は確かに刑事だった。もう少しで、みんなの前で、手錠でお互いが繋がれるという羞恥プレイを体験させられそうになったしなど、響子は、鴨志田との喫茶店でのやり取りを思い出していた。

「そんな厳しいおじいさんだったら許さなかったんじゃないですか？」

「それは、私が大旦那様にお頼みしたのです。」

「藤堂さんが？」

「はい。父上から会社をお譲りになられるまで、自由に好きな事をやらせて頂けないかと。」

「よく許してくれましたね。」

「いいえ、猛反対でした。それでも、私はクビを覚悟でお頼みしたのです。そんな私を見かねた大奥様が、大旦那様を説得する為に

「一役買って下さったのです。」

「鴨志田のおばあちゃんがですか？」

「大旦那様が、唯一頭が上がらなかったのが大奥様でした。大奥様のおかげで、守様は、会社を譲り受けるその日までは、自由に好きな事をやってもいいとお許しを頂きました。」

自分のクビも飛ばずにすんだと笑う藤堂。

「藤堂さんは、鴨志田に逃げ道を作ってやりたかったんですね。」

「……え？」

「アイツの事だから、絶対にそんな事はないと思うけど、万が一、自分が置かれている状況から、どうしても逃げたくなった時の道を作りたかったんじゃないんですか？」

響子のその言葉に、藤堂は耳を疑った。なぜなら、昔に一度聞いた言葉によく似ていたからだ。

『藤堂は、本当に守の事を慕ってくれているのね…あなたが、頑なにあってあの人に頭を下げるのは、進むべき道は一つではないという事を、守に教えたいからでしょう？』

『お、奥様…私は!!』

『藤堂、本当にありがとう。孫に仕えてくれて。私は、これほど嬉しいと思ったことはないわ。』

自分は鴨志田家に仕える執事としてあるまじき行為を行おうとしているのに、そんな風に言っただけで下さるなんてと、藤堂は涙が出る程嬉しかった。

「藤堂さん…？」

突然、固まったまま動かない藤堂を不審に思い声をかける響子。

「どうしてそんな風に…私は、鴨志田家に仕える執事ですぞ…？」

「あ、いや…なんとなく。何か気に障ったならすいません。」

生まれた時から進むべき道が決まっており、小さい時から勉強や芸事ばかりで友達と遊ぶ暇さえなかった。しかし、それが己の運命なのだ、抗う事なく淡々と生きてこられた。もちろん、その影では何十倍もの努力をして。そんな守様が、唯一断固として首を縦に振らなかったのが、有名資産家令嬢との縁談だった。上に立つべきならば、いつまでも遊んでいないで身を固めるべきだと、一族から半ばごり押しで薦められたが、将来の伴侶になるべき人は、もうすでに決まっているとその薦めをきっぱり拒んだ。初めて、己の運命に抗った守様が、選んだのがこの目の前にいる娘。

「…とんだじゃじゃ馬だ。」

「え？馬？」

しかし、主の目は確かだったのかもしれない。守様の涙を初めてその目に見た日、私は一生お仕えすると誓った。だから、出来ることなら何でもやってきたし、これからもそれは変わらない。

「あの、藤堂さん？」

だが、こればかりはどうしようもないのだ。

「奥方様、」

「いや、だからあたしは「これから先、どんな事が起きようとも、守様をどうぞ見限らないでやって下さいませ。あのお方は、本当に奥方様の事を想っておられるのです。」

お願いしますと、今までに聞いた事がないような切羽詰まった声で、切実に頭を下げる藤堂に、まるで、これから鴨志田と自分の間に、何かとんでもないことが起きようとしているではないかと不安になる響子だった。

つづく

Episode 15. 『変化』(後書き)

ありがとうございました(・∀・)

いかがでしたか？

久しぶりに藤堂さん登場(・∀・)

サブタイトルの変化というのは、

響子さんの鴨志田への心の変化と見せかけて、

鴨志田が響子さんへの態度の変化と見せかけて、

藤堂さんの響子さんに対する感情の変化を書きたかったのですが、
伝わったでしょうか？

すみません、ややこしくて(・∀・)

さて、恒例の補足説明ですが、

今回は、好きな事やってよしのお許しを頂いた鴨志田くんが刑事に
就いた理由です。

単純に、獲物を追い詰め捕獲するという作業に心を奪われたからで
す。

きつと、前世は猟師か何かだったのでしょう。

というわけで、未だプシリアスが続いておりますが、どうぞ最後
までお付き合い下さいませ。

次回分が仕上がったら速攻更新しますので、首をジャックの豆の木
並みに長くしてお待ち下さい(・∀・)

それでは、次回に

(・∀・) サヨナラ

Episode 16. 『終了』 (前書き)

こんばんは (・∀・)

寒くなりましたが皆さんいかがお過ごしでしょうか？

インフルシーズン到来なので、かからないよう気をつけて下さい。

今まで結婚逃走曲を読んでもくださった方々、本当にありがとうございます。
いました。

感謝感謝でいっぱいです!!

沢山言いたい事はありますが、長くなるといけないので本編にいきます。

それでは、スタートです (・∀・)

Episode 16. 『終了』

『明日、デートしよ。』

『……………え?』

開口一番、帰宅した鴨志田の口から出てきた言葉は、響子の意表を突くには充分だった。

『な、なに…とつぜん?』

『別に突然じゃないよ?俺は前から考えてたよ。だって、俺たちって付き合ってからデートらしいことなんてしたことないだろ?だからさ、たまにはいいかなって。』

『でも、どうやってデートするんだよ?あたし、この部屋から出られないんだぞ?』

『ああ、それなら…明日は、特別に条件は無効にしてあげるよ?』

それならいいでしょ?と、あっけらかんと言う鴨志田に、戸惑う響子。そんな彼女を見て更にこう続けた。

『そんな顔しないでよ?心配しなくても、外に出たから結婚とか他の男と喋ったから結婚なんて言わないからさ。』

『…ホントに?』

『うん。』

『ホントのホントに?』

『本当に。』

鴨志田とデートか…、外に出られるのは気晴らしになるからいいけど…。

『どうしたの? 嬉しくないの? あんなに外に出たがってたのに。』

『嬉しいに決まってるだろ。けど…、』

響子は、言葉を濁しながら鴨志田の顔を見つめた。いつも見てきたはずの彼の顔が、今は全く知らない人間の顔に見えた。

『…けど?』

この部屋を一步でも外に出れば、もう此処へは戻ってこれない気がした。

『……なんてな。そんなわけないか。いいよ、明日デートしてやる。』

『本当?…良かった。断られるんじゃないかと思ってヒヤヒヤしたよ。』

心底嬉しそうに笑う鴨志田が、なんだか可愛く見えてつられて笑った。

『そんなデートしたかったのかよ?』

『うん。だって、生まれて初めてのデートだもん。』

『ええ!?!』

『…そんでもって、最初で最後のデートだね。』

『別に最後じゃねえだろ? デートぐらいならしてやらないこともねーよ。ま、お前の奢りだけだな。』

『うん…そうだね。』

呆れるぐらいに楽観的主義のあたしが、この時の鴨志田の心情など知る由もなく、明日を迎えるのだった。

「なあ…一つ聞いていいか?」

「なに?」

「デートの場所って…ここ?」

「そうだよ?」

「そっか…ここねえ…」

そういうながら響子は前を見た。彼女の目に映ったのは、楽しそうに手を繋ぐ若い恋人達や家族連れが目立つ、古びた小さな遊園地だった。

「…いやだった?」

前を向いたまま何も言わない響子が、この場所に嫌気をさしたのかと勘違いした鴨志田が、眉を八の字にしてそう尋ねてきた。

「ううん、そうじゃねーよ。ただ、意外だと思った。」

「意外…?」

「お前は、遊園地なんて柄じゃねーからな。そっか…遊園地か。何年ぶりかな。なんかテンション上がるな。」

「……………」

「ん? どうした?」

「ううん、何でも。」

「そうか? …ん、あそこが入り口だな。よし、まずは絶叫系から行くぞ!!」

「……うん。」

入り口に駆け出す響子の後を追いつつくりと歩いた。

あのゲートをくぐれば、もう後戻りはできない…。鴨志田はある決意を持って臨んでいた。その決意とは、ふたりの関係を今日を境に全て解消することだった。

別に嫌になったわけじゃない。嫌になるわけがない。今、ここでこの人は俺の運命の女なのだと宣言したいくらいに愛している。でも、駄目なのだ。鴨志田自身には、もうどうすることもできないほどにまで事態は悪い方に進んでしまっていた。

けど、今ならまだ間に合う。彼女を傷つけてしまう前に目の前から去ろう。あの喧嘩の時は未然に終わったが、次がそうとは限らない。自分の意のままにならない響子だからこそ愛していたのに、今じゃ意のままにならないのが憎いと思ってきている自分が怖くて仕方なかった。

「…しだ？」

「……………」

「鴨志田!!」

「…な、なに？」

「なにつて…それはこっちの台詞だっつーの？ すごい眉間に皺寄せてなに考えてんだよ？」

「いや…なんでも。ゴメン。」

「……ま、いいけど。それより早く入るぞ？」

「うん…、入ろう。」

今日は、思いっきり楽しむんだ。一生忘れない思い出を作るって決めたじゃないかと、決意を胸に鴨志田は前へと一歩踏み出した。

「ああ…久しぶりに我を忘れてはしゃいだな。」

楽しい時間はあっという間に過ぎ、気がつけば太陽は夕日に変わ

っていた。

「あんな響子さん初めてみたよ。」

いい思い出になったと笑いながら買ってきた缶コーヒーを手渡した。

「サンキュ。恥ずかしいよな？いい年した女がさ。」

「そんなことないよ？俺は……、」

「ん？」

「…また、好きになった…。」

「…え？なんて？ごめん聞こえなかった。」

俯いたまま小さくポツリと呟いた声は、周りの音に掻き消された。

「ううん、何でもないよ。それよりさ、最後にあれ乗らない？」

「あれって？……あ！」

鴨志田が指した方向を見ると、大きな観覧車が飛び込んできた。

「観覧車か…。」

「ね、乗ろ？」

「よし、乗るか！！」

インディゴブルーの空に輝くネオンが二人を照らしていた。

「うわぁ〜…見てみろよ。すげー綺麗だぞ!!」

「ああ…綺麗だ。」

ゆっくり登っていく観覧車から見えた景色は、とても美しかった。それと同じ…いや、それ以上に夜景を見つめる響子の横顔は見惚れるほど美しくて…今、自分は世界で一番の幸せ者なんだろうなと鴨志田は思った。

「ねえ…響子さん。」

「ん？」

「ジンクスって信じる？」

「ジンクス?…なんでいきなりジンクス？」

「この観覧車の一番上でキスしたカップルは、どんなに愛し合っているにも必ず別れて、永遠に結ばれないんだって。」

「結ばれないのか?普通逆だろ?てか、何でそんなこと知ってるだよ?」

「さっき、自販機で通りすがりのカップルが言ってた。」

「そんなの迷信だろ?」

「そうかな。」

そうだよと、夜景を見ながら鼻で笑い飛ばす響子。

「じゃあ、試してみる？ 迷信かどうか？」

「…え……ッ!？」

振り向いた彼女の唇に鴨志田の唇が重なった。目を見開いた彼女に真っ直ぐ鴨志田の瞳がぶつかる。その瞳に総てを持っていかれそうだった。

「……これで俺たち別れたら迷信じゃないってことだね。」

「か、もし…?」

目の前の男は誰だ? こんなやつ…知らない。そう戸惑う響子。

「…なんてね☆ビックリした?」

「へ?」

「冗談だよ? そんなジンクスあるわけないじゃん。ただ、響子さんとキスしたかったから嘘ついちゃった♪」

「は、はあ〜? お、おまつ!!」

「かわいかったな〜…戸惑う響子さん。いいもん見ちゃった。」

「シバく!! 原型留めないくらいにボコボコにしてやる!!」

「はいはい、ゴメンネ？もうからかわないから怒らないですよ？そんなに暴れたら係員に怒られるよ？」

「クソッ…、家に帰ったら覚えてろよ！！てか、明日の弁当にお前の嫌いなも……！！」

「忘れないよ、ずっと…ずっとずっと覚えてる。」

言葉の途中、急に手を引かれ受け止められるように抱きしめられた響子の耳に、言い表すなら切なくて苦しくて泣きそうな、そんな鴨志田の声が届いた。言葉の意味の通りで、本当にこの瞬間を忘れないように、確かめるように回された腕は、よりいっそ力が込められていた。

あの後、二人して何も言葉を発せず、ただ手だけは離さず繋いだままゆっくり出口へと歩いていった。

響子は、不思議な気持ちだった。こうして、鴨志田と手を繋いで歩くなんて今までの自分じゃ考えられない。鴨志田だけじゃない。佐藤と別れてから付き合ってきた他の男の誰とも手を繋ぐという行為を拒んできた。それは、恥ずかしいとかそんな理由じゃなくて、ただ怖かった。繋いだ手を離れた瞬間に二人の距離も離れていきそうで怖かった。

『やっぱムリ。』

佐藤との最後の日、家路へと向かう帰り道に唐突に繋いだ手を離され言い放たれた言葉。

なんだか、今日はあの日ととてもよく似ていた。

「…守様、」

ゲートをくぐると、執事の藤堂が二人を待っていた。

「あれ？藤堂さん…どうしたんですか？」

問いかけに、彼は答えない。代わりに鴨志田がこう言った。

「藤堂は、響子さんを迎えに来たんだよ。」

「え？なんで？あたしは鴨志田の車が…」

最後まで言えなかった。鴨志田の目が表情が心があの時と重なっていたからだ。

「か、も「やっぱ無理だわ…。」

” チクッ ”

「ごめんね、今まで。」

「な、何が…？」

「何って、俺のワガママに付き合わせちゃったことだよ。」

「…ワガママ？」

「そ、新婚気分が味わいたくて響子さんに付き合ってもらったけ

ど、やっぱ無理みたい。何か鬱陶しくなってきた。」

” チクッ ”

「だから……だから、今日で終わり。全部おしまいにしよう。」

” チクッ ”

「響子さんは、藤堂が家まで送って行くから。本当は、俺が送って行きたいところなんだけど……ごめん、この後外せない用があるから。」

” チクッ ”

「明日からは、もう顔も合わせることないと思うけど……、元気でね。」

鴨志田は、ソッと手を差し出した。最後の握手をするために。だが、響子は俯いたままその手を取ろうとはしない。そりゃそうだと、差し出した手をゆっくりと引いた。

「響子さん、今まで楽しかったよ。…本当にありがとう。」

「……あたしも、」

「……え？」

響子もまた何かを決心したようにゆっくり顔をあげ、鴨志田を真っ直ぐ見据えてこう言った。

「あたしも、楽しかった。まあ、ムカつく事の方がダントツで多かったけどな。……いい思い出になったよ。」

無理やり笑顔を作って最後の悪態をつく。

「元気でな。」

今度は、響子が手を差し出した。

「ま、あれだ。あたしもお前も家庭を持つのは無理だってことがわかって良かったじゃん。だからさ、もし……どっかでバツタリ会ったら声かけろよ。お前の奢りで一杯飲みに行こうぜ。」

「……うん。」

繋いだその手の感触を温もりを決して忘れないようにと、互いにきつく握りしめた。そして、二人の手は、離れた。

愛するがゆえに、愛を恐れた臆病で愚かな者たちの恋は、約束の1ヶ月を待たずして終了するのだった。

つづく

Episode 16. 『終了』（後書き）

いつもありがとうございます。そして、これからよろしく願います（・▽・）

サブタイトルが、『終了』なので、最終回っぽい前書きにしましたが、まだ続きます。

引っつかか……るわけですね（笑）

さて、ようやく話は私が書きたかったところまで来ました。

このまま二人は別れてしまうのか否か、続きを早く書かなければいけないのですが、次の話は、パパとママの馴れ初めを書く予定なのです。

これは、この小説を読む上で重要……という訳ではないのですが、書きたいので書きます（・▽・）
なので、続きはしばしお待ちを。

さて、恒例の補足説明と参りましょう。

今回は、なぜ鴨志田くんがデートの場所に遊園地を選んだかという
と、会社の女性社員全員に『初めてデートした場所はどこですか？』
というアンケートを取り、結果、一番多かった遊園地を採用した
からです。

そして、その時、観覧車でキスすると本当は永遠に結ばれるという
ジンクス情報をゲットしたのです。

それでは、次回に

サヨナラ（・▽・）

Episode 17. 『太陽』 (前書き)

こんばんは (・∀・)

夜遅い更新で申し訳ないですが、続きが出来たのでどうぞ。

この前、後書きで書いてた通り、

パパとママの馴れ初め秘話になっております (・∀・)

暇つぶしにでも読んで下さったら幸いです。

それでは、スタート

Episode 17. 『太陽』

『美しい君によく似合う。』

『君の輝きには遠く及ばない。』

そんな言葉と共に、沢山の真っ赤な薔薇に囲まれた私。皆、自分の薔薇が一番だと競い合うように私に花束を手渡す。

受け取る薔薇は、とても綺麗で……でも、それだけだった。

そんな中、沢山の赤に負けないくらいに一つ、黄色に輝く花があった。その花を持つ者が、まっすぐ私の前に立った。

『あなたは、僕にとって太陽のような人です!!』

そう笑って、でも、手は震えて一輪の向日葵を渡してくれた。私は、それを受け取りながら涙を流した。

『ど、どうしたんですか!?!』

いきなり泣き出した私に慌てふためくあなた。何か気に障ったのかと言ったけど、周りがあるたの花が気に入らないのだと嘲笑っていたけど……、そうじゃないの。その花が生まれて初めて目にしたくらいに綺麗で、嬉しくて、嬉しくて、涙が勝手に溢れてきたのよ。

『泣かないで、あなたが悲しいと僕も悲しいです……』

本当に悲しそうな顔をして心配してくれるあなたを見て、また泣いた。

神様、私はどうやらとんでもない人と出逢ったみたいです。きつ

と、この人が私の……、

今からする話は、私が生涯をかけて愛すると誓った人との話。

『立花先輩!! こんにちは!!』

『あら、木ノ下くん…こんにちは。』

休日の街中で偶然逢った私と彼との関係は、大学での先輩、後輩というものだった。それと同時に同じサークルにも属していたので仲良くなるのにそう時間はかからなかった。

先輩だからという理由で、いつまでたっても苗字で呼ぶ律儀な彼に、苦笑しつつ挨拶を交わした。

『どうしたの、こんなところで?…もしかしてデート?』

『ち、違います!!僕、その花屋でアルバイトしてて…今、配達から帰ってきたんです。』

『へえ…花屋でね。珍しいわね、男の子が花屋でバイトって。』

『よく言われます。友達にも女の人みたいだってからかわれて。』

でも、僕ホントに花が大好きで…だから、気にしないでやってます。

』

結構、神経が図太いんでと、笑う彼に、ゆうこは少しだけ驚いた。サークルでは、どちらかというとあまり目立たない地味な彼が、なんだか少しだけ輝いて見えたからだ。

『立花先輩は買い物ですか？』

『私？私は…『ゆうこ！』』

私の言葉にかぶせるように名前を呼ばれ、振り返った。

『悪い、待たせた。』

そう言いながら駆け寄ってきた私の恋人に、彼は軽く会釈をした。

『正広、遅かったわね。』

『悪い…仕事で長引いて…誰そいつ？』

『大学の後輩よ。偶然逢って話をしてたの。』

『こんにちは、木ノ『ふうん…てかさ、なんか食べにいこうぜ。』

俺、腹が減りすぎて死にそう。』

故意に挨拶を遮ぎられた彼は、私の恋人が私と親しげに話していた自分に腹を立てているのだと気づき、それじゃあ…と、律儀に一礼して花屋がある方へと足早に帰って行った。

『…ちょっと、今の態度なんなの？』

『は？何が。』

彼が完全に見えなくなってから、私は先ほどの彼に対する無礼を咎めた。

『すごく、感じ悪い。やめてよね…性格悪い男と付き合ってるなんて思われたら、私の人格疑われるでしょ?』

『どういう『悪いけど、あなたとは今日でお終い。』

突然の別れを告げられ呆然と突っ立つ元恋人に目もくれず、さよならと吐き捨て、私はその場を後にした。

遠くからクソ女と罵倒する声が聞こえたが、全くその通りなので気にもしなかった。

普段の私は、知的で容姿端麗な優しい非の打ち所のない先輩を演じているが、実際の私は、男を金に、友達を自分のステータスにしか見ないクソ女だった。

自分でいうのも何だけど、昔から美しい外見のおかげで男には不自由しなかったし、そのおこぼれをもらおうと友達ってやつも自然と集まってきた。誰も私の内面を必要とはせず、また私も彼らの内面を必要としなかったので、互いが付き合いやすいよう偽ることで人間関係を簡略化してきた。

私の周りは偽りだらけで溢れていた。

『てめえみたいな女、こっちから願い下げだ!!』

『あらそう?よかった。』

『そうやって人を馬鹿にしゃがって…!!』

『は?馬鹿に馬鹿扱いして何が悪いの?…そんなこともわかんねーのか馬鹿が。』

『な!?!』

突然、口調が変わった私にうろたえる元恋人。実は、中学時代少しだけ悪の道へ猪突猛進した経験があった。

『つーか、手はなせよ? いつまで触ってんだ? ぶっ殺すぞ?』

だから、たまに本気で腹が立った時に口調が変わってしまうのだ。私の豹変振りに驚いた元恋人は、覚えてろよと捨て台詞を残し、そそくさと走っていった。

『フン、負け犬が…』

私も家へ帰ろうと振り返ったその時、目をこれでもかというぐらいに丸くし、恐らく今の会話を聞いていたであろう彼が、未知との遭遇のような表情でこちらを見ていた。

しまった…と、心の中で舌打ちをし、大きなため息をついた。よりによって…コイツに見つかるとは…などと思ってみても、もはや後の祭りなのでバラされないよう脅しておくかと、いまだに固まっている彼の元へと歩みを進めた。

『おい。』

『は、はい!?!』

『今、見たこと全部忘れろよ?』

『へ!?!』

『いいな？忘れるよ？これが、あたしの本性なんてよそで口外してみろ？お前もぶっ殺すからな？』

分かったなど、念押しして彼に言いそのまま横を通り過ぎる私に、小さな声で、でもきっぱりと忘れないと呟いた。

『……は？今、なん『忘れません！！それが本当の立花先輩の姿なら、僕は…僕は忘れたくないです！！』』

突然の彼の態度に、今度はこちらが目を丸くし固まった。

『先輩は、とても綺麗で…花のように綺麗で。みんな、薔薇のようだって言います。僕も確かにと思ってました。』

『え？なに？急に？？』

『でも、違いました…。僕たちに見せる先輩は、薔薇じゃなくて鬼灯だったんです。けど、今やっと鬼灯じゃない先輩を見せてくれて…それを忘れるなんて、僕、嫌なんです！！』

『いや、意味分かんないから！？…ちょっと！！』

そう叫ぶと彼は、そのまま走り去ってしまった。残された私は、ただ呆然としていた。

”鬼灯じゃない先輩”

そのトンチンカンな言葉の意味を知りたくて、まっすぐ家路につくのをやめ、図書館に寄り道をした。花言葉と記された本を手に取り、鬼灯のページを開いた。そこに書かれていた文字を手でなぞり

声に出して読んだ。

『い、つわり…』

偽り、そう確かに書かれていた。彼が言いたかったのはこのことだったのだ。

『アイツ…本当のあたしを見ようとしてくれてたんだな。』

なぜだか少し嬉しかった。

あの日を境に、私と彼の関係が少しずつ変化していった。大学の先輩、後輩という立場は変わらなかったが、確かに何かが変わっているのが分かった。

その証拠に、以前は律儀に苗字で呼んでいた彼が、今じゃ名前で呼んでくれるようになった。

彼といると自然体でいられるから良い。それは、本性を知られているから気兼ねなく過ごせるからなのかもしれないが、それ以上に楽しいと思える自分がいた。

いつでも、どこへ行くにも一緒…いつしか、私と彼は付き合っているのではないかと、周囲に誤解を与えるほどの仲良しになっていた。

『木ノ下くん…、ずっと前から好きでした。付き合って下さい。』

そんな時、偶然にも彼が同級生に告白されている場面に遭遇した。美しいとまではいかないけど、とても女の子らしくて可愛い子だった。

（あたしとは、正反対…）

自然と心に出した言葉に戸惑いながらも、付き合うのだろうかど、盗み聞きはよくないことと知りつつ、彼の言葉を待った。

『ありがとう。あなたみたいな可愛い人にそう言ってもらえて嬉しいです。』

その言葉が胸に深く突き刺さった。そんな風に笑いかけないでと叫びたかった。

『じゃあ、つき』でも、ごめんない。あなたとは付き合えませんか。』

本当に申し訳なさそうに何度も頭を下げる。

『どうして…？ やっぱり、立花先輩と付き合ってるから？』

『違います。ゆうこ先輩は恋人じゃないです。』

はつきり言われる事がこんなに辛いだなんて、今までの私は知りもしなかった。

『僕、好きな人がいるんです。入学した時から…ずっと、その人だけを見てきました。だから、あなたとは付き合えません。』

『そっか…木ノ下くんの想いがその人に届くといいね。』

『ありがとう。実はね、今度の聖夜祭でその人に告白するんだ。』

『そうなの？その人と木ノ下くんが上手くいくように私も応援するよ。』

応援なんか出来ない。私にはあの子のように笑えない。これ以上、誰かのことを想っている彼の声を聞くと、胸が張り裂けそうに逃げようとしてその場を後にした。

次の日から、彼を徹底的に避けた。偶然会わないようにいつもと違う道を歩いたし、サークルにも顔を出さなかった。

彼と顔を会わせなくなってから十日が経ち、大学で毎年行われている聖夜祭の日を迎えた。

聖夜祭とは、毎年、12月23日に綺麗に着飾った男女が夜の大学に集まり、飲み食いしながら楽しく話をしたり、また、想い人に愛を告白したりする、いわば合同コンパのような祭りだ。

最初は参加する気などなかったが、家でウジウジと考えるよりは思い参加した。

『今日は一段と綺麗だね。』

『…ありがとう。』

『この薔薇は君には適わないが、受け取って欲しい。』

そう言って花束を差し出す。これで、5人目。想い人に告白する際、赤い薔薇を贈るというルールがあり、答えがNOであった場合でも、敬意を表するという意味で、花は受け取らなければいけない。だった。

差し出された花束を受け取りながら、私はごめんないと伝えた。

もう帰ろう…、自分が今ここに立っていることが、無意味なものに思えてなんだか急に情けなくなった。さっさと残りを受け取ろう…そう決めて顔を上げた私の目に飛び込んできたのは、沢山の赤に負けない、いや…それ以上に輝く一輪の黄色い花だった。ゆっくりと私の視線が、その花から持つ者の顔へと移る。

『…：…な、んで…』

よく見知った、本当は逢いたくてしかたなかった顔がこちらを見ていた。たった十日なのに、随分と長く会わなかったような感覚に陥った。

驚く私をよそに彼がまっすぐ私の前に立った。

『あなたは、僕にとって太陽のような人です！！ずっと前から好きでした。…ゆうこさん、受け取って下さい。』

そう笑って、でも、手は震えて一輪の向日葵を渡してくれた。

『ど、どうしたんですか！？』

受け取ったと同時に泣き出した私に慌てふためくあなた。

『…何か気に障ったんでしょうか？』

『向日葵なんて安っぽい花が気に入らないんだよ』

『そうそう…それに、聖夜祭のルールは薔薇だろうが？そんなことも知らねーのかよ？』

『す、すみません！…向日葵『ち、がうわ…』』

そうじゃないの。その花が生まれて初めて目にしたくらいに綺麗で、嬉しくて、嬉しくて、涙が勝手に溢れてきたのよ。

そして、その花言葉を知っているから…。

『泣かないで、あなたが悲しいと僕も悲しいです…』

『悲しくて泣いてるんじゃないわ。…いや、そうじゃないな、嬉しくて泣いてんだよ。』

もう他人の目なんてどうでもよかった。私には彼がいてくれるから、偽る必要なんてない。いつもの口調から本来の言葉へと変わった私に周囲はどよめいた。

『京介、こんな私でよかったら付き合ってください。』

『…はい、喜んで。』

にっこりと笑う彼の顔こそが太陽に見えて、とても眩しかった。神様、私はどうやらとんでもない人と出逢ったみたいです。

『実はね、』

その日の帰り道、彼が唐突にこう言った。

『ゆうこさんとは、昔、一度だけ逢ってるんですよ。』

『…え?』

『僕が、小学生だった頃、学校の帰り道で不良に絡まれた事があったんです。』

そういうと、当時の事を話し始めた。

『おいガキ、金持ってたんだろ? 出せよ。』

『言うこと聞かなきゃ殴るぞ?』

『あ、あの…持っていない、です。』

学校の帰り道、地元で有名な中学生の二人組に運悪く捕まった僕は、お金を出せとカツアゲにあいました。

しかし、学校へ金品を持って行くのは校則違反で、それを律儀に守っていた僕は、本当にお金を持っていなかったのです。

『ああ? んなわけないだろうが?』

『もういいや殴ろぜ。』

信じてもらえず、殴られると目を瞑った僕の耳に透き通った綺麗な声が届きました。

『ガキ相手に何やってんだよ? クソ野郎。』

『ああ？誰だてめえ？』

『誰だっていいだろうが？クソには関係ねーよ。』

『んだとコラ！？』

すぐく乱暴な言葉で驚いたけど、恐る恐る目を開け、声のする方へと向いたら、もっと驚きました。

『あたしはな、てめえらみてーなクソが一番嫌いなんだよ？』

燦々と輝く太陽のような金色の髪をした女の子が、そこには立っていました。

『お、おいコイツ立花じゃね？三戸中の。』

『え！？あの立花かよ！！』

『なんだ…あたしの名前知ってんじゃねーか。』

『おい、行こうぜ。殺されちまう！！』

女の子の名前が分かったと、二人組は顔を青ざめ慌てて逃げて行きました。

『フン、弱いくせに粋がつてんじゃねえ…負け犬が。』

『あ、あの！！』

『……ん?』

『助けてくれてありがとうございます。』

女の子に駆け寄り、僕は助けてくれたお礼を述べました。すると彼女は一言こういいました。

”おう、気にすんな”

『その時、そう言って笑った女の子の笑顔が、やっぱり太陽みたいに眩しくて一瞬にして恋に落ちました。』

すべてを語り終わると、彼は私に向き合いこう続けた。

『向日葵の花言葉…知ってますか?』

私は、口には出さずただ頷いた。

『僕は、昔も今も…その向日葵のようにあなただけ見つめています。』

そして、これからも…と、彼が照れながら私を抱きしめて、ソッと囁いてくれた。

私は、また嬉しくて彼の腕で泣いていた。

「なあ、母さん。」

「なあに? 響子ちゃん。」

「なんで毎年12月23日に、親父は母さんに向日葵をプレゼントするの？」

記念日でもないのにと、向日葵を見ながら響子が怪訝そうに呟く。そんな娘に母はにっこり笑いながらこう言った。

「それはね、」

「それは？」

「うふっ、やっぱり秘密☆」

「…なんじゃそりゃ。」

母親の態度に若干イラッとした響子。

「じゃあ、なんで母さんは親父に白い薔薇あげるの？しかも枯れたやつ。」

イジメ？親父イジメなのと、少し不憫に思い再度尋ねてみた。

「あら、響子ちゃん枯れてるからって悪いイメージにとっちゃダメよ？」

「え？何か意味あんの？あ、もしかして、浮気したらお前もこうなるぞ的なメッセージ？」

母さんならやりかねないと、響子は身震いした。そんな娘の態度に、失礼しちゃうわと苦笑いを浮かべた。

「違うわよ、その薔薇の意味はね、」

「意味は？」

「…やっぱり、秘密。」

「何だよそれ！？もういいよ！！」

何を聞いても秘密としか言わない母に怒った響子は、モヤモヤした気持ちを解消すべく、幸に八つ当たりしに行くのだった。そんな娘の背を見送りながら、響子ちゃんもついに第二次反抗期かしらと、一人ズレた事を考えている母だった。

『なんで母さんは親父に白い薔薇あげるの？しかも枯れたやつ。』

先ほどの娘の言葉が頭をよぎった。その問いかけに笑みを漏らしながら、そっと呟いた。

「…それはね、ママがどんな時でもパパのそばにずっといるわって誓うためのお花なのよ。」

”生涯を誓う”

だって、それがこの花の花言葉なんだから。昔も今も、これからも…、私はあなたと共にあるわ。

テーブルの上に飾られた一輪の向日葵と枯れた白い薔薇を見つめて、ゆうこは優しく微笑んだ。

う
う
へ

Episode 17. 『太陽』（後書き）

いつも、ここまで読んでくれてありがとうございます（・∀・）

いかがでしたか？

パパとママの話は？実は、ママがパパより3つ先輩だったとか、初めて出会ったのは小学5年生の時だったとか、自然に織り交ぜられたらよかったのに、いかんせん私に文才が……と、ただただ嘆くばかりです（・∀・）

さて、悲しみのまま補足説明へと進みます。

今回は、現在のママに至るまでの説明です。

簡潔に書くと、

出会い、優しい

正体バレる、怖い

仲良くなる、姉御的存在

付き合う、ちよつとツンデレ

結婚する、デレデレ

現在、デレヤンデレ進行中

となります。

ちなみに、パパと付き合ってから、優しい人柄に惚れて言い寄ろうとする女達を陰で排除してき時のママは、鬼のようでした。

さて、次の話の更新はいつになるや分かりませんが、

また、次回に

サヨナラ（・∀・）

P・S・

もし、これを読んで感想とかいただけるなら、ぜひよろしくお願い

します。

この人のあんな話読みたいとかでもいいんで。

書けるかどうかわかりませんが、出来る限り頑張ります（・▽・）

Episode 18. 『転機』 (前書き)

こんばんは、

今年最後の更新であろう話が出来たので、読んでやって下さい。

話が短い上に、慌てて直したのでおかしい点があるかもしれませんが、よろしく願います（・∀・）

それでは、スタート

Episode 18. 『転機』

『ゴフツ…あ、たらしい…バイト!?!』

『チツ…汚ねーな、飯飛ばすんじゃないよ!?!』

待ちに待った休憩時間に、母親特製（父親の弁当のついでに作ってくれた）スタミナ弁当を勢いよく詰め込みながら食べていた幸だったが、親友で雇い主の学の唐突な一言で、口に入っていた米を彼に向けて噴射するのだった。

『ご、ごめん…!でも、おまえが急に变なこと言うから!?!』

『別に变じゃねーだろ?バイト一人雇うくらい?』

『だ、だって!!新しいバイトの子って…!?!』

『ん?ああ…女が入るのが珍しいのか。』

『珍しいなんてもんじゃないよ!?!俺が知りうる中で初めてじゃん!?!』

『そうだっけ?』

『そうだよ!?!俺が女の子雇おうって頼んでも、ずっとシカトしてたじゃん!?!』

なんで今更と、学に詰め寄る。

『別に、お前の頼みをシカトしてたわけじゃねーよ。ただ、バイトの面接に来る奴が男だったただけだろ。まあ、今回も募集かけるつもりだったんだが、それならバイト探してるやついるからって祐輔に頼まれてな。』

『祐輔に?』

『そ、だからそいつ雇うことにした。』

面接すんのも面倒くさいしなと、ポケットから煙草を取り出し火を着けた。

『そっかそっか…祐輔がねー!! 気が利くいい奴だなー!! 今度、アイス奢ってやろっ♪』

学と同じく同級生で友達の祐輔の姿を思い浮かべ、心から感謝する幸だった。

『なあ、学…その子何歳?』

『俺たちとタメらしい。』

『つーことは、25か…。楽しみだなあ♪』

『楽しみにするのは勝手だが、手え出すなよ?』

目を細め幸せ色に浸る幸に、そう忠告する学。

『え!?! わ、わかってるよ!?! 手なんか出さねーよ!?! 出すわけ

ねーじゃん!?!』

鋭い学の指摘に、声を上擦らせながら答えた。

(出す気満々だったな…)

幸の考えなどお見通しな親友は、煙を吐き出しながらそう思うのだった。

これが、3日前のことである。

『つーわけで、今日からウチで働いてもらうことになった小林…なんだっけ?』

『のぞみ。』

『ああ…そうそう。小林のぞみさん、おまえら仲良くしろよ。』

幸が待ちに待った友達の知り合いの女の子は、

『よろしく。あ、最初に言っとくけど女だからってナメてたらシメるんで。』

『はい。よろしくおねがいします。』

『……………』

ムラのない綺麗な金色に髪を染め、背中に龍の刺繍を施したスカジャンを纏い、その声は酒焼けですかと思わせるぐらいのハスキーボイスな気合い十分の女の子だった。

『ん?どうした幸? 念願の女だぜ?』

『幸さん、きんちょーしてんですかー?』

女の子大好きな幸が、未だに黙ったままのぞみを凝視するのを見て、皆口々に尋ねる。

(念願の女って言ったて……)

『あ?なにガンたれてんだ?』

(ややや、ヤンキーじゃん!? 絵に描いたようなヤンキーじゃん
!!)

てつきり、可愛らしい女の子らしい子がやってくるに違いないと
思っていた幸だったが、自分の母親と同じ臭いしかしいのぞみに、
ただただ戸惑うばかりだった。

『な、なあ…町田。』

『なんですー?』

『あ、あの人…ヤンキーだよね…?』

出来るだけ小さい声で、隣に立つバイト仲間で高校生の町田悟に
そう尋ねる。

『はあ…みたいですわねー。』

『こ、怖くない?めっちゃ、こっち見てるんだけど!? 穴があき
そうなんだけど!?!』

『んー…別に怖くないです。ウチの学校の女子みんなあんな感じなんで。』

『お、おま、どんな学校に通ってんの!?!』

しれっという悟に、そうツツコミをいれる幸。そんな二人に、何をコソコソやってんだと学が呆れながら注意した。

『ほら、お前らも小林にちゃんと名前を言え。』

『あ、バイトの町田悟です。わかんないことがあったら、遠慮なくどうぞ。』

『お、同じく…バイトの、木ノ下幸です。わかんないことがあったら、遠慮なく町田く『木ノ下幸?』…ヒィィ!?!な、なんですか!?!』

突然大きな声で、しかも鬼の形相で自分の名前を呼ぶのぞみに、怯える幸。

『てめー…その名は忘れねーぞ?半年前まで麻美の男だったろ?』

『へ?あ、あさみ?』

『N大に通ってる小林麻美だよ?…まさか、てめーが付き合ってた女忘れたわけじゃねーだろうな!?!』

『い、いいえ!?!忘れてません!?!覚えてます!?!たとえ全てを

忘れたとしても、それだけはずっと覚えてます!!』

女の子なのに、どこにそんなパワーがあるの?と、疑問視するくらいに力強く胸ぐらを掴まれ、身動きが取れない幸は、必死になって『麻美』という人物を思い出していた。

『あ、麻美ちゃんね…あの凄くかわいくて、黒髪がとても似合う…胸のおお『ああ!?!』…いや、なんでもありません!!とにかく凄くかわいかった、あの小林あさ……………小林?』

(あれ?小林って…目の前の人小林じゃね?えっ…なんで?あれ?そーいや間近で見たらすげー目元が麻美ちゃんにそっくりじゃね?えっ…どうして?あれ?目元だけじゃなくて、口元もなんか麻美ちゃんに似て……………るんですけど!?!?)

『ようやく分かったか?うちの妹が世話になったな?あたしは、てめーみたいなカスに振られた麻美の姉だよ?』

ダラダラと冷や汗を流す幸に、のぞみは、ニヤリと人が悪そうな笑みを浮かべてそう言い放った。

『ふ、振られた?ちがつ…違います!!振られたのは俺で…』

『ああ?なに言ってんだよ?てめーが二股かけて麻美振ったのは周知の事実なんだよ!!』

これでもかというぐらいの力で胸ぐらをリフトアップされた幸は、苦しみながらも再度違いますと反論した。

『往生際のわりー野郎だな？……謝れば許してやったのに、一発シメとくか。』

『ほら、幸。小林に謝れ。』

『そうですよー。得意の土下座した方がいいですよー。』

『いや、だか、ら…おれ……』問答無用、言い訳却下!!』

しかし、日頃の自分の行いのせいで、誰にも信じてもらえなかった。

『死ね、カス野郎!!』

『ぎ、キャアアア!!』

のぞみの気合いの入ったヘッドバットで、一瞬にして天に召される幸だった。

これが、昨日のことである。

「いやあく昨日は悪かったな!! 帰って麻美に聞いたんだけど、二股かけて振ったの麻美なんだってな!! ほんとごめん、早とちりだった!!」

「いや、だから…昨日そう言いましたよね? 俺、ちゃんと言いましたよね?」

「あ、頭大丈夫? あたし石頭だからさく痛くなかった?」

「痛いに決まってるでしょ? てか、今もガンガン響いて視界がぼやけて見えます。」

「でもさ、誤解も解けた事だしこれからは同じバイト仲間としてよろしくな。」

「わだかまりは一生解けませんけどね。」

いけしゃあしゃあと話すのぞみに、生まれて初めて女の子に対して苛立ちを覚える幸。

「んだよ、感じわりーな。こっちがこんなに謝ってんのにネチネチと：男なら黙って許せよな。」

「そうだぞ幸？小林が頭下げてんだから許してやれよ。」

「男らしくないですよー？」

「うるせー！！俺がこの人にやられてる間、何もしないで見てた奴が男だなんだ言うんじゃないー！！」

のぞみを指差しながら、悟に食ってかかる幸。

「人を指差すんじゃないよ。」

「ぎゃあああ！！おれ、折れた！！」

「は？そんなんで折れるかよ？なにこの男？麻美のやつこんなんどこが良かったんだよ？」

「暴力反対！！ゴリラ女！！……麻美ちゃんは凄くかわいかったのに、なんでお姉さんはこんな……」

涙目で変な方向に曲がった指をさすりながら、これまた生まれて初めて女の子に悪口を吐く幸。

「は？こんな何だよ？」

のぞみは、威圧感丸出しで続きを促した。

「うっ…そんな態度取ったって…俺は、負けな「ああ？聞こえねーよ？もつとでけー声で話せよ？」…な、なんでもありません！！」

指をこれでもかというほど鳴らして戦闘態勢に入るのぞみの姿が、かつて自分が反抗期を迎えた時、父親にした仕打ちが母親にバレた時の姿と重なって、恐怖のあまりただただ泣き寝入りするしかない哀れな幸だった。

幸曰わく、絶対に結婚したくない女との出逢いが、後々の自分の人生を大きく変える事になるとは、この時は思いもなかった。

つづく

Episode 18. 『転機』 (後書き)

いつもありがとうございます (・∀・)
来年もよろしく願います (・∀・)

今回の話と平行に、反抗期話も書いていたんですが、どうもうまくまとまらないので先にこっちを載せました。
今後、小林さんと幸くんはどうなっていくのか……私の拙い文章力で一生懸命書いていきますのでそちらもお楽しみに。

番外編ばっか書きやがって……本編進める馬鹿って、思う方もいらっしゃると思いますが、本編は年明けから再開しようと思います。もうしばしお待ちを (・∀・)

さて、補足説明ですが
学くんのお店には、今回入った小林さんを除いて、
幸くんと町田くんと
あと一人バイトくんがおります。

町田くんより一つ年下の彼が作中に出てくるかは私の気分次第で (・∀・)

さて、今年も残すこと半月ですが、皆さま風邪など引かぬよう元気で新年をお迎え下さい。

それでは、また

サヨナラ (・∀・)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0821q/>

結婚逃走曲

2011年12月15日22時54分発行